

新堂遺跡 V

—京奈和自動車道「御所区間」建設に伴う発掘調査報告書—

2021年9月

奈良県橿原市教育委員会

序

ここに新堂遺跡の発掘調査報告書を『橿原市埋蔵文化財調査報告 第17冊 新堂遺跡Ⅴ』として刊行します。本書は、奈良県橿原市東坊城町に所在する新堂遺跡において橿原市教育委員会が平成19年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

橿原市西部では、京奈和自動車道の建設に伴う発掘調査により、縄文時代から中世にかけて、相次いで新たな遺跡が発見されています。新堂遺跡もその一つで、渡来系遺物を含む古墳時代中期の遺物が発見される等、多くの新知見が得られています。中でも古墳時代中期の渡来系遺物は国内外の研究者やメディアから度々注目される等、その重要性が広く知られています。

本書で報告を行う橿教委2007－5次調査では、古墳時代初頭の竪穴建物、溝、土坑等の遺構が確認されました。新堂遺跡南部においては、古墳時代初頭から集落が営まれていたことが明らかとなったのです。また、古墳時代中期にかけての遺跡の変遷過程も次第に分かりつつあり、当地域の歴史を考える上で重要な成果を得ることができました。

最後になりましたが、現地の発掘調査並びに本書の刊行にあたってご協力いただいた関係諸氏ならび諸機関に厚く御礼申し上げますと共に、本書が多くの方々に活用され、遺跡の重要性を周知する機縁となることを願います。

令和3年9月30日

橿原市教育委員会
教育長 深田展巧

例 言

- 1 本書は、奈良県橿原市東坊城町に所在する新堂（しんどう）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書で報告を行う発掘調査は、京奈和自動車道（御所区間）建設に伴って実施している。国土交通省 近畿地方整備局 奈良国道事務所の委託を受け、奈良県教育委員会の指導のもと、奈良県橿原市教育委員会が発掘調査及び整理・報告作業を担当している。
- 3 発掘調査及び整理・報告作業にかかる費用については、国土交通省 近畿地方整備局 奈良国道事務所が負担している。
- 4 現地調査期間は平成 19（2007）年 11 月 9 日～平成 20（2008）年 3 月 24 日である。
- 5 遺物整理・報告書作成期間は平成 30（2018）年度～令和 3（2021）年度である。
- 6 現地調査時の体制は、橿原市教育委員会 文化財課長 齊藤明彦、課長補佐 吉岡澄久、係長 濱口和弘、主査 平岩欣太、嘱託 笥和也である。現地調査は平岩・笥が担当している。
また、遺物整理時の体制は文化財課長 竹田正則、課長補佐 露口真広・松井一晃（令和 2・3 年度）、統括調整員 平岩欣太・横関明世、副統括 齊藤明彦（平成 31～令和 2 年度）、主査 石坂泰士、技師 上井佐妃（令和 2・3 年度）である。整理作業は平岩・齊藤・石坂・上井が主に担当した。
- 7 発掘調査及び整理作業を実施するにあたって、地元各位をはじめ、国土交通省近畿地方整備局奈良国道事務所、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、桜井市教育委員会より多大な御協力を得た。記して感謝申し上げたい。
- 8 出土遺物のうち土器の整理・報告については、桜井市教育委員会 橋本輝彦氏に格別のご指導を賜った。記して感謝申し上げたい。
- 9 出土遺物をはじめ調査記録は、橿原市教育委員会で保管している。
- 10 本書所収の写真のうち、現場調査写真は調査担当者が撮影を行った。遺物写真は株式会社地域文化財研究所が撮影を行った。
- 11 本書の執筆は平岩・齊藤・石坂が分担した。それぞれの担当範囲は目次に記している。編集作業は石坂が主に担当した。

凡 例

- 1 本書で示す方位は座標北を使用した。座標値は世界測地系（平面直角座標第Ⅵ系）に基づく。
- 2 写真図版に掲載している遺物の縮尺率は任意である。
- 3 遺構・遺物の図面縮尺は各図に示している。
- 4 土層名における色調は『新版標準土色帖 24 版』（小山正忠・竹原秀雄 編著、日本色研事業株式会社 発行）を使用した。
- 5 遺構断面図の標高値はメートル表記である。小数点以下の記述が無い場合、小数点下の値は 0 である。標高値は東京湾平均海面（T.P.）からの値である。
- 6 遺物実測図の番号は、本書全体の通し番号で示している。図版の遺物番号もこれと一致している。
- 7 土器の実測図については、時期を問わず須恵器と陶質土器は断面を黒塗りで、その他の土器は断面を白抜きで、それぞれ表現している。
- 8 掲載している土器の拓本図は、特に注釈の無い限りは外面の拓本である。

目 次

序	i
例言	ii
凡例	iii
目次	iv
挿図目次	v
第 I 章 調査の経過	
第 1 節 調査に係る経緯	(石坂) 1
第 2 節 発掘作業の経過	(石坂) 2
第 II 章 遺跡の位置と環境	
第 1 節 地理的環境	(石坂) 5
第 2 節 歴史的環境	(石坂) 6
第 III 章 調査の成果	
第 1 節 調査の方法	(石坂) 10
第 2 節 基本層序	(平岩) 11
第 3 節 遺構	(石坂) 19
第 4 節 遺物	(石坂・齊藤) 42
第 IV 章 総括	
第 1 節 調査成果のまとめ	(石坂) 76
第 2 節 周辺の遺跡と環境	(石坂) 79
報告書抄録	(石坂) 80
図版	

挿 図 目 次

図 1	調査地位置図	5
図 2	調査地周辺遺跡地図 (S = 1/12,500。遺跡範囲は 2021 年度当初の内容)	7
図 3	調査地周辺の地形と発掘調査地点 (S = 1/2,500)	8
図 4	調査区区割図 (S = 1/800)	10
図 5	調査区北壁土層断面図 (S = 1/50)	12
図 6	調査区東壁北半部土層断面図① (S = 1/50)	13
図 7	調査区東壁北半部土層断面図② (S = 1/50)	14
図 8	調査区南壁土層断面図 (S = 1/50)	15
図 9	調査区西壁土層断面図① (S = 1/50)	16
図 10	調査区西壁土層断面図② (S = 1/50)	17
図 11	調査区西壁土層断面図③ (S = 1/50)	18
図 12	平安時代後期～鎌倉時代遺構配置図 (S = 1/400)	20
図 13	平安時代後期～鎌倉時代遺構平面図① (S = 1/200)	21
図 14	平安時代後期～鎌倉時代遺構平面図② (S = 1/200)	22
図 15	SD153 平面・断面図 (S = 1/40)	23
図 16	ST364 平面・断面図 (S = 1/15)	24
図 17	平安時代後期～鎌倉時代遺構 SP 断面図① (S = 1/40)	25
図 18	平安時代後期～鎌倉時代遺構 SP 断面図② (S = 1/40)	26
図 19	平安時代後期～鎌倉時代遺構 SK 断面図 (S = 1/40)	27
図 20	古墳時代中期遺構配置図 (S = 1/400)	28
図 21	SK190・SK202 平面・断面図 (S = 1/40)	29
図 22	古墳時代中期遺構 SK・SD 土層断面図 (S = 1/40)	30
図 23	古墳時代初頭遺構配置図 (S = 1/400)	32
図 24	古墳時代初頭遺構平面図① (S = 1/200)	33
図 25	古墳時代初頭遺構平面図② (S = 1/200)	34
図 26	SH345 平面・断面図① (S = 1/80)	35
図 27	SH345 平面・断面図② (S = 1/80)	36
図 28	SD249 断面図 (S = 1/40)	37
図 29	SD380 平面・断面図 (S = 1/40)	39
図 30	古墳時代初頭遺構 SK・SD・SX 断面図 (S = 1/40)	40
図 31	平安時代後期～鎌倉時代遺構 出土遺物 (S = 1/4)	43
図 32	耕作溝出土遺物① (S = 1/4)	44
図 33	耕作溝出土遺物② (S = 1/4・1/2)	45
図 34	SK190 出土遺物 (S = 1/4)	46
図 35	SK202 出土遺物① (S = 1/4)	48
図 36	SK202 出土遺物② (S = 1/4)	49
図 37	SK202 出土遺物③ (S = 1/4)	50

図 38	SD191 出土遺物 (S = 1/4)	52
図 39	NR200 出土遺物 (S = 1/4 · 1/2)	54
図 40	古墳時代中期遺構出土遺物 (S = 1/4 · 1/2)	56
図 41	中層遺構面精査時出土遺物① (S = 1/4)	57
図 42	中層遺構面精査時出土遺物② (S = 1/4)	58
図 43	NR170 出土遺物① (S = 1/4)	60
図 44	NR170 出土遺物② (S = 1/4)	61
図 45	NR170 出土遺物③ (S = 1/4)	62
図 46	SH345 出土遺物 (S = 1/4 · 1/2)	64
図 47	SD249 出土遺物 (S = 1/4)	65
図 48	SD310 · SD311 出土遺物 (S = 1/4)	66
図 49	SD380 出土遺物① (S = 1/4)	68
図 50	SD380 出土遺物② (S = 1/4)	69
図 51	SD380 出土遺物③ (S = 1/4)	70
図 52	古墳時代初頭遺構出土遺物 (S = 1/4 · 1/2)	72
図 53	下層遺構面精査時出土遺物 (S = 1/4 · 1/2)	74
図 54	調査区排水溝・攪乱掘削時出土遺物 (S = 1/4)	75
図 55	新堂遺跡・東坊城遺跡周辺の調査地と河道復元図 (S = 1/3,000)	78

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に係る経緯

本書は、京奈和自動車道建設に伴って実施した新堂遺跡（榎教委 2007-5 次調査）の発掘調査報告書である。

京奈和自動車道は、京都・奈良・和歌山を結ぶ自動車専用道で、国土交通省により各地で建設が進められている。奈良盆地内の京奈和自動車道は、令和 3（2021）年度当初時点で、大和御所道路「大和区間」のうち郡山下ツ道ジャンクションから榎原北インターチェンジまで開通・供用している。その南にあたる「御所区間」では残されていた御所南インターチェンジから五条北インターチェンジまでの区間が平成 29（2017）年 8 月に供用されたことで榎原高田インターチェンジ以南の区域が全線開通となり、奈良県と和歌山県の地域間連携に貢献している。

榎原市域における京奈和自動車道建設に伴う本格的な調査は、国道 24 号線より南において昭和 63（1988）年より断続的に実施されてきた。当教育委員会では奈良県教育委員会の依頼を受け、榎原バイパスと国道 24 号線の接続部から南の御所インターチェンジまでの距離約 5 km の区間を対象に、平成 13（2001）年度から平成 22（2010）年度にわたり発掘調査を実施した。同区間は大和高田バイパスと交差する榎原高田インターチェンジを境として、北が「大和区間」、南が「御所区間」となる。発掘調査を実施する区域の分担については、国土交通省、奈良県教育委員会、奈良県立榎原考古学研究所、大和高田市教育委員会、御所市教育委員会及び当教育委員会の協議の元で決定された。

当市域内における京奈和自動車道の建設予定地では、それまで本格的な調査が行われておらず、遺跡の詳細が不明、あるいは埋蔵文化財の包蔵地外とされてきた地域が大半であった。しかし京奈和自動車道建設を契機とする一連の発掘調査によって、遺跡の範囲・内容が変更される、あるいは新たな遺跡の存在が認識される発見が相次いだ。

当教育委員会では、調査年度を西暦で表し、その年度内に行われた発掘調査名称を年度-調査次数の形で示している。本書で報告を行う調査に対しては、榎教委 2007-5 次調査という番号を付与している。調査記録や出土遺物には、この番号を記して整理・保管している。

新堂遺跡は、「大和区間」と「御所区間」にまたがる範囲に位置する。本書で報告を行う発掘調査は、現在の榎原高田インターチェンジから南に約 150 m の地点での調査である。新堂遺跡の発掘調査は平成 13（2001）年度から平成 22（2010）年度にかけて、当教育委員会が実施している。調査開始時点では西新堂遺跡という名称の遺跡であったが、周辺における調査の積み重ねを受けて平成 17（2005）年 8 月に新堂遺跡への改称及び遺跡内容・範囲の変更が行われた。なお、新堂遺跡の範囲は平成 26（2014）年にさらに北西へと広がっている。図 2 の遺跡地図では令和 3（2021）年度末時点での範囲を示している。

榎教委 2007-5 次調査地点は、新堂遺跡の南端部に位置する。発掘調査時には、調査地の小字名・蓮池（はすいけ）から採って新堂遺跡 蓮池地区との名称も用いている。字・蓮池は南北方向に長い地割で、調査区はその東半部に位置する。なお、調査地の住所は榎原市新堂町ではなく、東坊城町に属している。

第2節 発掘作業の経過

本発掘調査は平成19(2007)年11月9日から平成20(2008)年3月24日までの期間実施した。実働日数は74日を数える。その間、作業員は延べ2262人を要した。調査の日々の記録は、以下の調査日誌抄録に掲げた。

平成19(2007)年11月9日(金)

調査区の設定を行い、北側より重機掘削開始。調査区壁面整形。調査区北壁沿いに排水溝を設定。調査区四周に順次排水溝を設ける。

11月12日(月)

引き続き重機掘削。重機掘削土搬出路となる東壁北半部を除く調査区壁面沿いを先行して掘り下げ。壁面整形。西壁北半の排水溝掘り下げ。

11月13日(火)

引き続き重機掘削。壁面整形。西壁中央、南壁排水溝掘り下げ。

11月14日(水)

引き続き重機掘削。壁面整形。南壁と東壁南半排水溝掘り下げ。東壁沿いから庄内式期の土器が集中して出土する。

11月15日(木)

重機掘削。壁面整形。東壁・西壁中央部排水溝掘り下げ。調査区南端部より人力によるすき取りと遺構精査開始。

11月16日(金)

重機掘削。西壁南半排水溝掘り下げ。遺構精査。

11月19日(月)

重機掘削。遺構精査。耕作溝の掘り下げ開始。

11月20日(火)

重機掘削。壁面整形。遺構精査及び耕作溝掘り下げ。調査区東半の攪乱を掘り下げ。中央の攪乱内より土坑(井戸か?直径1m前後)検出。遺構検出面からの掘り込みなのか不明、要検討。

11月21日(水)

重機掘削。遺構検出及び耕作溝掘り下げ。調査区南側西寄りの耕作溝上面より滑石製勾玉出土。

11月22日(木)

重機掘削。重機掘削土の搬出は本日で終了。遺構検出及び耕作溝掘り下げ。調査区南東部は河道か。

11月26日(月)

遺構精査及び耕作溝掘り下げ。調査区中央部で北東―南西方向の溝を検出。

11月27日(火)

遺構精査及び耕作溝掘り下げ。調査区北半は遺構面が一段低くなっており、厚さ0.1~0.2mのすき取りを行う。

11月28日(水)

遺構精査及び耕作溝掘り下げ。

11月29日(木)

遺構精査及び耕作溝掘り下げ。測量メッシュ杭打ち作業。

11月30日(金)

遺構精査及び耕作溝掘り下げ。

12月4日(火)

遺構精査及び耕作溝掘り下げ。

12月5日(水)

遺構精査及び耕作溝掘り下げ。北側から遺構配置図実測。

12月6日(木)

遺構精査及び耕作溝掘り下げ。遺構配置図実測及び耕作溝の遺物取り上げ。AM9:30~10:30、畝傍中学校生徒3名、松井技師引率で現場見学。

12月7日(金)

遺構精査及び耕作溝掘り下げ。遺構配置図実測及び遺物取り上げ。

12月10日(月)

遺構精査及び耕作溝掘り下げ。遺構配置図実測及び遺物取り上げ。

12月14日(金)

遺構精査及び耕作溝掘り下げ。遺構配置図実測及び遺物取り上げ。耕作溝完掘状況撮影の為、北側より表面清掃開始。

12月17日(月)

耕作溝完掘状況撮影の為、表面清掃。

12月18日(火)

引き続き表面清掃。バルコンを調査区外に移動。

12月19日(水)

シート外し。バルコン移動。表面清掃後に上層遺構完掘状況写真を4×5、35mmにて撮影。

12月20日(木)

昨日に続き上層遺構完掘状況写真を撮影。調査区南側の中層遺構検出状況写真を撮影。壁面シート養生。ピットの一段掘り下げ。

12月21日(金)

バルコン設置。調査区南半部の河道NR170検出作業と断割。調査区南西部の掘立柱建物と、北側の方形土坑の検出状況を撮影。調査区南東部の河道は断割の結果、下層遺構に伴うものである事が判明。

12月25日(火)

調査区南東部の溝の掘り下げ。先週下層に伴う遺構と判断したが、再精査の結果、中層遺構に伴う遺構と判断。古墳時代(布留式?)の土器が、各地区から遺物袋1/3~1/4程度出土。NR170の堆積(埋没)後に掘り込まれたと考えられる遺構から古墳時代中期の土器が出土。河道西側の斜向溝の掘り下げ。

12月26日(水)

調査区南東部NR170の掘り下げ。河道の西肩は、急な落ち込みとなる。河の埋土は、上部で微砂～砂であったが検出面より1～1.5m程掘り下げると、粗砂の割合が多くなる。遺物は相変わらず古式土師器がパラパラ出土する程度。間層に粘土層もなく、下位の方でも殆どが砂層である。

12月27日(木)

NR170の掘り下げ。畔以南を完掘。深さ2.5～3.0m。底付近の埋土は粗砂から5cm大までの砂礫層に変わる。土器は底付近でも出土。土器の表面は摩耗しており、流水によるものと考えられる。畔以北の掘り下げ開始。本日で今年の作業終了のためシート養生と周辺の整理を行う。

平成20(2008)年1月7日(月)

NR170の断面撮影。NR170畔以北の掘り下げ。

1月8日(火)

NR170の掘り下げ。遺構上面より約1mの深さまで、畔以北で掘り下げ終了。河の肩付近より庄内式の高坏等が出土。

1月9日(水)

NR170の掘り下げ。畔以南の掘り下げ時と同様に、褐(灰)色砂層から、遺物が散在して出土。完形に近い甕、高坏等がたまに出土する。

1月10日(木)

NR170の完掘。最下層は砂礫(10cm大以下の円礫を含む)で土器が少量出土。調査区北側の遺構精査。

1月15日(火)

調査区南側遺構再精査。調査区北東部、遺構精査及びすき取り、遺構(耕作溝の残り)の掘り下げ。

1月16日(水)

調査区北東部、表面清掃後、SX187・188・190の検出状況を撮影。調査区南側の遺構再精査及び遺構掘り下げ。

1月17日(木)

NR200掘り下げ。周辺の遺構精査と掘り下げ。調査区北側SX187・188の掘り下げ。SX190・202の掘り下げ(遺構検出はSX190で一括で撮影したが、重複する別の遺構である事が判明。個々に遺構番号を付ける)。

1月18日(金)

SD191・201表面清掃後、完掘状況及び土器出土状況(SD191)を撮影。SD201平面実測、SD191・202断面実測。完成後、畔の除去。A～C-11～13地区、すき取り(灰色砂を外す)。SX202内の土器検出作業。

1月22日(火)

SX190・202表面清掃後、東西畔土層断面を撮影。SX187・188表面清掃後、完掘状況を撮影。NR200(A～C-10～13)の掘り下げ。埋土は黄白色微砂であるが、その上部に灰色粗砂(古墳時代中期。遺物が多く含まれる)層が堆積。NR200とほぼ重なる位置にあるが、同一の遺構であるかは不明。今後検討を進める。

1月24日(木)

SX190・202の畔断面実測後、畔外し。表面清掃後、完掘状況を撮影。遺構再精査及び掘り下げ。

1月28日(月)

空中写真測量に向けての表面清掃開始。

1月30日(水)

昨日の降雨による水取り作業後、空中写真測量及び足場写真撮影のため表面清掃。

1月31日(木)

表面清掃後、写真撮影(4カット)。

2月1日(金)

AM11:00より空中写真測量。中層遺構完掘状況を地上撮影(7カット)。ベルコン設置。壁面シート養生作業。

2月4日(月)

柱穴、土坑の断割。下層遺構を検出するため、明褐色土の掘り下げ開始。

2月5日(火)

調査区南側で暗褐色土(上・中層遺構基盤層)の掘り下げを行い、下層遺構の検出。土坑の断割。調査区北側、遺構精査及び一部すき取り。

2月6日(水)

調査区南側の暗褐色土の掘り下げ。D・E-7・8地区で、一辺約5mの方形土坑(竪穴建物?)検出。SX202、SD191内の土器実測。調査区北側、遺構精査及び断割。

2月7日(木)

調査区南半部、暗褐色土の掘り下げ及び遺構精査。昨日検出した竪穴建物は、ほぼ方形(一辺6m×6.3m)を呈する。埋土は灰褐色粘質土で、黄褐色粘土ブロックが混入しており、壁部分のみ灰褐色粘質土となる。壁溝も良好に遺存しており、貼り床も残っている可能性あり。調査区北側柱穴、断面実測及び溝の掘り下げ開始。SX202土器実測。調査区北側、SD249の掘り下げ。

2月8日(金)

A～C-9～11地区の暗褐色土の掘り下げ及び遺構検出。SD191の遺物取り上げ。SX202の土器実測。調査区北側、SD249の掘り下げ。

2月13日(水)

A～C-8～12地区の暗褐色土掘り下げ及び遺構精査。南西-北東の斜行溝の続きを検出。調査区北東部、SD249の掘り下げ。SX202遺物取り上げ。

2月14日(木)

SX202の遺物取り上げ。取り上げ後、平面及び床面に掘り残しがある事が判明したため、再検出後に掘り下げを行う。柱穴断割、断面実測。調査区北東部、SD249の掘り下げとSD249以北のすき取り及び北壁部分で断割。

2月15日(金)

調査区東南部、ピットの断割断面実測。SD249の掘り下げ、同遺構北端部の断割。

2月18日(月)

調査区南部、柱穴断割と断面実測。調査区北側の表面清掃。SD249掘り下げ。

2月19日(火)

調査区北東部の表面清掃後、SD249の完掘状況及び土層断面を撮影。調査区西南部、柱穴の断割断面実測。調査区南部、柱穴断割の残りの畔除去。調査区南半部の下層遺構検出状況撮影の為、清掃開始。SE153の断割、曲物枠内の掘り下げ。

2月20日(水)

調査区北東部、柱穴断割断面実測。SD249南壁土層断面実測。SD249平面実測。調査区南半部表面清掃後、下層遺構及び竪穴建物検出状況を撮影。SE153断割状況を撮影。

2月21日(木)

調査区北東部、SD363の掘り下げ開始。SD249南壁土層断面実測。SE153曲物検出後、断面・平面追加実測。調査区南西部下層遺構掘り下げ開始。SK348はSD343掘り下げ途中に検出。SD343との重複関係(SK348→SD343)を確認後、SK348完掘。完掘状況を撮影。斜行溝(東南-北西と南西-北東)重複関係確認後、畔を残し掘り下げ。畔の断面記録。SD310の掘り下げ。

2月22日(金)

調査区北東部、SD363の掘り下げ。調査区南西部、下層遺構(溝)土層断面実測。調査区南西部下層遺構掘り下げ。SX344掘り下げ中に、ST364を検出。中から木棺の底板を検出。またSX344の掘り下げ中、SD359を検出。SD311に続くと考えられる溝である。下層遺構平面実測。

2月25日(月)

SD363の完掘。調査区北東隅崩落の為、コンパネと杭で養生。SD369北側の土層断面を撮影後、掘り下げ開始。SD311の掘り下げ。SE153以南完掘。SD310掘り下げ。SH345との重複関係は未確認であるが、接続部分で浅くなる。A~C-8~12地区、一部すき取り後、遺構精査。SD355の完掘。下層遺構平面実測。

2月26日(火)

SD369・SD310の掘り下げ。

2月27日(水)

SD369・SD310の掘り下げ。溝はSH345東南辺部では浅く、その北東、南西部で深くなる。SX371との交差部で古墳時代初頭(庄内式?)の甕が完形で1点出土。SH345の東南辺部での遺物は少量。SD311の掘り下げ。遺物は極めて少ない。SH345の北側までほぼ完掘。SD380掘り下げ開始。

2月28日(木)

SD311(SH345重複部分)表面清掃後、完掘状況を撮影。SH345・ST364検出状況を撮影。SD369の完掘。東壁面の整形。SD380の掘り下げ開始。庄内式段階の甕を中心とした土器が10点以上出土。SH345掘り下げ開始。

2月29日(金)

SD249畔以南の掘り下げ。SD380内の土器の検出。SH345の掘り下げ。黄褐色粘土ブロックが混入した埋め立て土層の除去。北東隅近くで焼土と炭化物の集中する箇所あり。

3月4日(火)

ST364平面実測後、半裁。1枚目の板から10cm程下から2枚目の板が出土。土層断面と検出状況を撮影。調査区北側より、下層遺構完掘状況撮影に向けて表面清掃開始。SH345の埋土除去後、撮影。その後、壁溝の掘り下げ。下層遺構平面実測。

3月5日(水)

引き続き表面清掃。SD380、土器出土状況を撮影。その後出土状況実測。ST364の2枚目の板を撮影。その後、平面図の追加を行い完掘。SH345内、焼土と炭化物の検出。柱穴の一段掘り下げ。壁溝の完掘。下層遺構平面実測。

3月6日(木)

SH345の畔断面を撮影。炭化物・焼土出土状況撮影。SD380土器実測後、出土状況を撮影。下層遺構完掘状況撮影のための表面清掃。壁面シート除去。

3月7日(金)

下層遺構完掘状況を撮影。シート養生。

3月10日(月)

調査区北壁・東壁北部の分層、土層断面撮影。SH345の十字畔の土層断面実測後、畔を除去。

3月11日(火)

SH345中央の炉を半裁後に撮影。その完掘後、炭・灰の検出状況を再度撮影。調査区西壁の分層。調査区北東部から重機による埋め戻し開始。

3月12日(水)

調査区北東部東壁の土層断面実測及び土色入れ。調査区北壁土層断面実測。調査区西壁分層後、35mmカメラにて撮影、断面実測開始。調査区南壁を分層して撮影。SH345完掘状況を撮影。重機埋め戻し。

3月13日(木)

調査区北壁・西壁・南壁の土層断面実測。SH345中央炉の半裁と断面撮影。SH345内のSP385の断割。下半部に柱根が遺存。SH345床面を薄くすき取り、竪穴建物の掘方を確認。重機による埋め戻し。

3月17日(月)

調査区西壁断面実測。SH345中央の炉跡を完掘して撮影。SH345柱穴及び柱穴列の断割。重機による埋め戻し。

3月18日(火)

SH345を断割して撮影。SH345掘方の検出と掘り下げ開始。重機による埋め戻し。

3月19日(水)

SH345掘方の掘り下げ。重機による埋め戻し。

3月21日(金)

SH345掘方の完掘状況を撮影。重機による埋め戻し。

3月24日(月)

重機による埋め戻し終了。機材撤収。調査終了。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

橿原市は奈良盆地の南部に位置し、北は磯城郡田原本町・北葛城郡広陵町、東は桜井市、南は高市郡明日香村・同高取町、南西は御所市、西は大和高田市に接している。新堂遺跡の所在する橿原市新堂町・東坊城町は、橿原市域の西辺沿い中央付近に位置しており、今回の調査地点から西に100 mほど移動すると大和高田市域に至る。

橿原市の南～南東部には龍門山地から派生する丘陵地が広がっており、北に向かって緩やかに下降する斜面地形を経て、北に肥沃な沖積地が広がっている。調査地はその沖積地に位置している。調査地から東南東に約2 kmの地点には名勝大和三山のひとつ、畝傍山が所在する。

調査地周辺の標高は、盆地の中部に向かって、おおむね南から北に向かってなだらかに低くなる。調査地周辺における現在の水田面の上面標高は、約64 m前後である。調査地から東に約600 mの距離には曾我川が、西に約1 kmの距離には葛城川が、いずれも北流している。曾我川は龍門山地西部に、葛城川は金剛山地に源流をもつ。調査地一帯は現在、この二つの主要河川の間位置する微高地となっている。また、調査地から西に約200 mの地点には葛城川の支流である住吉川も存在する。河川の位置は時代と共に大きく変化しており、かつては調査地近辺にも河川が存在していたことが現地地形の観察や発掘調査によって明らかとなっている（詳細は次節）。

調査地は北西の新堂集落と南東の東坊城集落の間に位置する耕作地帯であったが、近年は京奈和自動車道建設を筆頭に造成工事が進められており店舗も増える等、かつての景観は今まさに大きく変化しつつある。『大和国条里復原図』による調査地の小字名は「蓮池（はすいけ）」である。

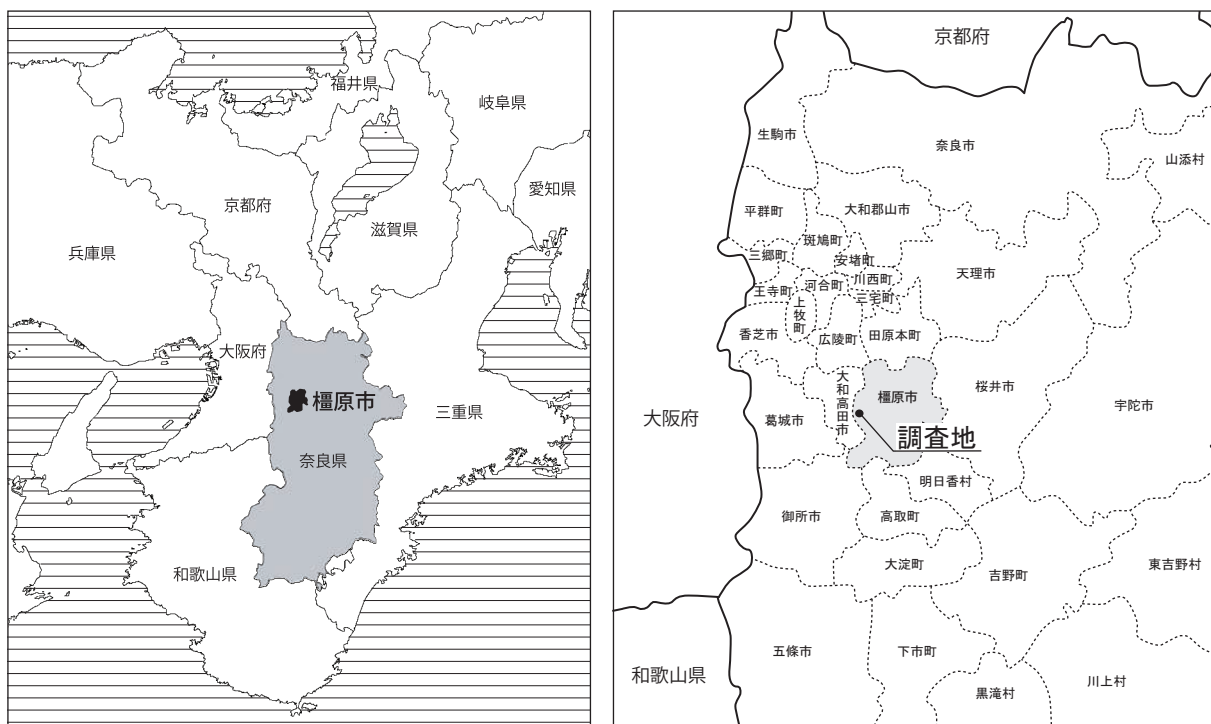


図1 調査地位置図

第2節 歴史的環境

橿原市の西部から南西部にかけての地域は、従来、遺跡があまり確認されていない地域であったが、京奈和自動車道建設に伴う一連の発掘調査により、路線沿いに新たな遺跡が多数発見されている。路線沿いからさらに周辺への遺跡の広がりが想定される調査成果も挙げられている。得られた成果は主に縄文時代以降の各時代にわたり、奈良盆地南西の低地部における遺跡の様相が大幅に更新されたとと言える。調査地周辺は近年の開発行為によって遺跡地図が次々と書き換えられつつある地域である。

調査地の含まれる新堂遺跡の近辺に目を向けると、北に曲川遺跡、南に東坊城遺跡が所在する(図2)。これらの橿原市域の西部に位置する遺跡は、曾我川と葛城川に挟まれた平地に立地し、南北約2.0 km・東西約0.8 kmの範囲で南北に並ぶ。なお、京奈和自動車道路線沿いから東西に離れた地域については、現在のところ調査例が乏しく実態は不明である。しかし新堂遺跡や坊城遺跡の西方一帯等、遺物散布地は複数確認されており、今後、遺跡の範囲がさらに広がっていく可能性も高い。以下に、これらの遺跡の調査成果を軸に調査地近辺における各時代の様相に触れる。

調査地周辺において遺構・遺物の存在が明確になり始めるのは、縄文時代後期以降のことである。曲川遺跡では晩期中葉から末葉にかけての土器棺墓が約80基検出されている。これは西日本有数の規模である。他、貯蔵穴や住居跡等の遺構も確認されている。新堂遺跡では遺構の数こそ限られるものの土器棺墓や貯蔵穴、流路に伴う水場遺構等があり、後期から晩期にかけての遺物も複数の地点で出土している。一方、東坊城遺跡では縄文時代後期後半から晩期の遺物が出土する河川や、晩期の土坑の存在が確認されている。遺物については後期前半に遡る土器も含まれる。京奈和自動車道路線沿いでさらに南に目を向けると、川西根成柿遺跡や観音寺本馬遺跡では後期以降の遺構が確認されている。観音寺本馬遺跡では人工的に管理されたと想定される晩期のクリ林も検出されている。また、この周辺の遺跡からは前期及び中期の遺物も出土している。

弥生時代には曾我川流域及び葛城川流域においては、多くの遺跡の存在が知られている。京奈和自動車道沿線でも前期の大規模水田や環濠集落、中期の方形周溝墓群等が確認されている。その中においては、新堂遺跡の一带は比較的弥生時代の遺構・遺物が疎な地域であると言える。ただし、竪穴建物や土坑等の弥生時代の遺構は少量ながら存在するため、完全な空白というわけではない。また、曲川遺跡の北部や橿原市北西部に位置する土橋遺跡においては中期や終末期の周溝墓群も確認されている。

弥生時代末頃から古墳時代初頭になると、新堂遺跡周辺では遺構・遺物といった様々な活動痕跡が増加し始める。新堂遺跡では、この時期の水田や竪穴建物、土坑、溝等が確認されており、遺構からの出土遺物量も多くなる。河川及びそれに繋がる溝(水路)に設置された井堰も存在し、積極的な土地開発に乗り出していることが窺える。遺構は地点こそ限定的であるが古墳時代前期を通じて見られる。曲川遺跡では前期後半以降、曲川古墳群が形成されていく。曲川古墳群は墳丘が削平されたいわゆる埋没古墳で、一辺10~18 mの方墳18基が検出されている。古墳の築造は中期後半にかけて続く。地理的に連続する新堂遺跡とも関わりの深い遺跡と言える。

古墳時代中期は、調査地周辺での活動が非常に盛んになる時期である。東坊城遺跡では平成3年度に橿原市教育委員会が実施した店舗建設に伴う発掘調査において中期の大溝から土師器、初期須恵

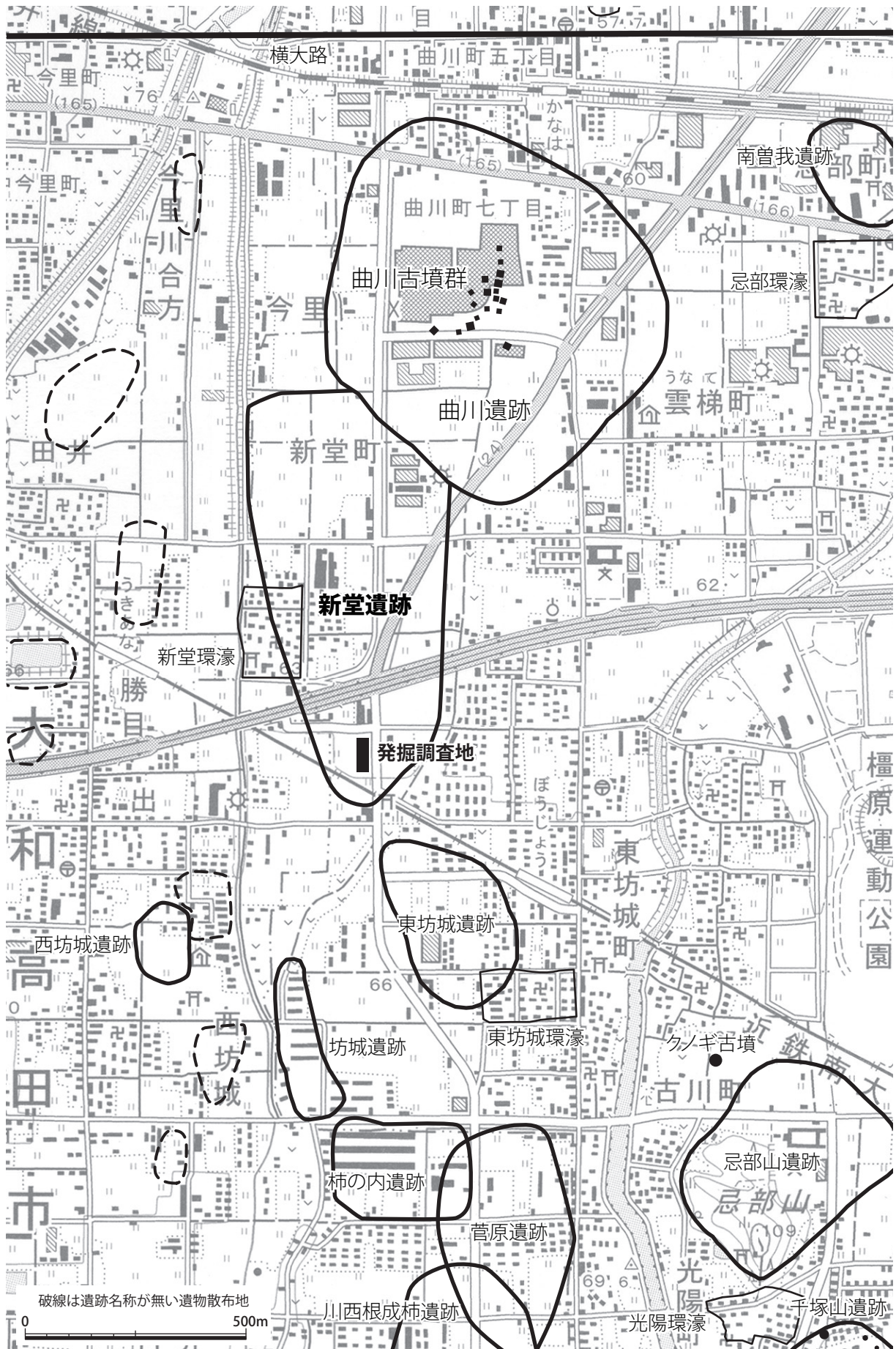


図2 調査地周辺遺跡地図 (S = 1/12,500。遺跡範囲は2021年度当初の内容)

器、韓式系土器に加え、鉄滓・鞆の羽口・砥石といった生産関連遺物や鑄造鉄斧が出土しており、以前から注目されてきた。近年の調査によって新堂遺跡と曲川遺跡からも陶質土器・韓式系土器を含む多量の土器や金属器生産関連遺物、祭祀具等が多数出土し、渡来系遺物を多く含む中期（一部は数を減じながら後期まで続く）の集落が、この一帯に展開していたことが明らかとなっている。中期の遺構は土坑や河道が主であり、居住域を示すような明確な建物跡の存在は確認されていない。その一方で河道を始めとする遺構からの遺物出土量は非常に多く、近隣に集落の居住域が存在する可能性は高いと考えられる。橿原市中央部の四条遺跡周辺や、飛鳥地域等の遺跡とともに、古墳時代の奈良盆地南部の集落における外来要素の受容過程を知ることのできる重要な地域と言える。

近年の新堂遺跡の調査成果を見ると、新堂遺跡の北西部で大型店舗建設に伴い実施した発掘調査（橿教委 2016-2 次調査『新堂遺跡Ⅳ』）で、河道から中期前半に遡る多量の初期須恵器が出土し、さらなる注目を集めている。この地点では中期末頃にかけての遺構・遺物が確認されている。また、今回の調査地の東隣における発掘調査（橿教委 2002-2 次調査『新堂遺跡』、橿教委 2005-4 次調査『新堂遺跡Ⅱ』、橿教委 2006-2 次調査『新堂遺跡Ⅲ』）においても古墳時代の河道及び河岸沿いの井戸や土坑等から中期後半～後期前半を中心とする多量の土器を始めとする遺物が出土している。

曾我川の下流域に目を向けると古墳時代中期後半から後期前半にかけての時期に大規模な玉作り遺跡である曾我遺跡が存在する。曾我川の上流、調査地から南南東に約 2 km の距離に位置する新沢千塚古墳群も、この時期に造墓活動の最盛期を迎える。より広域な視点に立っても遺跡の形成として現れる人間活動が非常に活発な時期と言える。

古墳時代後期後半頃から古代にかけての時期には、新堂遺跡周辺では遺構の存在が希薄になる。その後、再び遺構が多く確認されるようになるのは平安時代後期以降のことである。

新堂遺跡では京奈和自動車道建設による複数の発掘調査で平安時代後期以降、特に平安時代末期から鎌倉時代前半にかけての遺構の存在が多く確認されている。遺構から出土する遺物の量も多い時期である。この時期の遺構・遺物は新堂遺跡の南部に特に多く、区画溝を伴う屋敷地（『新堂遺跡Ⅱ』）、井戸、土坑といった遺構の存在や耕作地としての利用状況が明らかにされている。出土遺物としては多量の瓦器や土師器の他、輸入陶磁器の存在等が知られている。新堂遺跡の南端では鎌倉時代中頃に埋没したと考えられる河道（先述した現地表に残る旧河道跡と同一）の存在が確認されている。河の両岸が発掘調査で検出されており、検出地点での川幅は最大で約 60m に及ぶ（『新堂遺跡Ⅲ』）。屋敷地や耕作地としての利用も、この河道との関係の中での変遷が窺える。河道は発掘調査で確認されている他、条里地割の乱れ、また堤防状の高台として現地形でも確認することができる（図 3 右下）。その痕跡は、南は大和高田市根成柿、北は橿原市曲川環濠付近までの範囲で追うことができる。また、新堂遺跡の北東部においても河道沿いに平安時代末から鎌倉時代初頭と考えられる掘立柱建物群や井戸、土坑等の遺構の存在が確認されている（橿教委 2010-3 次調査）。井戸出土の鬼面墨書土器といった特徴的な遺物も見られる。

このような平安時代後期から鎌倉時代前半にかけての遺構は、曲川遺跡と東坊城遺跡にも存在するが、量は新堂遺跡がもっとも多い。これ以降の時期は、曲川遺跡において室町時代の建物跡がわずかに検出されている程度で、他は耕作地としての利用が主となっていったようである。

なお、調査地は『大和国条里復原図』によると高市郡路西二十七条五里（葛下郡二十七条一里）三十坪にあたる。

第三章 調査の成果

第1節 調査の方法

調査区の位置と形状

調査開始時点の調査地は道路用地として盛土造成が行われた状態であったが、それ以前は水田として利用されていた土地である。敷地の東辺は国道24号に接している。調査地のすぐ南隣には近鉄南大阪線が西北西-東南東方向に通る。

調査区の形状は南北に長い方形を土台として、北西隅を敷地形状に合わせて斜めに切り落としている。また、調査区東辺の一部は排土搬出用の重機作業場を確保する都合上、調査範囲から除外されている。調査区各辺は概ね方位に沿う形である。調査区の規模は、南北長85m・東西長13~23m・面積1,800㎡を測る。

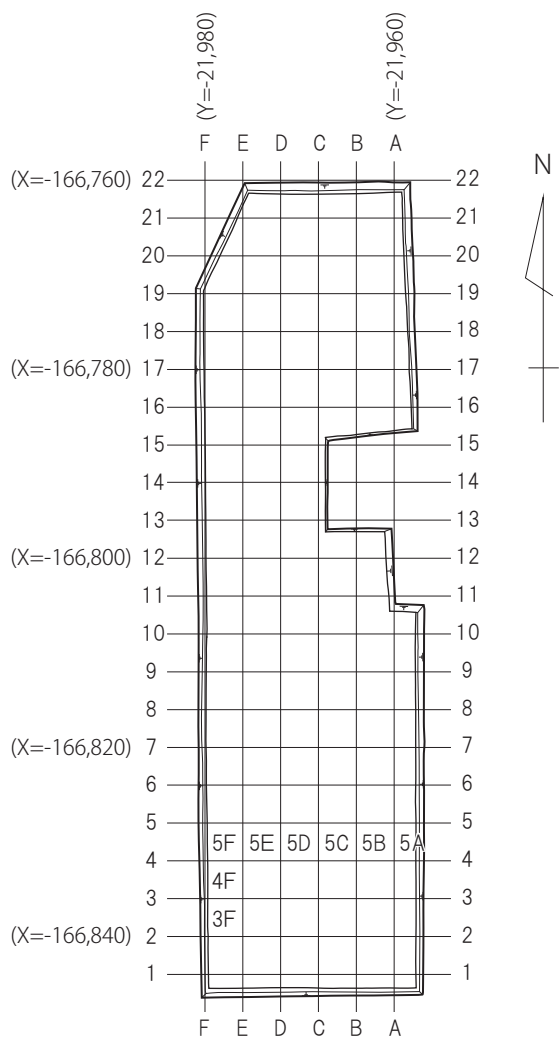
調査の手順

上層遺構面直上まで重機（バックホウ）による掘削を行い、以降の掘削・記録作業は人力で行っている。敷地内で排土置場を確保できないため排土は全て場外搬出を行っており、期間を通じて搬出作業には重機を使用している。調査区内には遺構面下に及ぶ現代の攪乱が複数あり、これらも多くは重機掘削作業と並行して除去を行っている。調査区壁面沿いには、人力によって排水溝を掘削している。

遺構名

遺構種と遺構番号は、調査時にその種別を示す通有の2字のアルファベット、数字の順で組み合わせる。遺構番号は、遺構全体を通して1から順に付与している。主として遺構を認識した順に番号を付与しており、遺構面や時期との対応関係は無い。

遺構名は基本的に調査時のものをそのまま使用して報告を行っているが、遺構に対する認識の変更や番号の重複等の理由で本報告段階で一部、変更や追加を行った遺構が存在する。



グリッド区画名は北西隅の交点を使用。4mメッシュ。

図4 調査区区割図 (S = 1/800)

調査区割

調査区内に4 m間隔で打設した測量メッシュ杭を基準に、地区割を行っている(図4)。この地区を作業工程の区切りや遺物の取り上げ記録等に利用している。

写真撮影

調査写真の撮影は各遺構面の検出・完掘状況の他、調査区及び遺構の土層断面や遺物の出土状況等、調査の過程で記録が必要な段階で行っている。

撮影の際に使用したフィルムは、主に4×5インチサイズの白黒フィルムとカラーポジフィルムである。また、バックアップ用に35mmサイズの同フィルムを使用している。主要な写真についてはフォトCDを作成してデジタルデータの保存も行っている。

第2節 基本層序

基本層序は以下のとおりである。以下に示す各層の状況は調査区全体で概ね共通するが、IV層の分布範囲が限定的である点等をはじめ地点による差異も存在する。詳細は各層の項で述べる。I層上には道路用地としての取得後の現代造成土が存在し、その厚さは地点によって差異が大きく最大で1 mを超える。現代造成土は基本層序には含んでおらず、調査区断面図(図5～11)では基本的に除外して作図している。

各層序の上面は調査地周辺の現況地形と同様、南東から北西に向かって低くなる傾向にある。ただし全体が平坦な状態で緩やかに傾斜しているのではなく、耕作活動の差異によって段状に変化する地点も存在する。

基本層序

- I層：水田耕作土（現代。上面高は標高約63.7～64.1 m。厚さ0.1～0.5 m。調査区北東部には調査開始以前に削平を受けた地点がある）
- II層：床土（上面高は標高約63.4～63.9 m。厚さ0.1～0.45 m）
- III層：旧耕作土（上面高は標高約63.4～63.75 m。厚さ0.1～0.5 m）
- IV層：氾濫層（上面が遺構面。上面高は標高約63.46～63.6 m。厚さ0.05～0.1 m）
- V層：遺構基盤層（上面が遺構面。上面高62.9～63.7 m。厚さ0.1～0.5 m）
- VI層：地山（上面高62.5～63.5 m）

I層上面が現代の水田面にあたる。青灰色砂質土、オリーブ灰色砂質土、浅黄色粘質土から成る。調査区北東部には現代の掘削等による攪乱が複数存在し、その一部は遺構面下に及ぶ。

II層は床土である。灰黄色粘質土、灰褐色砂質土、オリーブ灰色粘質土、明褐灰色粘質土、にぶい黄褐色砂質土等から成る。

III層は12世紀以降の耕作層であり、いわゆる耕作溝の埋土もこれに含まれる。オリーブ灰色砂質土、

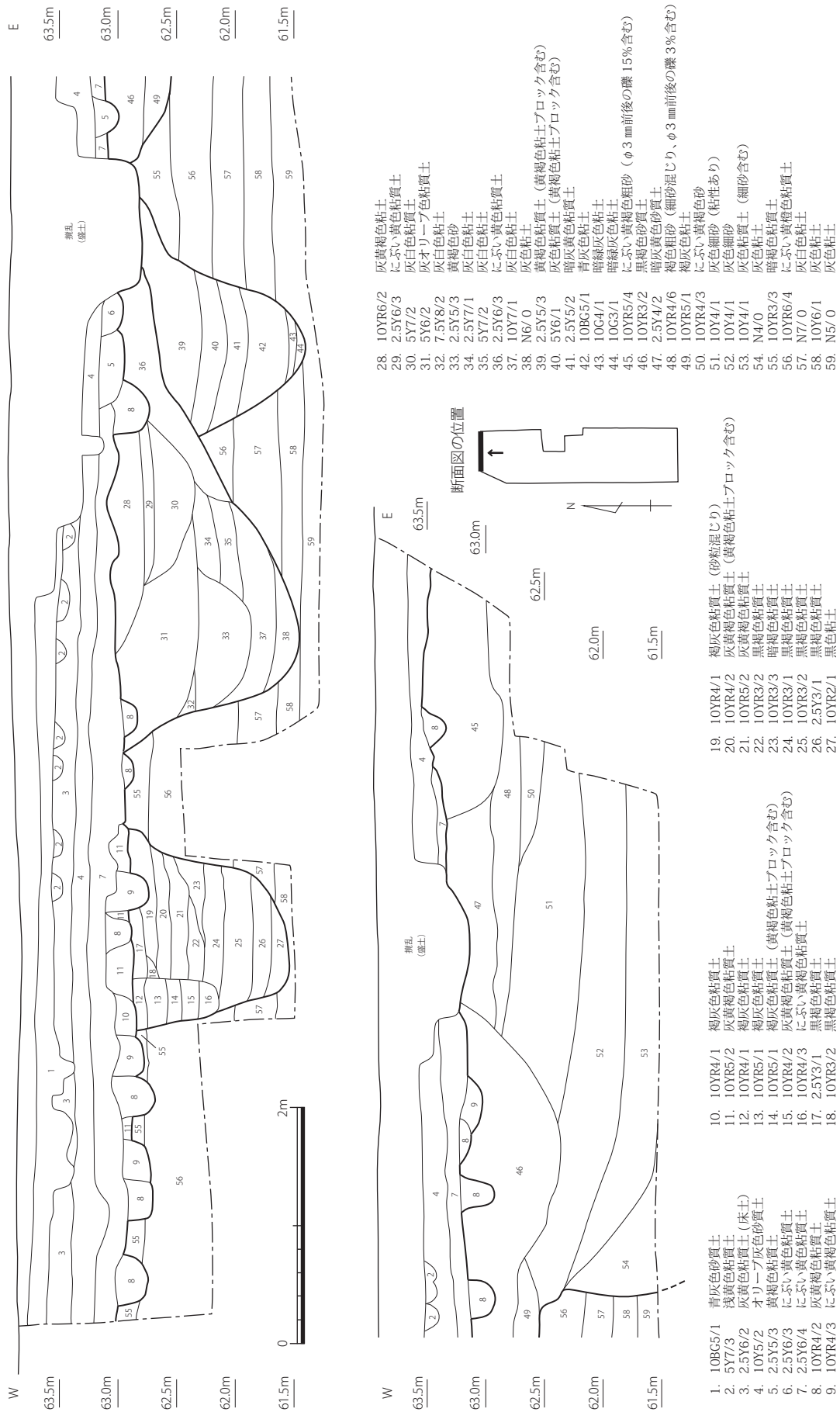
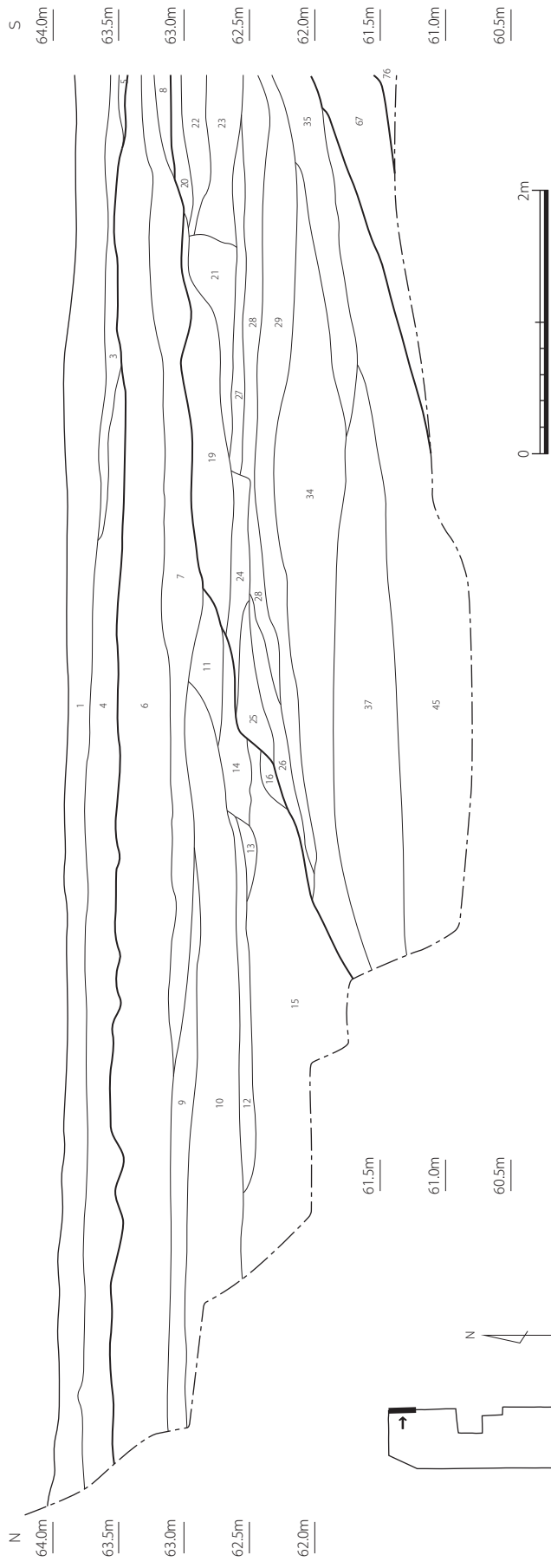


図5 調査区北壁土層断面図 (S = 1/50)



調査区東壁北半部 (図 6・7)

I 層 : 1・2 層、II 層 : 3 ~ 5 層、VI 層 : 68 ~ 79 層

NR397 : 6 ~ 16 層、SD363 : 17 ~ 45 層、SD249 : 46 ~ 59 層、SD369 : 60 ~ 65 層、SD363 (古) : 66 ~ 67 層

断面図の位置

- | | | | |
|--------------|------------------------------------|--------------|-------------------------------|
| 1. 10Y5/2 | オリープ灰色砂質土 (φ3 mm前後の礫 3%含む) | 37. 10Y4/1 | 灰色細砂 (粘性あり) |
| 2. 2.5Y5/3 | 黄褐色粗砂 | 38. 7.5YR4/2 | 灰褐色細砂 (粘質土含む) |
| 3. 10YR5/3 | 黄褐色砂質土 (φ2 mm前後の礫 5%含む) | 39. 2.5GY5/1 | オリープ灰色砂 (同色の粘土ブロック含む) |
| 4. 10YR5/4 | にぶい黄褐色粗砂 (φ3 mm前後の礫 15%含む) | 40. 5GY6/1 | オリープ灰色シルト |
| 5. 7.5YR3/1 | 黄褐色粗砂 (φ1-2 mmの礫 3%含む) | 41. 7.5Y4/2 | 灰オリープ色粘質土 (細砂混じり) |
| 6. 10YR5/4 | にぶい黄褐色粗砂 (φ3 mm前後の礫 15%含む) | 42. 7.5YR4/3 | 褐色細砂 (粘質土含む) |
| 7. 10YR5/4 | にぶい黄褐色粗砂 (細砂・粗砂混じり、φ3 mm前後の礫 3%含む) | 43. 5Y3/2 | オリープ黒色粘土 (粘質土含む) |
| 8. 10YR4/4 | 褐色粗砂 (細砂混じり) | 44. 5GY6/1 | オリープ灰色粘土 (オリープ黒色粘土ブロック少量含む) |
| 9. 10YR4/6 | 褐色粗砂 (細砂混じり、φ3 mm前後の礫 3%含む) | 45. 10Y4/1 | 灰粘質土 (細砂含む) |
| 10. 10YR5/6 | 黄褐色粗砂 (細砂混じり、φ3 mm前後の礫 3%含む) | 46. 7.5YR4/4 | 黄褐色砂質土 (φ3 mm前後の礫 1%含む) |
| 11. 10YR4/4 | 黄褐色粗砂 (細砂混じり、φ3 mm前後の礫 3%含む) | 47. 2.5Y5/3 | 黄褐色砂質土 (粘質土含む、φ5 mm前後の礫 5%含む) |
| 12. 10YR5/8 | 黄褐色粗砂 (細砂混じり) | 48. 10YR3/3 | 暗褐色粘質土 (粘性あり) |
| 13. 2.5Y5/6 | 黄褐色粗砂 (細砂混じり) | 49. 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘質土 (粘性あり) |
| 14. 5Y4/1 | 灰粘質土 (細砂混じり) | 50. 7.5YR3/4 | 暗褐色粘質土 (粘性あり) |
| 15. 10YR4/3 | 灰粘質土 (細砂混じり) | 51. 10YR5/3 | にぶい黄褐色シルト (φ3 mm大の砂粒含む) |
| 16. 7.5Y3/1 | オリープ黒色粘質土 (細砂混じり) | 52. 10YR6/4 | にぶい黄褐色シルト |
| 17. 7.5YR2/3 | 極黄褐色粗砂 (φ2-3 mmの礫 5%含む) | 53. 5GY6/1 | オリープ灰色粘土 (φ2 mm大の白色砂粒多量を含む) |
| 18. 10YR5/3 | にぶい黄褐色砂質土 (φ2 mm前後の礫 1%含む) | 54. 7.5YR4/1 | 極灰色細砂 (φ5 mm前後の礫 15%含む) |
| 19. 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘質土 (細砂混じり) | | |
| 20. 2.5Y4/2 | 暗灰黄色粘質土 (シルト多量を含む) | | |
| 21. 10YR4/3 | にぶい黄褐色粗砂 (φ3 mm前後の礫 15%含む) | | |
| 22. 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘質土 (φ3 mm前後の礫 1%含む) | | |
| 23. 10YR4/2 | 灰黄褐色粘質土 | | |
| 24. 5Y4/2 | 灰オリープ色細砂 (粘性あり) | | |
| 25. 10Y3/1 | オリープ黒色細砂 (粘性あり) | | |
| 26. 10Y3/1 | オリープ黒色粘質土 (細砂混じり) | | |
| 27. 5Y4/2 | 灰オリープ色粘質土 | | |
| 28. 5Y3/2 | オリープ黒色粘質土 | | |
| 29. 7.5Y3/2 | オリープ黒色粘質土 | | |
| 30. 5Y4/2 | 灰オリープ色粘質土 (φ3 mm前後の礫 7%含む) | | |
| 31. 2.5Y4/3 | オリープ褐色粘質土 (細砂混じり) | | |
| 32. 5Y4/3 | 暗オリープ色細砂 | | |
| 33. 5Y4/2 | 灰オリープ色細砂 | | |
| 34. 10Y4/1 | 灰色細砂 (粘性あり) | | |
| 35. 7.5Y4/2 | 灰オリープ色細砂 | | |
| 36. 2.5Y7/2 | 灰黄色粗砂 | | |

図 6 調査区東壁北半部土層断面図① (S = 1/50)

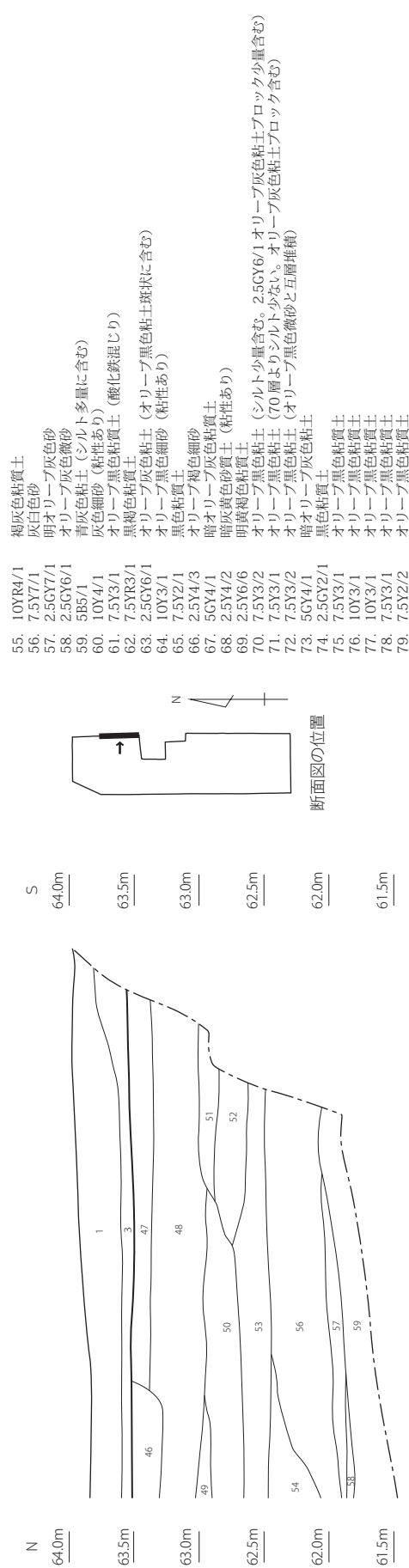


図7 調査区東壁北半部土層断面図② (S = 1/50)

調査区東壁北半部 (図6・7)
 I層 : 1・2層、II層 : 3～5層、VI層 : 68～79層
 NR397 : 6～16層、SD363 : 17～45層、SD249 : 46～59層、SD369 : 60～65層、SD363 (古) : 66・67層



图9 調査区西壁土層断面図① (S = 1/50)

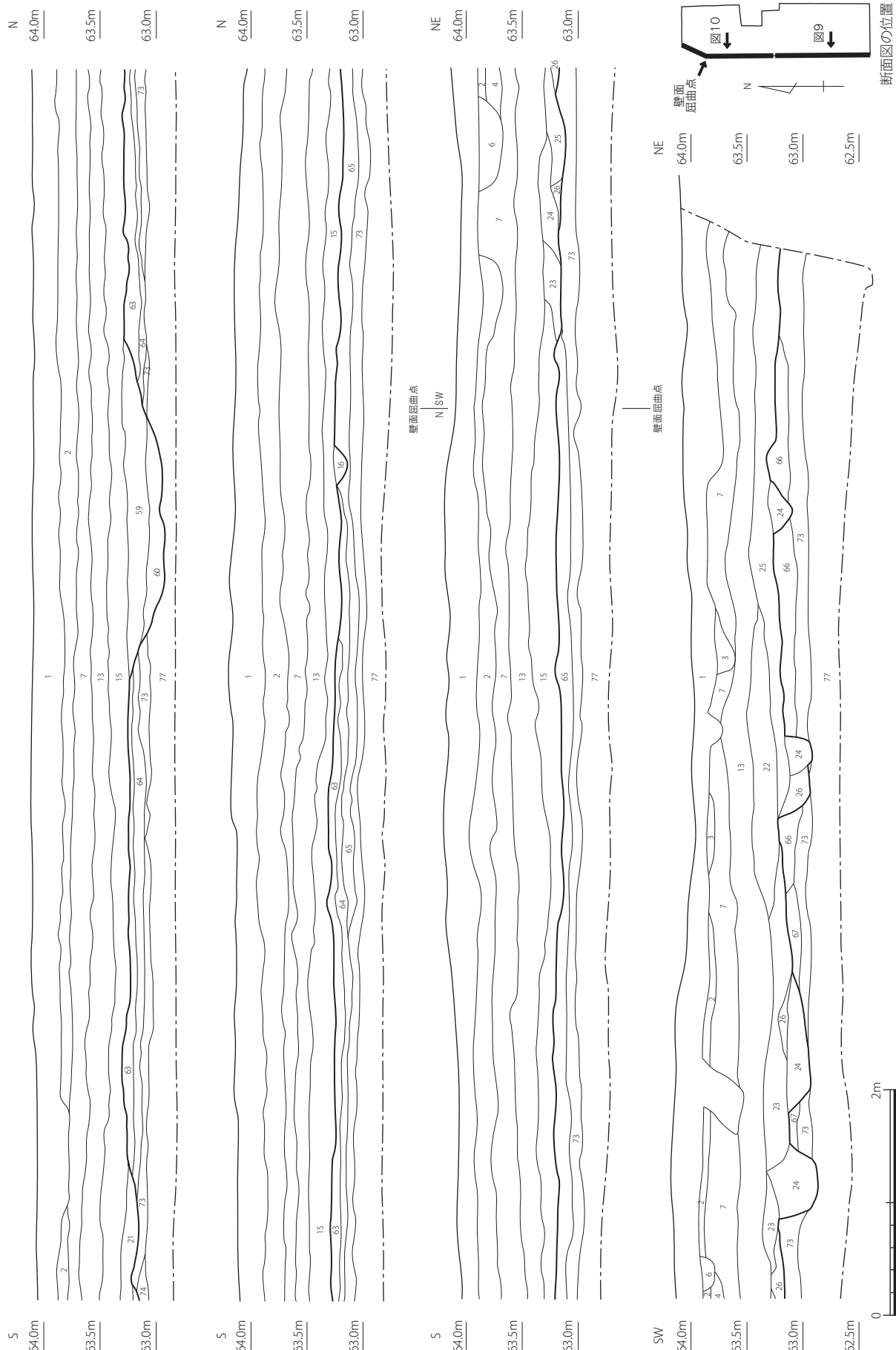


図10 調査区西壁土層断面図② (S = 1/50)

1. 5B6/1	青灰色砂質土	27. 5YR4/4	にぶい赤褐色砂質土	53. 10YR5/2	灰黄褐色土
2. 2.5Y6/1	黄灰色砂質土 (炭粒微量に含む)	28. 5YR4/1	粗灰色粘質土	54. 7.5YR7/1	明褐色微砂
3. 10YR6/1	褐色粘質土 (砂粒多く含む)	29. 7.5YR5/3	にぶい褐色砂質土	55. 5YR4/4	にぶい赤褐色砂質土
4. 10YR8/4	浅黄褐色砂質土	30. 5YR4/1	粗灰色土	56. 5YR5/2	灰褐色砂質土-砂
5. 10YR7/1	灰白色土 (管および砂利畝き含む)	31. 7.5YR4/1	粗灰色粘質土 (粗褐色土混じり)	57. 5YR5/1	褐色微砂
6. 7.5Y6/1	灰色砂質土	32. 5YR6/1	粗灰色土 (炭粒含む)	58. 5YR5/1	褐色粘土 (橙色粘土ブロック、炭粒含む)
7. 7.5YR6/2	灰褐色砂質土	33. 5YR4/2	灰褐色土	59. 2.5Y7/2	灰黄色砂質土
8. 10YR7/3	にぶい黄褐色微砂	34. 2.5Y4/2	暗灰黄色砂質土	60. 7.5YR6/4	灰褐色粘質土 (灰色粘土ブロック含む)
9. 2.5Y6/2	灰黄色土	35. 7.5YR5/1	粗灰色土	61. 7.5YR6/3	にぶい褐色土-砂質土
10. 2.5Y7/3	浅黄褐色砂質土 (旧床土か?)	36. 7.5YR6/1	粗灰色土	62. 5YR4/2	灰褐色砂質土-砂
11. 2.5Y6/1	黄灰色砂質土	37. 10YR7/6	明黄褐色粘質土 (粗灰色粘土ブロック多く含む)	63. 10YR7/2	にぶい黄褐色粘質土 (砂粒多く含む)
12. 10YR7/4	にぶい黄褐色微砂	38. 2.5Y7/1	灰白色細砂-砂	64. 10YR5/2	灰黄褐色土 (砂粒多く含む)
13. 7.5YR7/2	明褐色砂質土	39. 10YR6/2	灰黄褐色土	65. 7.5YR5/2	灰褐色土
14. 5YR4/1	褐色粘質土	40. 2.5Y7/3	浅黄褐色砂	66. 7.5YR7/1	明褐色粘質土
15. 7.5YR5/2	灰褐色砂質土	41. 2.5Y6/2	灰黄色粘質土	67. 10YR6/1	褐色粘質土 (下部に橙色粘土ブロック含む)
16. 7.5YR4/2	灰褐色粘質土	42. 5Y6/1	灰色土	68. 7.5YR4/1	褐色粘質土 (下部に橙色粘土ブロック含む)
17. 10YR5/4	にぶい黄褐色粘質土 (炭粒まばらに含む)	43. 2.5Y6/1	黄灰色粘質土	69. 7.5YR6/1	灰褐色土 (下部は橙褐色粘土ブロック含む)
18. 7.5YR5/2	灰黄褐色土	44. 2.5Y6/1	黄灰色粘質土 (粗褐色粘土混じり)	70. 7.5YR5/2	褐色粘質土 (下部は橙褐色粘土ブロック含む)
19. 10YR6/2	にぶい黄褐色土	45. 7.5YR6/1	粗灰色土 (粗褐色粘土ブロック含む)	71. 7.5YR5/1	褐色粘質土
20. 10YR5/3	にぶい黄褐色土	46. 2.5Y6/1	黄灰色土 (炭粒わずかに含む)	72. 10YR6/1	褐色粘質土 (下部は橙褐色粘土ブロック含む)
21. 7.5YR7/3	にぶい褐色土 (褐色粘土ブロック含む)	47. 10YR6/2	黄褐色粘質土 (粘性は59層より弱い)	73. 10YR4/1	褐色土 (下部は橙褐色粘土ブロック含む)
22. 10YR7/4	にぶい黄褐色土	48. 10YR7/2	にぶい黄褐色粘質土 (粗褐色粘土ブロック多く含む)	74. 5YR5/6	明赤褐色土
23. 7.5YR7/1	明褐色粘質土	49. 2.5Y5/1	黄灰色粘土 (黄褐色粘土ブロック含む)	75. 7.5YR5/1	褐色粘質土 (下部に炭および黄褐色粘土ブロック多く含む)
24. 10YR6/2	灰黄褐色砂質土 (炭粒をまばらに含む)	50. 10YR8/4	浅黄褐色砂質土	76. 5YR5/2	灰褐色粘質土
25. 7.5YR6/3	にぶい褐色砂質土	51. 10YR7/2	にぶい黄褐色微砂	77. 10YR6/6	明黄褐色土
26. 10YR4/2	灰黄褐色砂質土	52. 7.5YR6/2	灰褐色土		

図 11 調査区西壁土層断面図③ (S = 1/50)

調査区西壁 (図 9 ~ 11)

I層：1・6層、II層：2 ~ 5・7 ~ 9層、III層：10・12・13・15 ~ 34・58 ~ 60層、IV層：14・61・62層、V層：63 ~ 68・71・73・75・76層、VI層：74・77層
SK348：35 ~ 37層、SD148：38 ~ 45層、SD359：46 ~ 49層、SK403：50 ~ 54層、SK272：55 ~ 57層、SD351：69層、SD313：70層、SD314：72層

にぶい黄色粘質土、灰黄褐色粘質土等から成る。中世以前の遺物を一定量含む。

IV層は調査区の中央部～南部、NR170から北西側の一带に広がって存在する。にぶい褐色砂質土、灰褐色砂質土～砂から成る。古墳時代初頭以前の遺物を少量含む。NR170の氾濫層であると考えられる。IV層の堆積はNR170の埋没よりも古い時期である。

V層は遺構基盤層である。弥生時代以前の堆積層である。遺物は出土していない。暗褐色粘質土、褐灰色砂質土、にぶい黄褐色粘質土、灰黄褐色土等から成る。多くの遺構の形成面としてVI層と分けているが同じく地山層である。

遺構面はIV層上面及びV層上面である。IV層が存在する調査区南部においてはIV層を除去しての検出作業を行った遺構を、調査時には下層遺構として扱っている。ただし結果として下層遺構とした遺構の多くは、遺構形成面がIV層上面であったことが明らかとなっている。明確にIV層下に存在する遺構は限られ(具体的には次節で述べる)、今回報告する遺構は基本的にIV層堆積後のIV・V層上面に形成されたものである。

第3節 遺構

遺構は大きく3時期に分けられ、平安時代後期～鎌倉時代、古墳時代中期、古墳時代初頭以前の遺構が存在する。古墳時代の中でも初頭と中期との間には、遺構に時期的断絶がある。

調査時には中世以降の遺構を上層遺構としている。古墳時代以前の遺構については位置が重複する遺構が多く、また遺構の検出面が基本層序IV層とV層とに分かれるという認識があったこと等から、便宜的に中層遺構・下層遺構に分けて調査・記録を行っているが、結果的にこれは古墳時代中期と初頭とに対応する形とはならず中層遺構と下層遺構に両時期の遺構が混ざり合うこととなった。そのため、今回の報告においては上・中・下層遺構との分け方は基本的に使用せず、時代区分に基づく形で再整理を行って遺構の記述を進める。ただし写真図版ページの作業段階を示す説明において必要な場合等には、これを用いる。古墳時代の遺構は前節で述べたとおり、その大部分がIV層上面に存在するが、遺構検出の困難さからIV層除去後のV層上面で存在を確認したものが多い。

なお、調査区北半部の東側を中心とする範囲には、遺構面にまで及ぶ近現代の攪乱が複数存在しており、その範囲は図12に示している。これらの攪乱は、基本的に上層遺構の検出作業までに除去している。

以下に各時代の遺構について上層から順に述べる。

平安時代後期～鎌倉時代（図12～19）

この時期の遺構には、耕作溝群と掘立柱建物、井戸、土坑、土坑墓、ピットがある。

耕作溝群は、耕作活動の累積によって形成されたと考えられる遺構群で、いわゆる素掘り溝の集まりである。出土遺物から時期は12世紀以降であると考えられ、図12～14に示す耕作溝の時期は鎌倉時代以前と考えられる。それぞれの溝の規模は幅約0.2～0.4m、深さ最大約0.3mである。

耕作溝は調査区のほぼ全域に分布する。調査区南東部はやや希薄であるが、これは遺構形成層の違い（古墳時代河道埋土がベース層となる範囲）により溝の遺存状況に差異が生じたためと考えられる。耕作溝の向きは概ね方位に沿っており、南北方向と東西方向の両方が存在する。数的には南北方向が多く、東西方向の溝は調査区中央部東寄りの位置に集中する。時期的には、基本的に南北方向の溝のほうが新しい。

調査区の北西部、┘字に屈折するSD065に囲われた範囲については、全体の耕作深度が周囲よりも明確に一段深く（深さにして最大約0.2m）になっており、その分だけ下層の古墳時代遺構の検出面が低くなっている。SD065は、この調査区北西部一帯を他と画する区画溝であると考えられる。SD065の埋土や出土遺物には、他の耕作溝と目立った差異は無い。

耕作溝からの出土遺物は下層の古墳時代遺構に由来する土器等が数的に多くを占めるが、耕作溝の形成時期に対応すると考えられる鎌倉時代前半の瓦器片も一定量存在する。

耕作溝以外の遺構は、基本的に耕作溝より古い時期の遺構である。時期を示す遺物がほとんど出土していないため、多くは詳細な時期は不明であるが、耕作溝群との関係から鎌倉時代初頭以前を中心とする時期である可能性が高い。

調査区の北東部及び中央部から南西部の範囲にまとまる形で、小規模なピットが約160基存在す

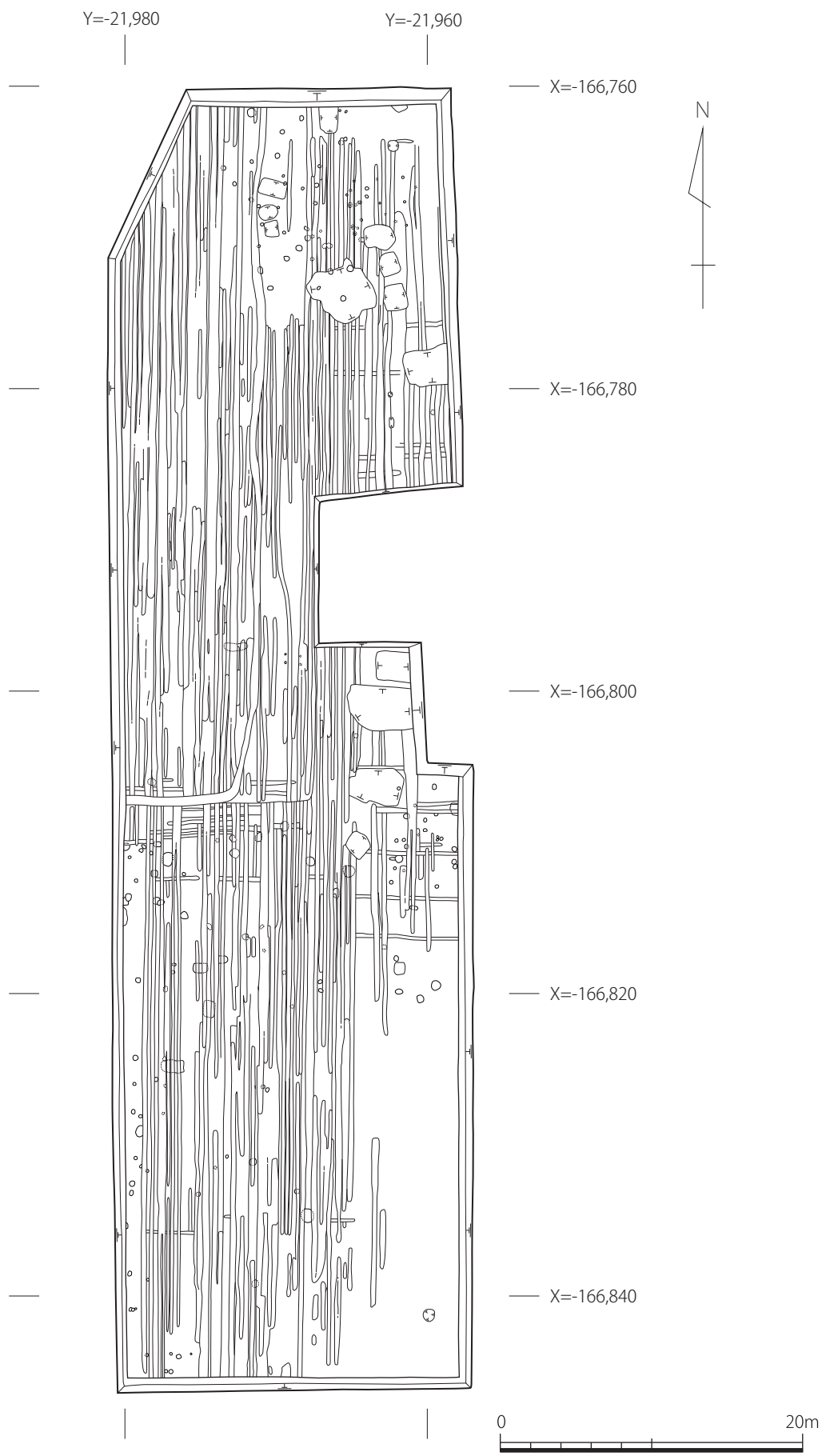


图 12 平安時代後期～鎌倉時代遺構配置図 (S = 1/400)

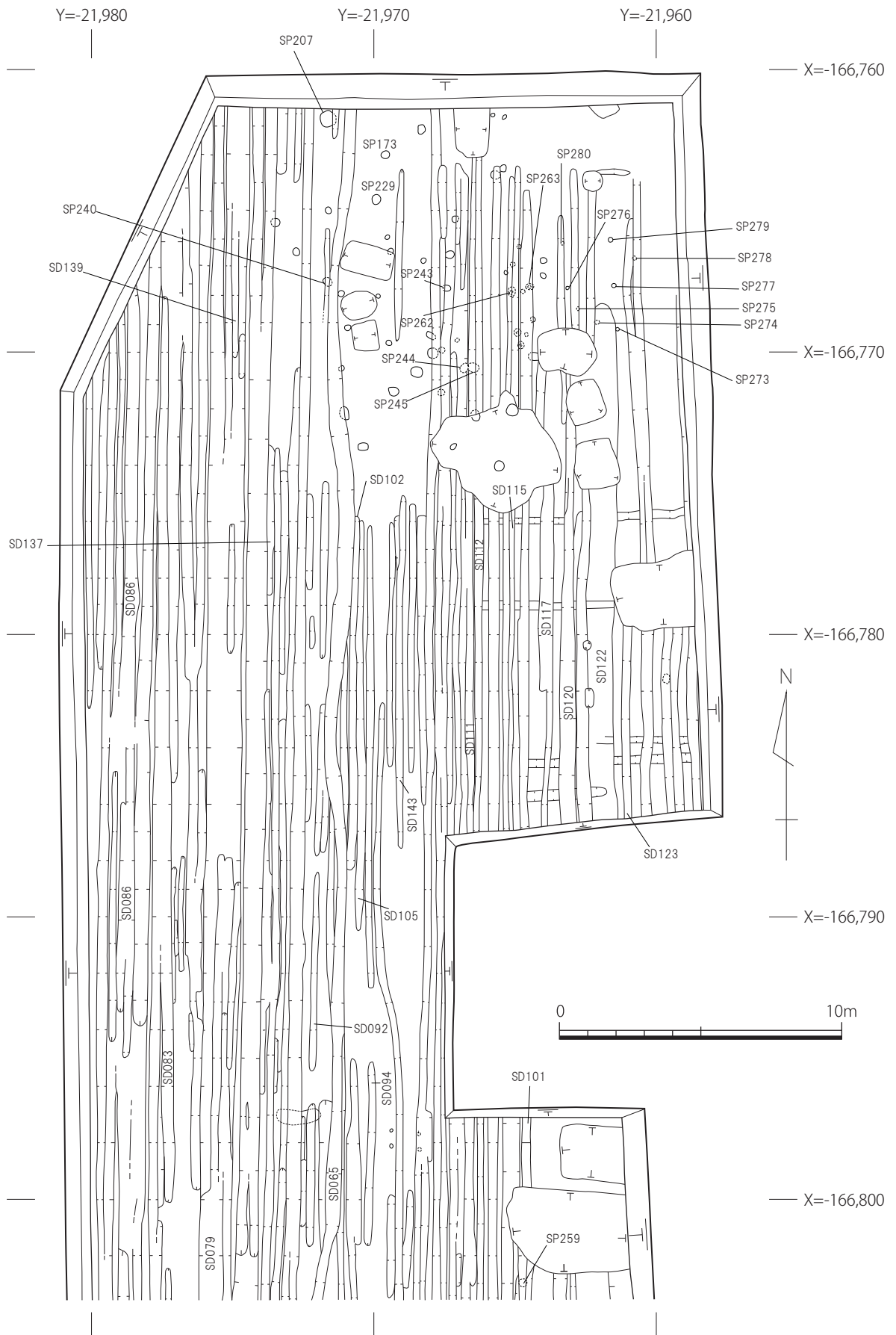


图 13 平安時代後期～鎌倉時代遺構平面図① (S = 1/200)

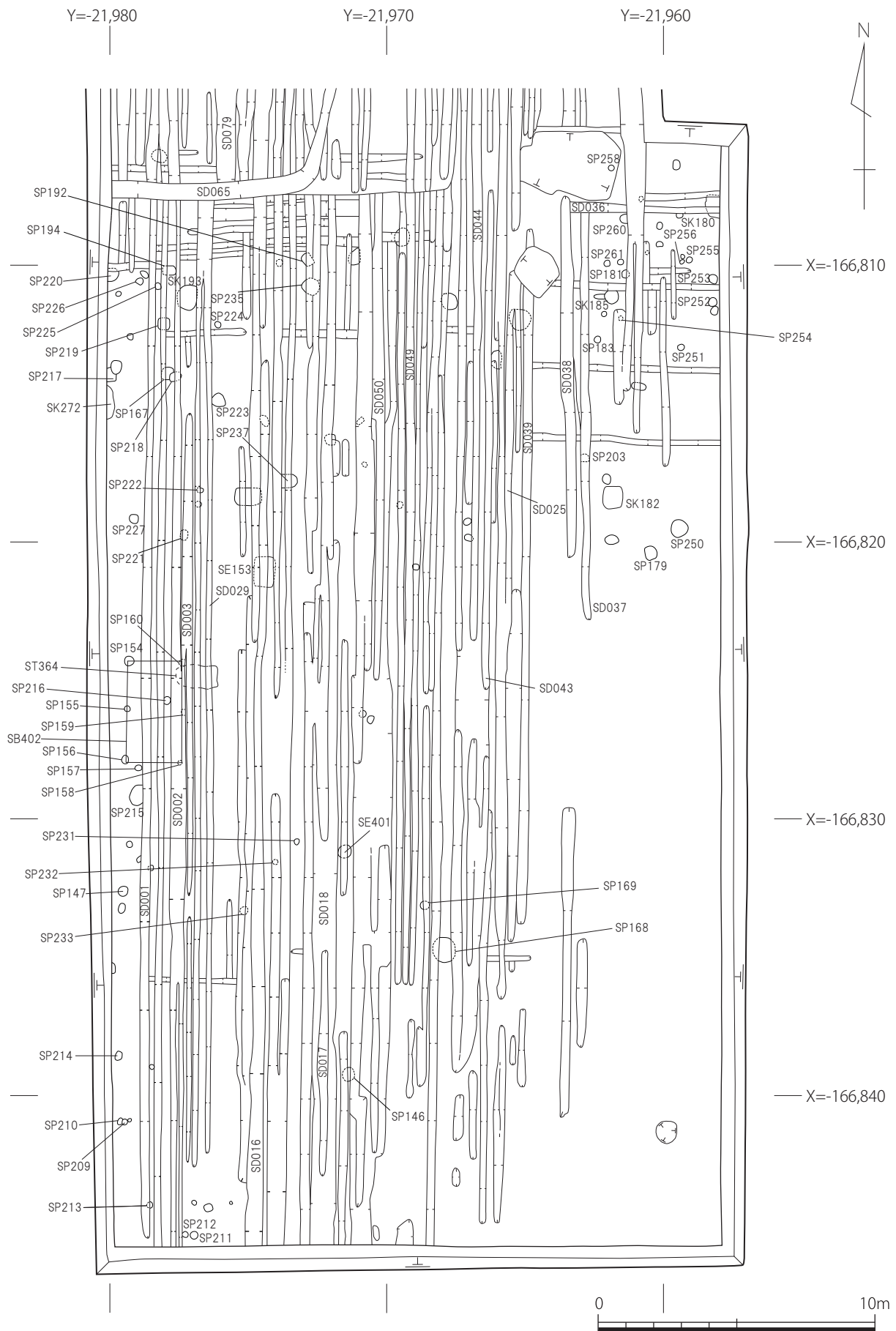


图 14 平安時代後期～鎌倉時代遺構平面図② (S = 1/200)

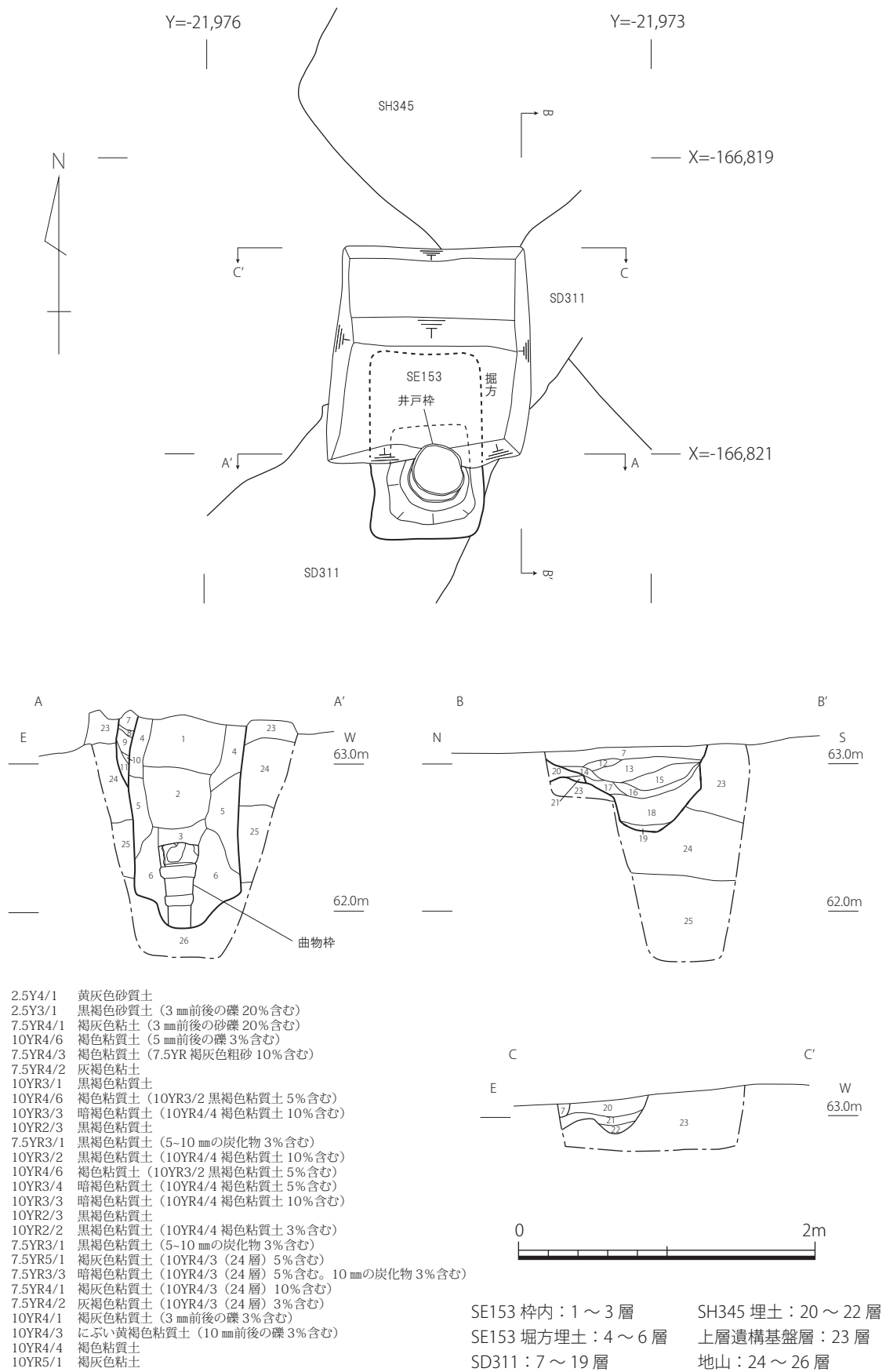


図 15 SE153 平面・断面図 (S = 1/40)

る。大半が直径約0.2~0.4mの小規模なピットで、柱穴であると考えられるものが多い。ピットの配置から明確に復元できる構造物は、掘立柱建物1棟がある。SB402は調査区南西部に位置し、調査時から存在を認識していたが、掘立柱建物としての遺構番号は整理段階で新たに付与している。南北2間(3.5m)×東西1間(2.0m)の南北棟で、ほぼ正方位に沿う。柱穴はいずれも直径0.2m程度で簡素な小屋であったと考えられる。この他では、簡易的な掘立柱塀に復元できそうな小ピットの連なりが散見される。これらはいずれも方位に沿わない。

井戸は2基存在する。SE153は調査区南西部に位置する(図15)。掘方の平面形は南北1.0m・東西0.7mの隅丸方形である。掘方のやや南寄りの位置に、曲物を縦に重ねて井戸枠としている。曲物は3段残っており、それより上部は抜き取られている。各段の曲物の規模は直径0.4m、高さ約0.2mを測る。井戸の深さは1.5mである。SE153の調査は下層に存在する遺構との関係もあり、遺構北側を大きく断ち割っている。図15の平面図は断割を行って井戸枠を検出した状態である。掘方埋

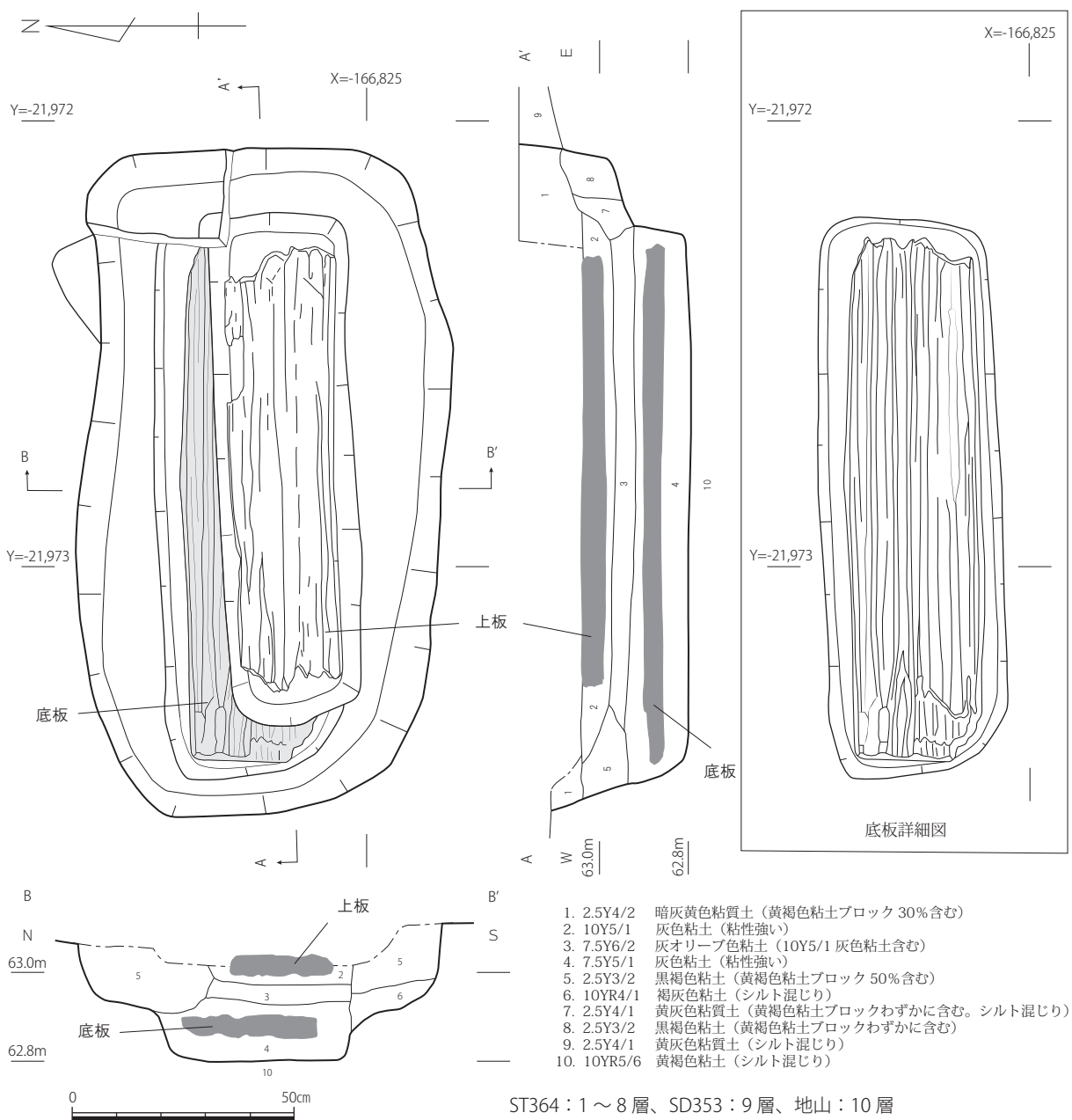


図16 ST364平面・断面図(S=1/15)

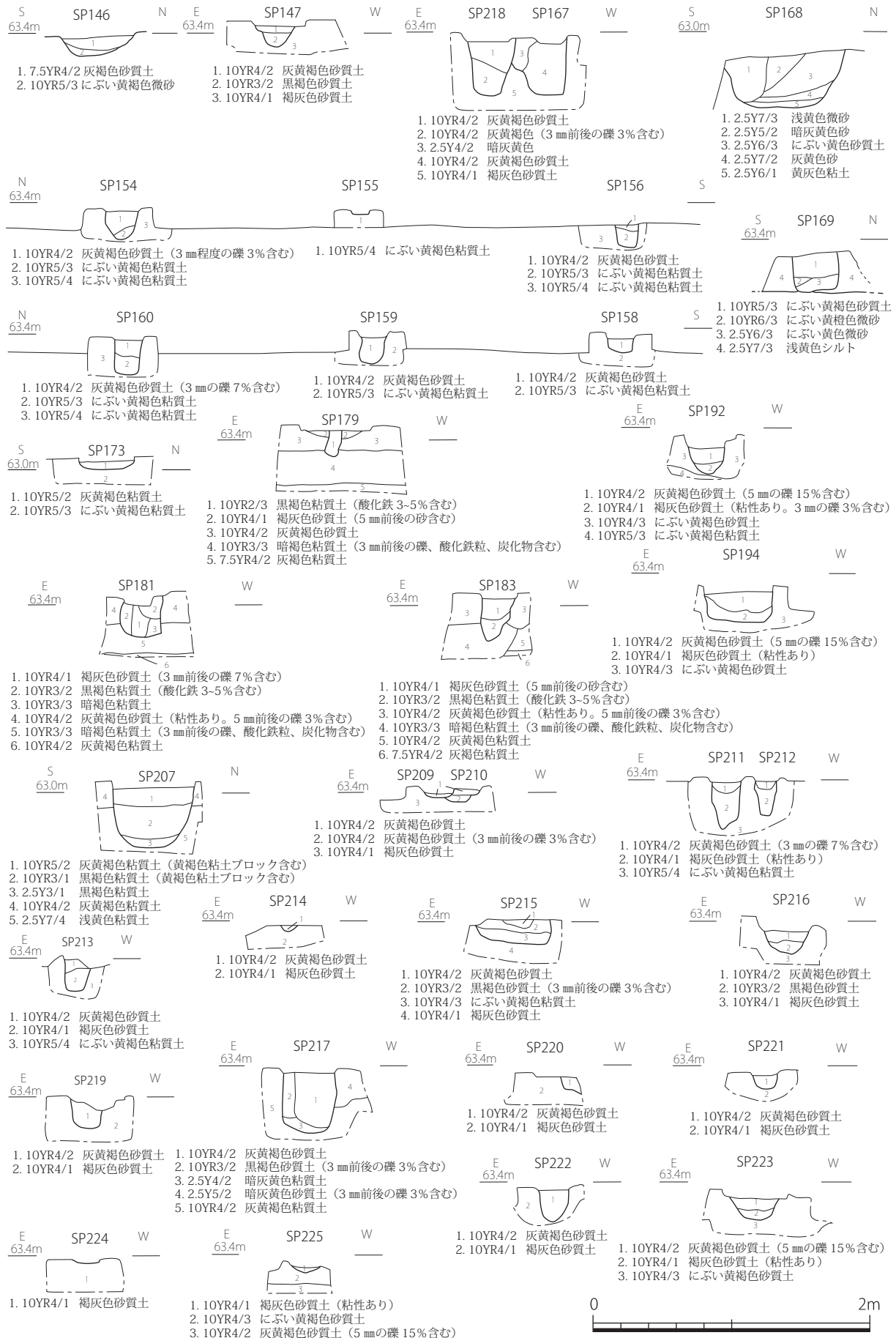


図 17 平安時代後期～鎌倉時代遺構 SP 断面図① (S = 1/40)

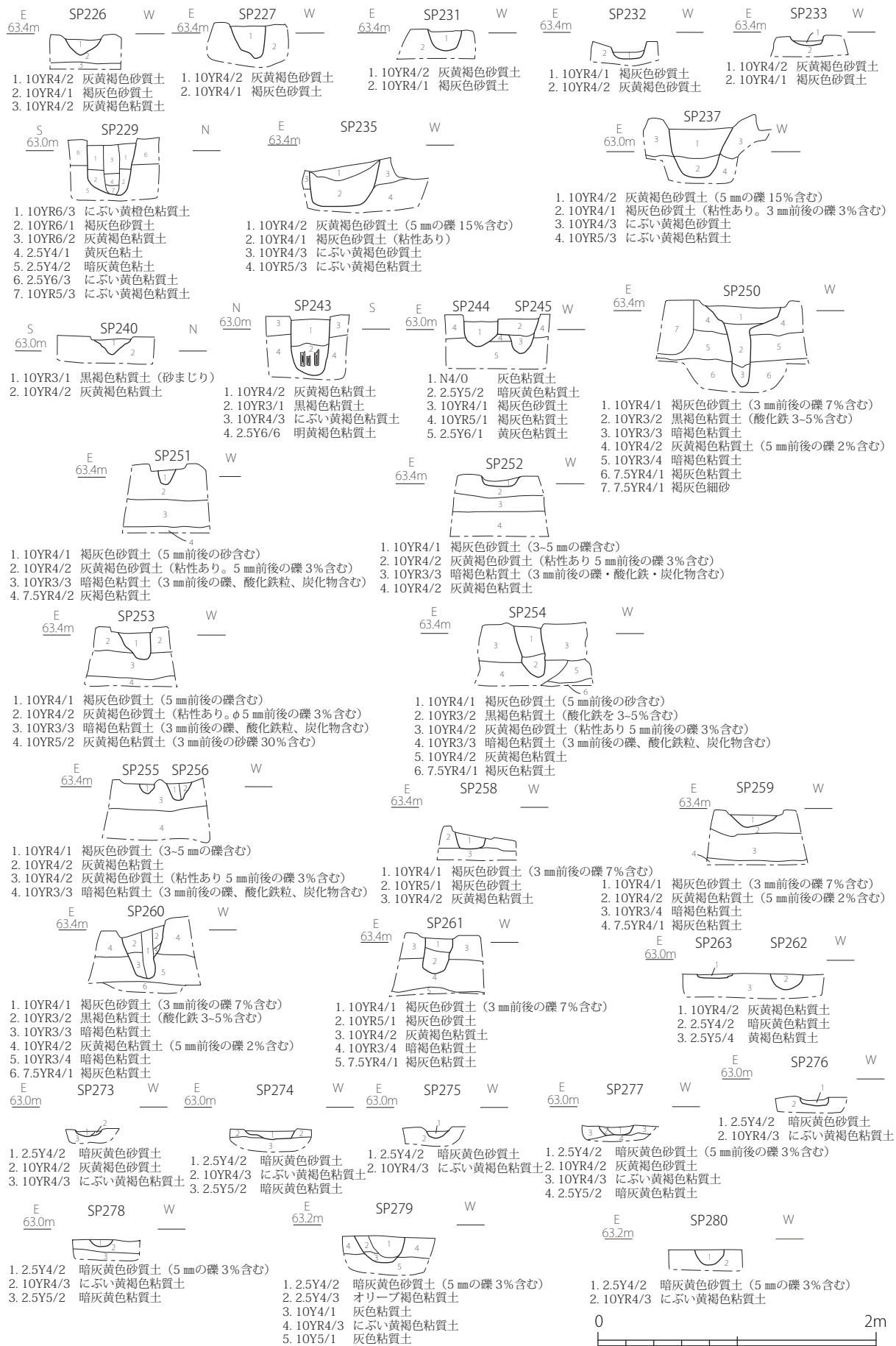


図 18 平安時代後期～鎌倉時代遺構 SP 断面図② (S = 1/40)

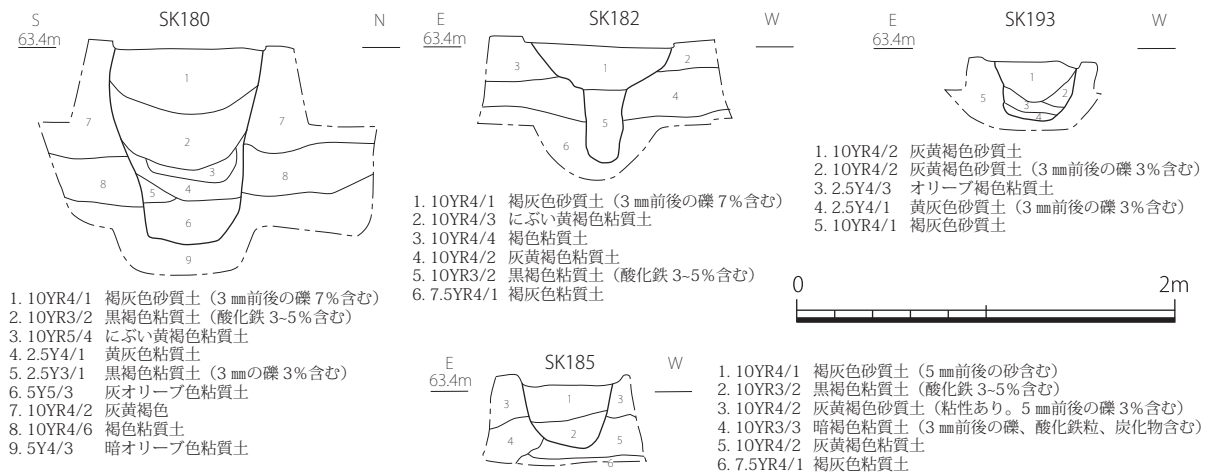


図 19 平安時代後期～鎌倉時代遺構 SK 断面図 (S = 1/40)

土から 11 世紀の土師皿や黒色土器が出土している。

SE401 は調査区南部に位置する井戸である。中世遺構の調査時には遺構の検出が出来ておらず、下層の古墳時代前期河道の調査途中で遅れて存在を認識した遺構である。掘方の平面形は直径 0.7 m の円形である。井戸の深さは約 0.5m である。井戸枠として直径 0.4 m、高さ 0.2 m の曲物一段を据えている。曲物には拳大の石が数点残されていた。その他に遺物は出土しておらず、詳細時期は不明である。

ST364 は調査区南西部に位置する土坑墓である (図 16)。平面形は東西 1.5 m、南北 0.8 m の東西に長い隅丸方形である。土坑内からほぼ同規模であったと考えられる大型の木板が二枚出土しており、やや変形的であるが調査時に木棺墓と認識している。木板の規模は長辺 1.2 m、短辺 0.3 m、厚さ 0.03 m で上側の板は一部が失われている。両板の間には厚さ約 0.1 m の灰色粘土層が堆積している。土坑自体がこの木板を収めるために掘られたと考えられ、深さは 0.5 m である。出土遺物は土師器の細片が数点のみであり、これらも下層の古墳時代遺構に由来すると考えられるものであり、出土土器から遺構の詳細時期の判別が難しい。そのような出土遺物の状況や周辺の遺構との関係等から ST364 は、調査時から古墳時代の遺構である可能性も認識をしている。

この他に小規模な土坑が点在する (図 19 断面)。出土遺物が限られており詳細な役割が分かるものは無い。

古墳時代中期 (図 20～22)

古墳時代中期は遺構の量は限られるが、この時期の出土遺物量は古墳時代初頭に次いで多い。調査時には早い段階から古墳時代中期の遺構・遺物が存在することを認識しており、これを中層遺構として調査を進めている。ただし、先述のとおり古墳時代初頭の河道を始めとした他の時期の遺構もこれと並行して調査する結果となっており、必ずしも調査の進行と遺構の時期は一致していない。図 20 は、最終的に古墳時代中期と判断される遺構を抽出整理した平面図である。これらのうち落ち込みや溝の一部は深さが浅く、遺構の範囲も不明瞭なものが含まれており、完掘状況図にうまく記録されておらず、その外形ラインで作図している。なお、今回の発掘調査に伴う空中写真はこの中層遺構完掘段階

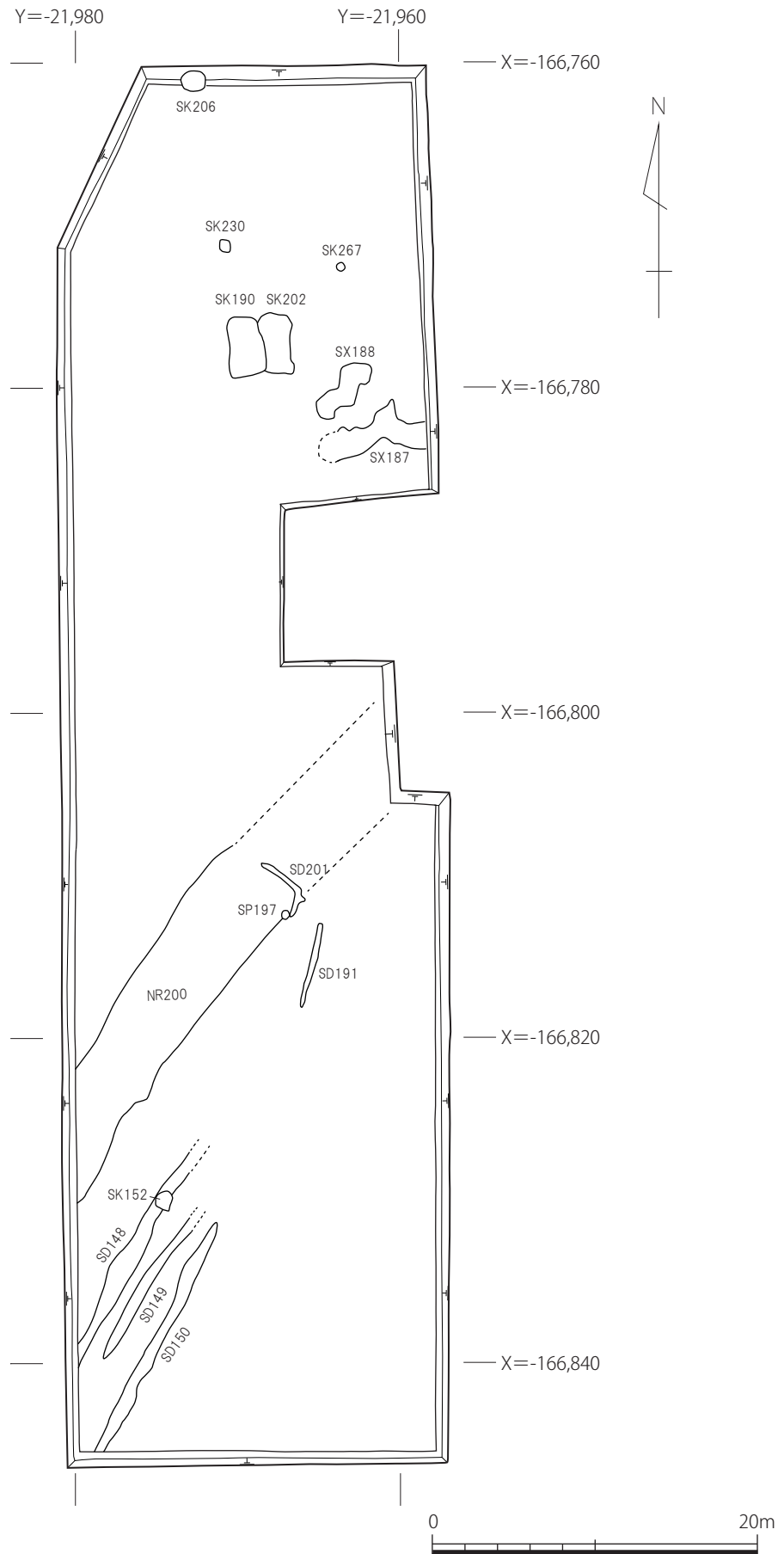


图 20 古墳時代中期遺構配置図 (S = 1/400)

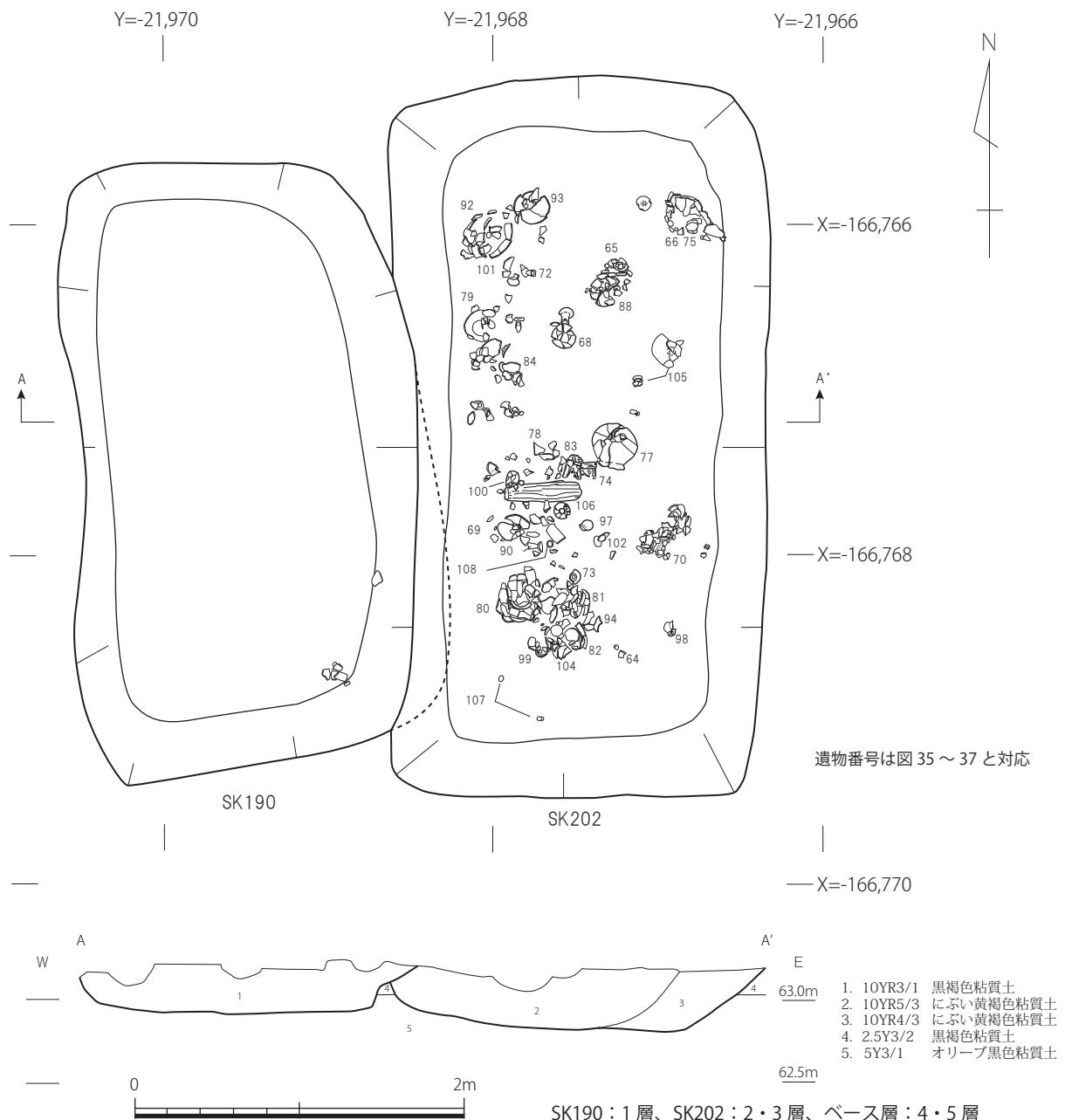


図 21 SK190・SK202 平面・断面図 (S = 1/40)

として撮影をしているが、古墳時代初頭及び中期遺構の調査途中段階の写真となっている。

古墳時代中期の遺構は土坑、溝、落ち込み、ピットがある。遺構が存在する範囲は、調査区北東部と南部に大きく分かれる。土坑のように明確な掘り込みを有する遺構は北東部に多く、南部では遺構としての括りがやや不明瞭な落ち込みや浅い溝が主である。

SK152 は調査区南西部に位置する。平面形が直径 1.0 m の円形である。深さは 0.75 m で断面形は砲弾形である。古墳時代中期の土師器が出土しており、ほぼ完形の土師器壺 1 点を含む。出土した土器はいずれも表面の摩耗が激しい。

SK190 と SK202 は調査区北半部に位置し、東・西に隣接して存在する 2 基の土坑である (図 21)。調査時及び既往の報告では SX190・SX202 として記録・報告しているが、今回の報告から SK190・SK202 と変更する。どちらも南北方向に長い長方形の土坑で、西側の SK190 の東辺と東側

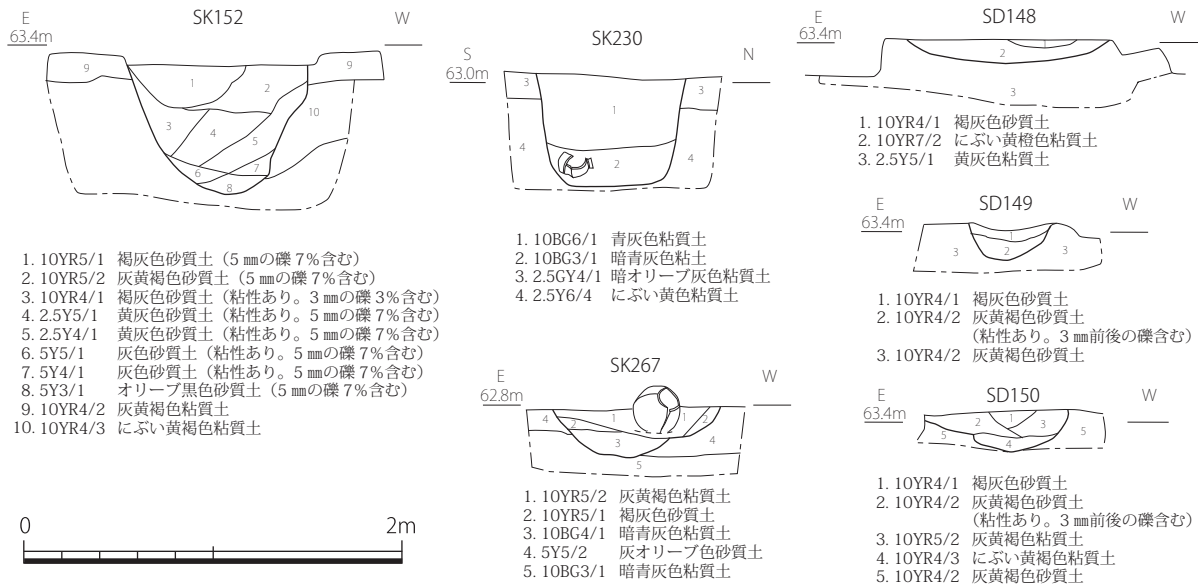


図 22 古墳時代中期遺構 SK・SD 土層断面図 (S = 1/40)

のSK202の西辺がわずかに重なる。SK190が新しい遺構であることが土層断面で確認できる。ただし、出土遺物の時期や遺構の類似性、両者の位置関係等から、あまり時期を経ず連続的に形成された遺構である可能性が高いと考えられる。SK190の規模は南北長3.5m、東西長2.0m、深さ0.55mである。SK202は南北長4.3m、東西長2.2m、深さ0.6mであり、こちらのほうが全体にやや大型である。どちらも土器が多数出土しており、特にSK202は量が多い。SK190からは古墳時代中期後半を中心とする時期の土師器と須恵器が出土している。SK202からは同じく古墳時代中期末頃の土師器（竈を含む）と須恵器が出土しているが、加えて古墳時代前期に遡る土師器も多く出土している点が特徴的である。SK190とSK202は廃棄土坑である可能性が高いと考えられる。廃棄が行われたと考えられる古墳時代中期後半よりもかなり古い時期の土器も多く含まれる状態であり、当時の人々が周辺を掘り返した際に出土した土器も含めて廃棄したものと理解できる。

SK206は調査区北西隅に位置する土坑である(断面図は図5調査区北壁)。直径1.7mの平面円形で、深さ1.3mである。素掘りの井戸である可能性もある。古墳時代中期後半の土師器と須恵器が出土しており、中期前半の土器も少量混ざる。

SK230は調査区北部、SK190から北に約5mの地点に位置する土坑である。平面形は一辺0.6~0.8mの隅丸方形である。断面形はコ字形で、深さ0.6mである。古墳時代中期の土師器、須恵器、韓式系土器、石製品が出土している。鍋や高坏蓋、滑石製小玉といった特徴的な遺物も含まれる。

SK267は調査区北東部、SK202から北東に約5mの地点に位置する土坑である。平面形は直径0.7mの円形である。深さは0.25mで、東側が一段低くなる。割れた状態ではあるがほぼ全体が遺存する土師器甕が出土している。

SX187とSX188は調査区北東部に位置する不整形な落ち込みである。古墳時代中期中頃~後半の土器を含む灰褐色粘質土が薄く広く堆積する。

SP197は調査区南部に位置する直径0.25mの小規模なピットである。少量ながら土師器が出土している。

NR200は調査区南部に位置する。シルト質微砂~細砂層が幅約4.0~5.8m、検出長約25mの北

東—南西方向に長い形の範囲に、厚さ 0.1～0.2 m 程度で堆積しており、これを河道もしくはその氾濫層の広がりとして認識している。古墳時代中頃以前の土師器、須恵器、石製品、鉄滓が出土している。NR200 より下層には古墳時代初頭の遺構が多く存在するため、それらに由来すると考えられる土器も一定量含まれる。

SD148・SD149・SD150 は、いずれも調査区南西部に位置する北東—南西方向の溝で、深さは最大でも 0.25 m 程度と浅い。幅は SD148 が 0.4～1.5 m、SD149 が 0.4～0.5 m、SD150 が 0.4～0.8 m である。いずれも古墳時代中期の土師器と須恵器が出土している。

SD191 は調査区南部に位置する直線的な溝である。長さ 5.2 m、幅 0.3～0.5 m、深さ 0.3 m である。溝の中央部付近から古墳時代中期後半の土師器と須恵器がまとまって出土しており(写真図版 11 下)、全体像が把握できる土師器の甕や鍋も含まれる。縄蓆文タタキの甕の破片も出土している。

SD201 は SD191 の北西に位置する、逆く字形に屈曲する溝である。長さ 4.4 m、幅 0.3～0.6 m、深さ 0.3 m である。古墳時代中期の土師器と須恵器が出土している。

古墳時代初頭 (図 23～30)

古墳時代初頭は今回の発掘調査で最も出土遺物の量が多く、遺構も大小様々なものが存在する時期である。確認できる遺構・遺物の時期は、庄内式期古段階から布留 0 式期(一部に布留 1 式期を含むか)が主であり、これらをもって古墳時代初頭としている。上層の遺構や堆積層からは、布留式中～新段階の土師器も出土するが量は限られる。

遺構は全体像を見ると、調査区東側に河道や溝といった土地の利用に影響を与える大型の遺構が存在し、それらの西側に竪穴建物や細かな溝、土坑が存在する形となる。特に調査区南部では、河道 NR170 の西岸一帯に多くの遺構が形成される。調査区南部の遺構群については先述の基本層序 IV 層の存在により遺構の把握に困難が生じたため、下層遺構の調査の過程で基本層序 IV 層を中心とする面的掘り下げを行って遺構の検出作業をしている。これらの遺構が上記の時期内で変化を見せており、その変遷については第 IV 章第 1 節でまとめる。

NR170 は調査区南東部に位置する広い河道である。河道の西岸部にあたり、東岸は調査区外に存在する。河道の検出幅は最大約 18 m である。西岸は調査区内で大きく屈曲しており、上流側にあたる南側では南北方向、下流側にあたる北側では東西方向となる。河道の深さは約 3.0 m で、東側ではさらに深くなる可能性がある。河道埋土(図 8—15～46 層)は大半が灰白色砂～粗砂で、一部に青灰色微砂が堆積する。布留 0 式～1 式古段階の土器が、埋土の最上層から最下層まで河道全体から出土している。調査区内における埋没は、この時期であると考えられる。河道自体は、それ以前の庄内式期から機能していたと考えられる。なお、河道上面に存在していた古墳中期以降の遺構を検出できずに河道の一部として掘削していた可能性が高く、同時期の遺物をわずかに含む。これに関連して当初の遺構の認識や作業工程の都合から、NR170 の掘り下げは中層遺構の調査段階に行っている。

NR397 は調査区北東隅に位置する河道で、その西岸部を検出している。南東から北西方向に流れる。この河道の下層部分を調査時には SD363 として扱っており、これも NR397 の一部として扱う。東岸は調査区外に存在し、検出幅は約 5m である。深さは 1.5 m 以上で、底面は確認できていない。出土遺物は、下層(SD363)から少量の古墳時代初頭の土器が出土しているのみである。上層からは遺

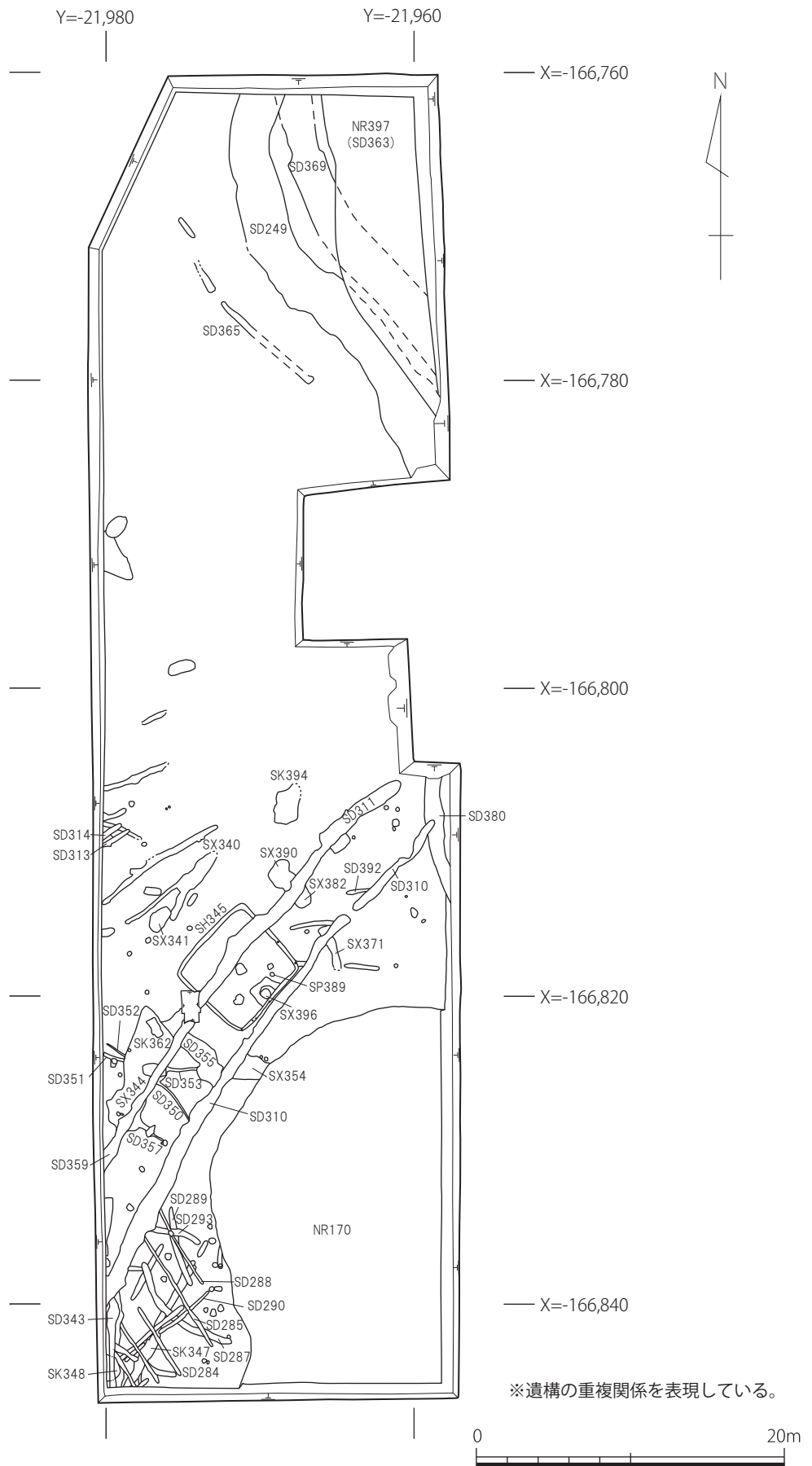


図 23 古墳時代初頭遺構配置図 (S = 1/400)

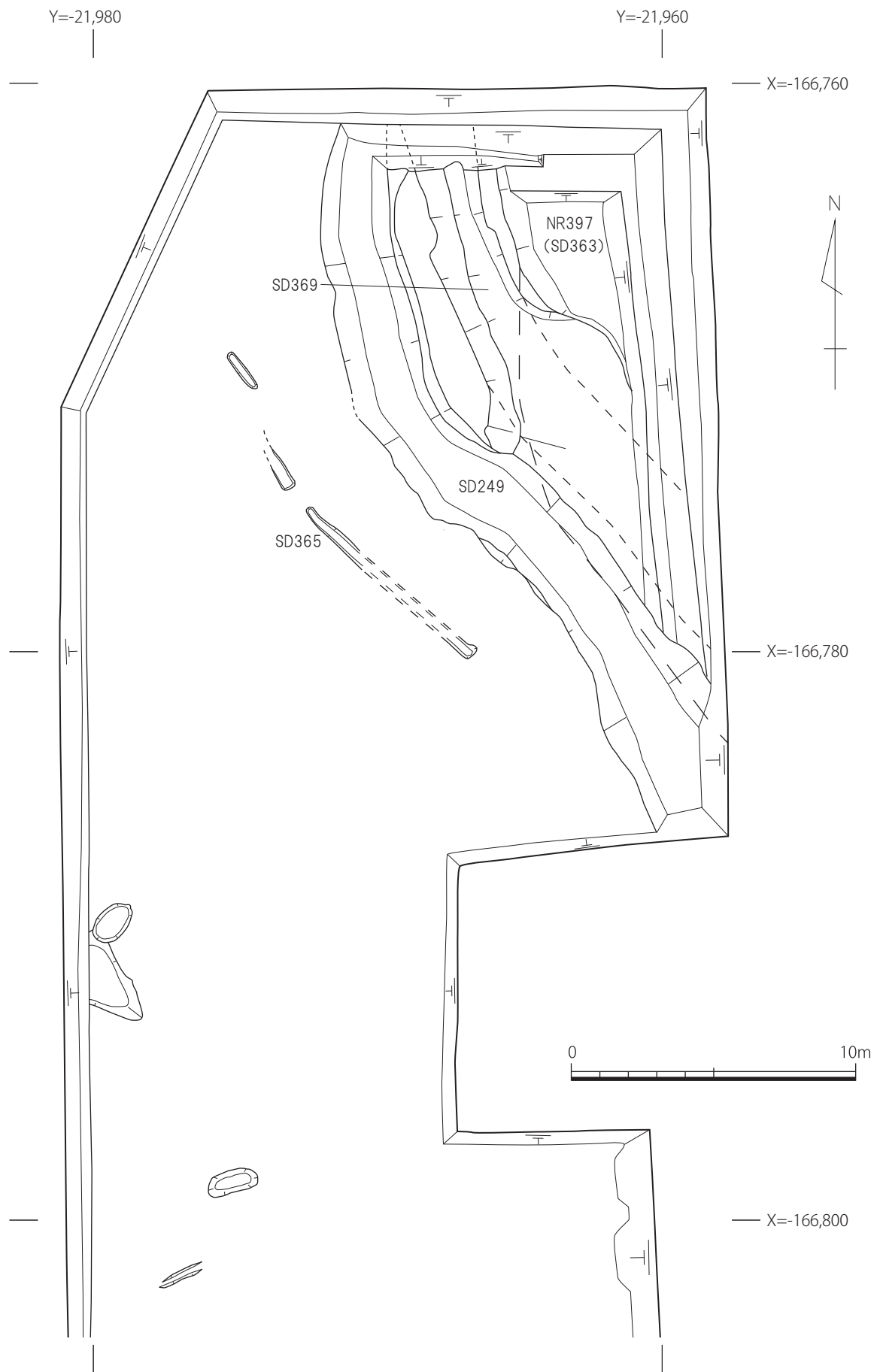


图 24 古墳時代初頭遺構平面図① (S = 1/200)

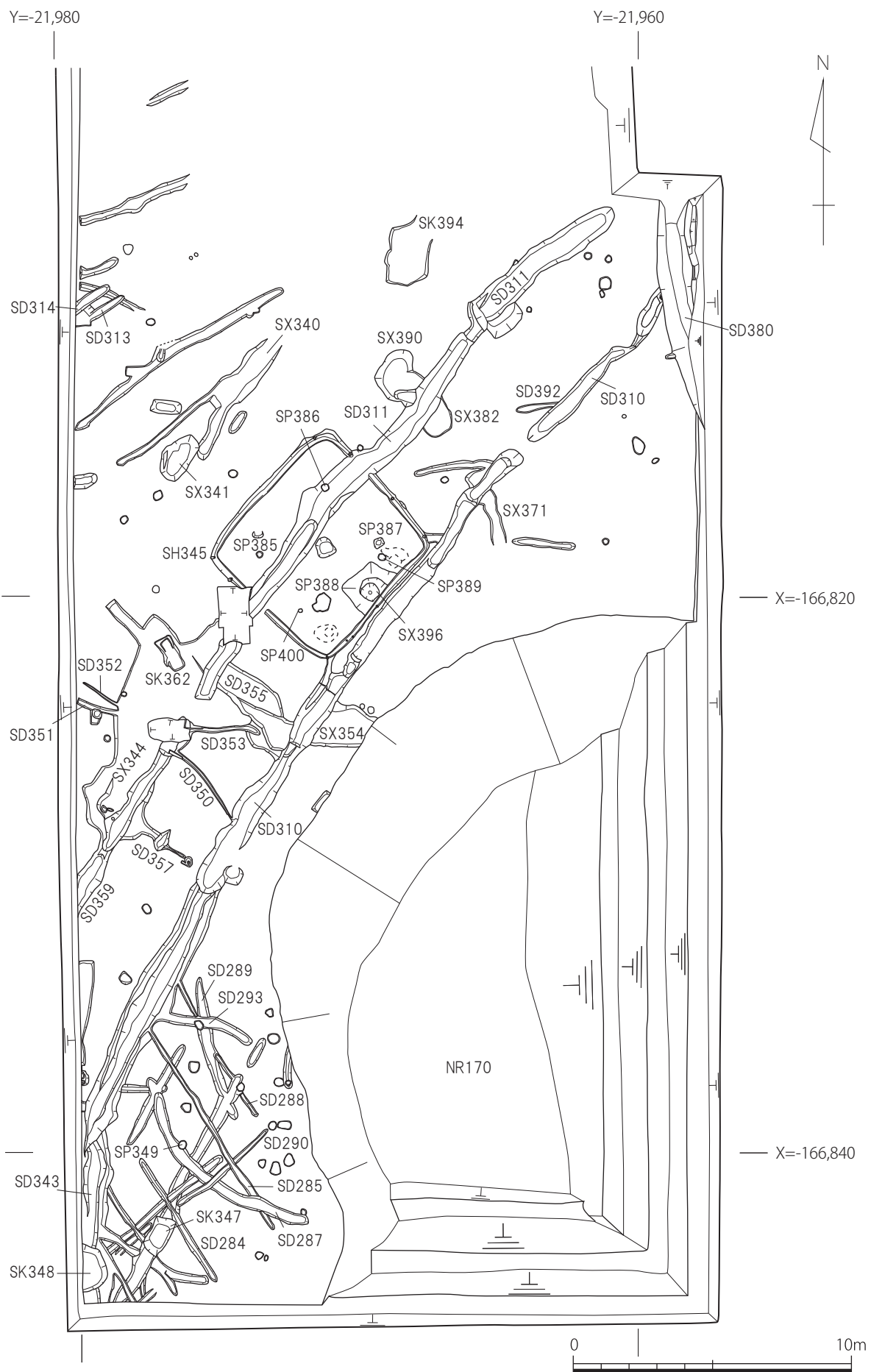
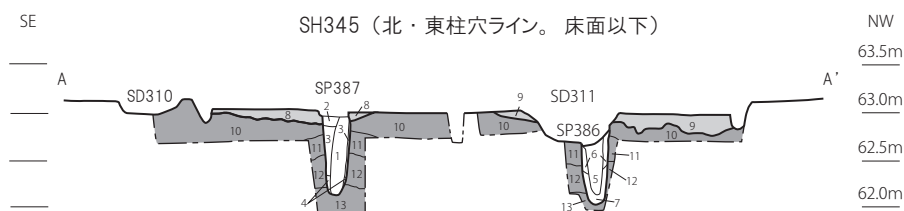
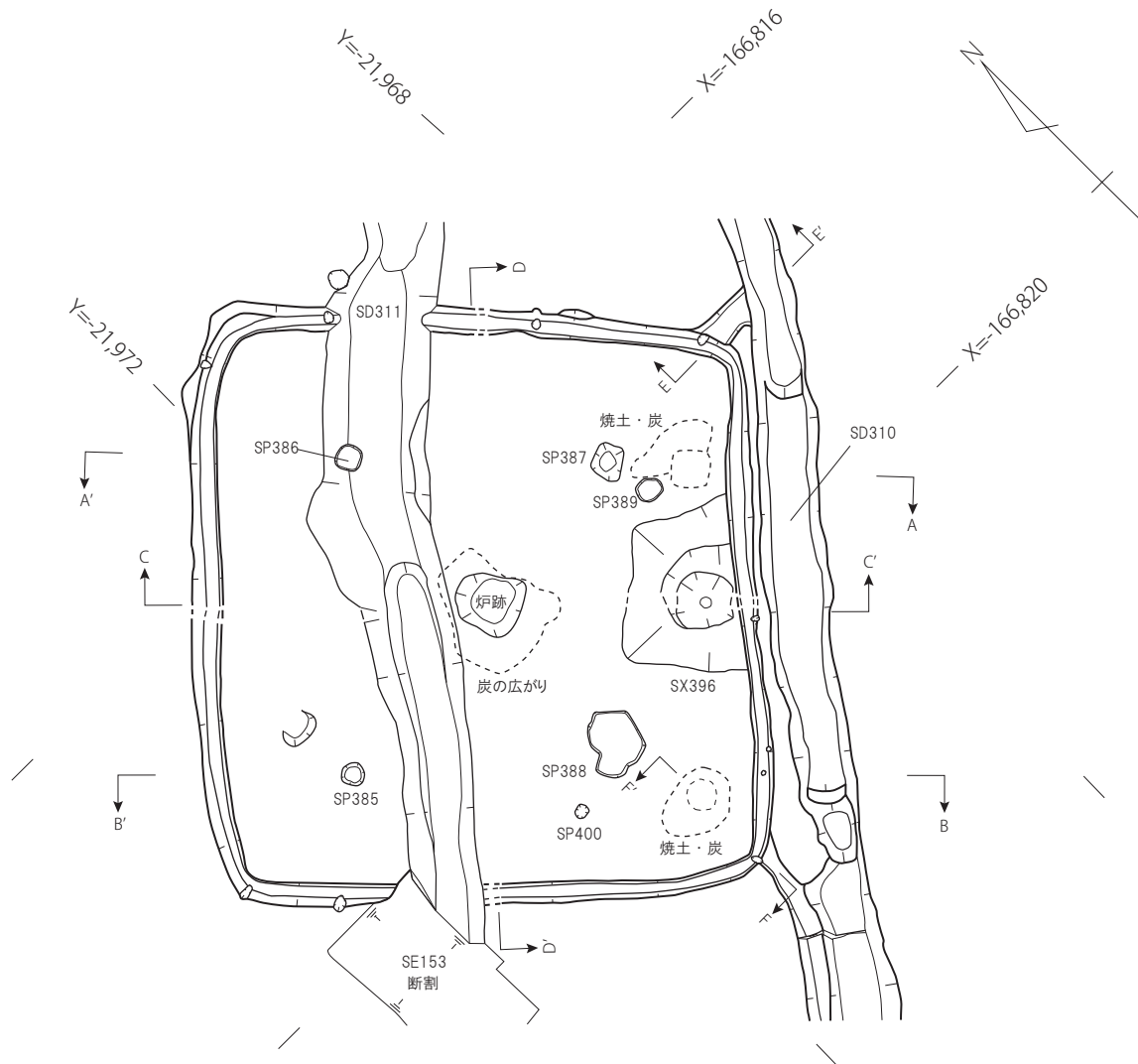


图 25 古墳時代初頭遺構平面図② (S = 1/200)



- | | |
|--------------------------------------|--|
| 1. 2.5Y4/1 黄灰色粘土 (浅黄色粘土ブロック含む) | 8. 2.5Y4/1 黄灰色シルト (浅黄色粘土 (マンガン含む) 50%含む) |
| 2. 10YR4/1 褐灰色粘質土 (明黄褐色粘土ブロック 30%含む) | 9. 2.5Y5/1 黄灰色粘土 (浅黄色粘土ブロック 50%含む) |
| 3. 10YR7/4 にぶい黄橙色粘土 (褐灰色粘土少量含む) | 10. 2.5Y7/6 明黄褐色粘土 (マンガン含む) |
| 4. N4/0 灰色粘土 (粘性強い) | 11. 10YR7/4 にぶい黄橙色粘土 (シルト混じり) |
| 5. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土 | 12. 10YR7/2 にぶい黄橙色粘土 (シルト混じり) |
| 6. 5Y5/2 灰オリーブ色粘土 (シルト混じり) | 13. 2.5Y3/1 黒褐色粘土 |
| 7. 5Y4/1 灰色粘土 (シルト混じり) | |

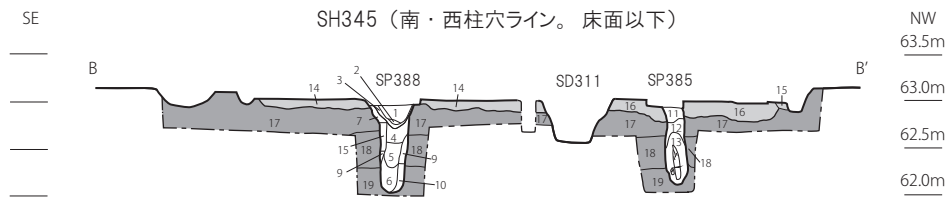
柱穴：1～7層、貼床：8・9層、地山：10～13層



図 26 SH345 平面・断面図① (S = 1/80)

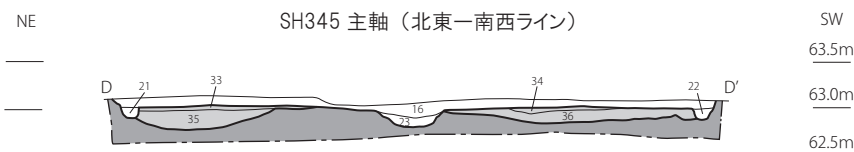
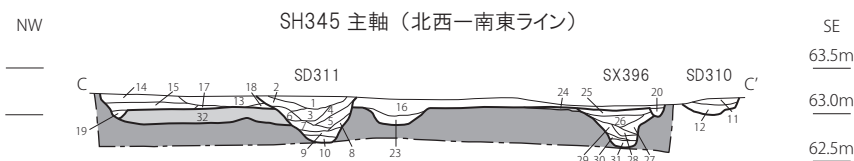
物が出土しておらず、最終的に埋没する時期は古墳時代中期以前のいずれかの時期であると考えられる。

SH345 は調査区南半に位置する竪穴建物である(図 26・27)。NR170 とは約 3m 弱の距離であるが、建物利用時の河岸の位置は不明である。掘方の平面形は方形で、一辺 6.0 × 5.9～6.3 m の規模である。壁面は 0.25～0.3 m の高さを残す。壁面沿いには幅 0.15 m、深さ 0.1～0.15 m の壁溝が四周に



- | | | | |
|------------|---------------------------------|-------------|------------------------------|
| 1. 2.5Y5/1 | 黄灰色粘質土 (径 2 cm 前後の明黄褐色粘土ブロック含む) | 11. 10YR5/1 | 褐灰色粘土 (2.5Y8/3 浅黄色粘土ブロック混じり) |
| 2. 2.5Y3/1 | 黒褐色粘土 (炭化物含む) | 12. 10YR5/1 | 褐灰色粘土 (浅黄色粘土が 11 層より多い) |
| 3. 5YR4/8 | 赤褐色粘土 (シルト混じり。1 層との間に炭層薄く堆積) | 13. 10Y6/1 | 灰色粘土 (粘性強い) |
| 4. 2.5Y6/4 | にぶい黄色粘土 (2.5Y6/1 黄灰色粘土を 40% 含む) | 14. 10YR7/1 | 灰白色粘土 (マンガンを斑状に含む) |
| 5. N6/0 | 灰色粘土 | 15. 10YR7/2 | にぶい黄橙色粘土 |
| 6. N5/0 | 灰色粘土 | 16. 10YR7/1 | 灰白色粘土 (マンガンを斑状に含む) |
| 7. 10YR7/4 | にぶい黄橙色粘土 (褐灰色粘土少量含む) | 17. 10YR7/4 | にぶい黄橙色粘土 |
| 8. 10YR7/3 | にぶい黄橙色粘土 (褐灰色粘土少量含む) | 18. 10YR7/2 | にぶい黄橙色粘土 |
| 9. 10YR6/4 | にぶい黄橙色粘土 | 19. 2.5Y3/1 | 黒褐色粘土 |
| 10. N4/0 | 灰色粘土 | | |

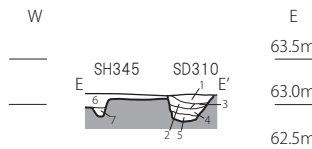
上層ピット：1～3層、柱穴：4～13層、貼床：14～16層、地山：17～19層



- | | | | |
|-------------|--|-------------|--------------------------------|
| 1. 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘質土 (シルト混じり) | 19. 10YR4/1 | 褐灰色シルト (黄褐色粘土ブロック 30% 含む) |
| 2. 10YR4/2 | 灰黄褐色粘質土 (シルト混じり) | 20. 10YR4/1 | 褐灰色シルト (炭化物微量) |
| 3. 10YR3/1 | 黒褐色粘質土 (シルト混じり) | 21. 10YR2/1 | 黒色シルト (黄褐色粘土ブロック 30% 含む) |
| 4. 10YR4/2 | 灰黄褐色粘質土 (シルト混じり。黄褐色粘土をわずかに含む) | 22. 10YR2/1 | 黒色シルト (黄褐色粘土ブロック 30% 含む) |
| 5. 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘質土 (シルト混じり。黄褐色粘土 30% 含む) | 23. N2/0 | 黒色炭 (N3/0 暗灰色と互層に堆積) |
| 6. 10YR4/1 | 褐灰色粘質土 (シルト混じり) | 24. 10YR7/1 | 灰白色粗砂 (2-5 mm 大の粒子) |
| 7. 2.5Y4/1 | 黄灰色粘土 (シルト多く含む) | 25. 10YR4/1 | 褐灰色粘質土 (10YR5/6 黄褐色粘土ブロック含む) |
| 8. 2.5Y4/2 | 暗灰黄色粘土 | 26. 2.5Y4/1 | 黄灰色粘土 (炭化物微量) |
| 9. 5Y4/1 | 灰色粘土 | 27. 2.5Y5/1 | 黄灰色粗砂 (2-3 mm 大の粒子、同色の粘土含む) |
| 10. 2.5Y6/3 | にぶい黄色粘土 (灰色粘土 30% 含む) | 28. 2.5Y5/4 | 黄褐色粘土 |
| 11. 10YR4/2 | 灰黄褐色シルト | 29. 2.5Y5/1 | 黄灰色粗砂 (2-3 mm 大の粒子、同色の粘土含む) |
| 12. 2.5Y4/1 | 黄灰色粘土 (10YR5/4 にぶい黄褐色粘土 30% 含む) | 30. 2.5Y5/4 | 黄褐色粘土 |
| 13. 10YR4/2 | 灰黄褐色シルト (10YR6/3 にぶい黄褐色シルトを 30% 斑状に含む) | 31. 2.5Y5/1 | 黄灰色粗砂 (2-3 mm 大の粒子、同色の粘土含む) |
| 14. 10YR4/2 | 灰黄褐色シルト (にぶい黄褐色シルト 5% 含む) | 32. 2.5Y6/4 | にぶい黄色粘土 (2.5Y5/1 黄褐色粘土 20% 含む) |
| 15. 10YR4/2 | 灰黄褐色シルト (にぶい黄褐色シルト 30% 斑状に含む) | 33. 10YR4/1 | 褐灰色シルト (炭化物少量) |
| 16. 10YR4/1 | 褐灰色シルト (10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 5% 含む) | 34. 10YR4/1 | 褐灰色シルト (炭化物少量) |
| 17. 10YR2/1 | 黒色シルト (炭化物焼土塊を含む) | 35. 2.5Y7/4 | 浅黄色粘土 (5Y5/1 灰色粘土 15% 含む) |
| 18. 10YR4/1 | 褐灰色シルト (10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 5% 含む) | 36. 2.5Y7/4 | 浅黄色粘土 (5Y5/1 灰色粘土 15% 含む) |

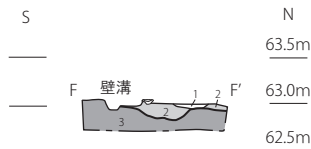
SD311：1～10層、SD310：11・12層、建物廃絶後の埋土：13～18層、壁溝埋土：19～22層、炉跡：23層、SX396：24～31層、貼床：32～36層

SH345 (東隅断面)



1. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト
3. 10YR4/1 褐灰色粘土
4. 10YR4/2 灰黄褐色粘土
5. 10YR4/2 灰黄褐色粘土 (10YR7/4 にぶい黄褐色粘土 50% 含む)
6. 10YR4/2 灰黄褐色シルト
7. 10YR2/1 黒色シルト

SH345 (南隅・焼土下断面)



1. 5YR4/8 赤褐色シルト (焼土塊)
2. 7.5YR4/1 褐灰色粘土 (10YR7/4 にぶい黄褐色粘土ブロック少量含む)
3. 10YR7/6 明黄褐色粘土 (マンガンの沈着少量あり)

SD310：1～5層、建物廃絶後の埋土：6層、壁溝：7層



図 27 SH345 平面・断面図② (S = 1/80)

巡る。主柱と考えられる柱穴が四ヶ所、方形に配される（SP385～388）。柱穴は平面不整形で直径0.3～0.7 m、深さ0.8～1.0 mである。一部の柱穴には、柱根が遺存している。建物中央部には直径0.7 m、深さ0.18 mの円形の炉跡が存在する。炉内には、炭化物と灰が互層に堆積する。肩部には炉内から灰を掻き出した痕跡と見られる灰の堆積が存在する。また、建物の東隅及び南隅にも直径0.6～1.0 m程度の範囲に焼土と炭の薄い広がりが存在する。床面には貼床が施されている。貼床は、にぶい黄色～浅黄色粘土層を中心として厚さ最大0.15 mを施す。貼床下の掘方は、建物壁面沿いがやや深く掘り込まれている。建物中央部を高台として残すような形であり、排水機能を意図した可能性が考えられる。また、建物南東辺中央にも床面下に土坑状の落ち窪み（SX396）があり、これも同様の役割が考えられる。SX396部分は叩き締めるように埋められており、その上面は周囲の床面より硬く仕上げられている。そのことから、この建物南東辺中央が建物の入口であった可能性も考えられるが、可能性の指摘に留まる。出土遺物は庄内式期新段階（庄内3式か）の土器がある。いずれも床面から上層での出土で、図46-225・230は床面直上での出土である。手彘形土器（図46-231）も含む。建物から約2.0～2.5 m離れた位置に存在する落ち込みSX340・SX354・SX390は、建物に伴う外周溝（その一部）である可能性が考えられる。深さは最大で0.3 mを残すが、地点による差異が大きい。これらの遺構からも少量ながら土器が出土している。なお、SH345と位置が重なるSD311はSH345の埋没後に掘削された溝である。SH345の東隅には長さ0.7 m、幅0.15 m、深さ0.05 mの小溝が接続している。小溝の底面は、SH345の床面より約0.1 m高い位置にある。この小溝はSH345廃絶とともに埋没しており、その上からSD311が掘削されたことが土層断面で確認できる。

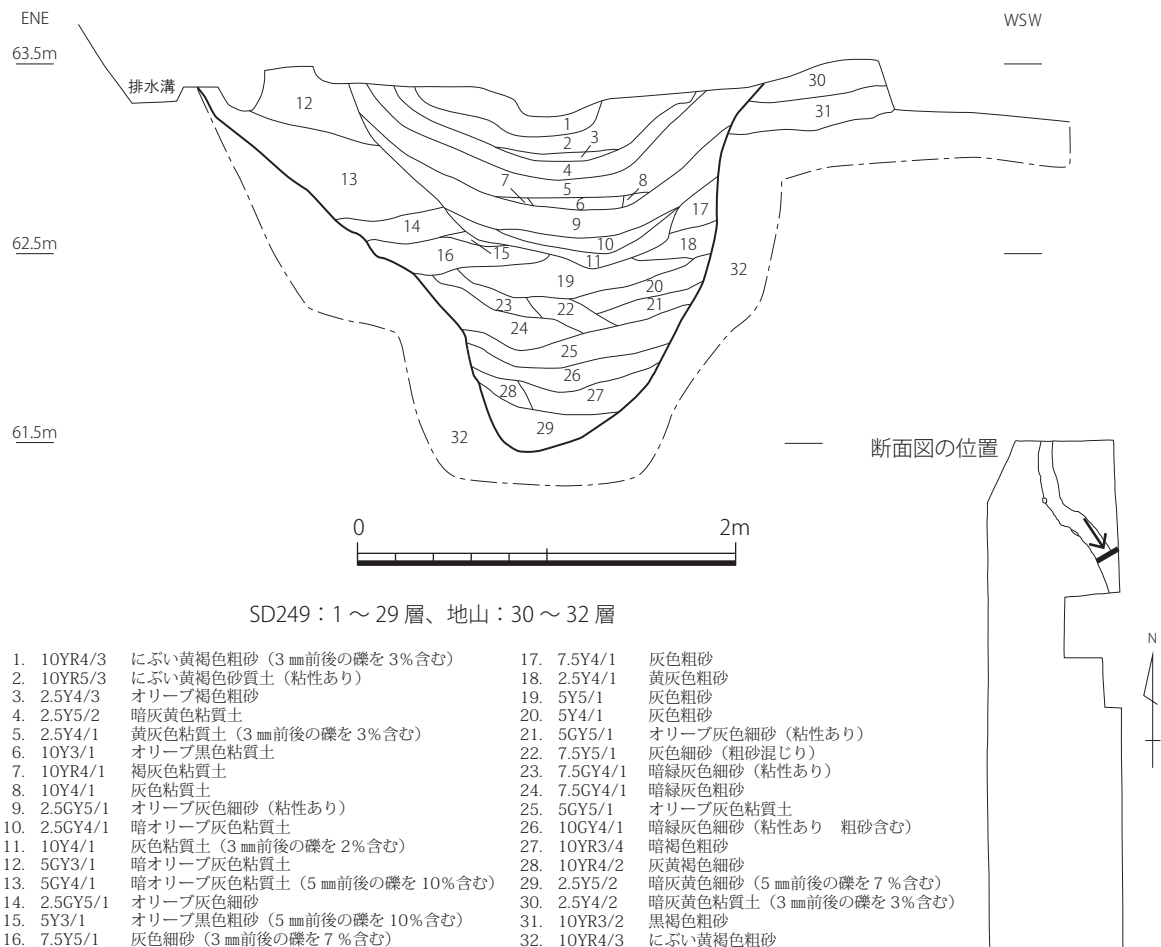


図28 SD249断面図 (S = 1/40)

SD249は調査区北東部に位置する比較的大規模な溝である。南南東から北に向かって屈曲する溝である。幅2.5～3.0m、深さ1.6～2.2mで、断面形は台形状である。土層断面の観察から、少なくとも二度の掘り直しが行われたことが分かる(図5・図28)。庄内式期から布留0式期にかけての時期の土器が出土しているが、掘り直しの各段階との対応関係は明確にできていない。数的には庄内期の土器が大半を占める。

SD310とSD311は調査区南半部に位置する南西―北東方向の溝で、約4m間隔で並走する二条の溝である。SD310が南側の溝である。幅最大1.5m、深さ最大0.4mであるが、深さは一定ではなく途切れている地点もある。布留0式期前後の土器が出土している。完形、ないしそれに準じる形に復元できる甕・壺を複数含む点も特徴である。SD311は北側の溝で、重複関係からSH345よりも新しい。幅最大1.3m、深さ最大0.45mで、全体にSD310より深い。SD310と同様に途切れる地点がある。出土遺物はSD310と同時期であると考えられる土器片があるが、量はSD310よりもかなり少なく対照的である。出土遺物の時期や位置関係から二条の溝は併存していた可能性が高いが、近接した時期に位置を変えて掘り直しを行った可能性も残る。

SD355はSH345の南西隣の地点に位置する溝である。出土遺物は庄内式期の土器が(全体像の分かるものは無いものの)複数個体出土している。位置関係や出土遺物の時期からSH345に伴う施設である可能性も考えられる。隣接して存在するSX354も同様の遺構である可能性がある。

SD369は調査区北東部に位置する、南東―北西方向の直線的な溝で、わずかに弧を描く。幅2.0m、深さ1.6mで、断面形は緩やかなV字形である。堆積土の最下層、底面から0.2mは自然堆積層であるが、これより上層は地山層ブロックを多く含み、人為的に埋められたものと考えられる。遺物が出土しておらず詳細な時期は不明であるが、溝の南部はSD249によって破壊されており、庄内式期以前に遡ると考えられる。SD369はSD249の掘削時に埋められた可能性もある。

SD365は調査区北半部に位置する南東―北西方向の溝である。SD249やSD369と概ね平行する。幅0.2～0.4m、深さ0.15mと比較的小規模な溝で、遺存状態は良くない。古墳時代前期初頭の土器が出土しているが、詳細な時期は不明である。

SD380は調査区東辺中央部、調査区端に位置することから検出範囲は限られるが、土器が大量に出土した溝である(図29)。幅1.2m、深さ1.7m、断面形が深い台形を呈する特徴的な溝である。埋土は基本的に人為的な埋め土で構成されている。SD380内で人為的な埋め戻しと掘り直しという複数段階があったことを土層断面で確認しているが、掘り下げ作業時にはこれを明らかにできていない。図29に出土状況を示す多量の土器は、SD380の埋土上半部(遺構検出面よりやや下)からの出土である。これらの土器は多くがほぼ完形で出土している。遺物の時期は庄内式期の最古段階と考えられ、今回の調査で出土した土器の中でも最も古い一群である。調査区北東部に位置するSD369は、SD380と同一の溝である可能性もある。

SK348は調査区南西隅に位置する土坑である。遺構の西側が調査区外に存在するため全体像は不明であるが、直径2.8m程度、深さ0.5mの不整形土坑として確認している。SD380と同様の庄内式期最古段階と考えられる土器が出土している。SK348は詳細な時期が確認できる中で最も古い遺構のひとつであり、調査区西壁土層断面においてIV層上面から掘り込まれていることが確認できる(図9)。このことから古墳時代初頭とする遺構は、基本的にIV層上に存在していたと考えられる。

SK362はSH345の南西約3mの地点に位置する長方形の土坑である。一辺1.2m×0.6m、深さ

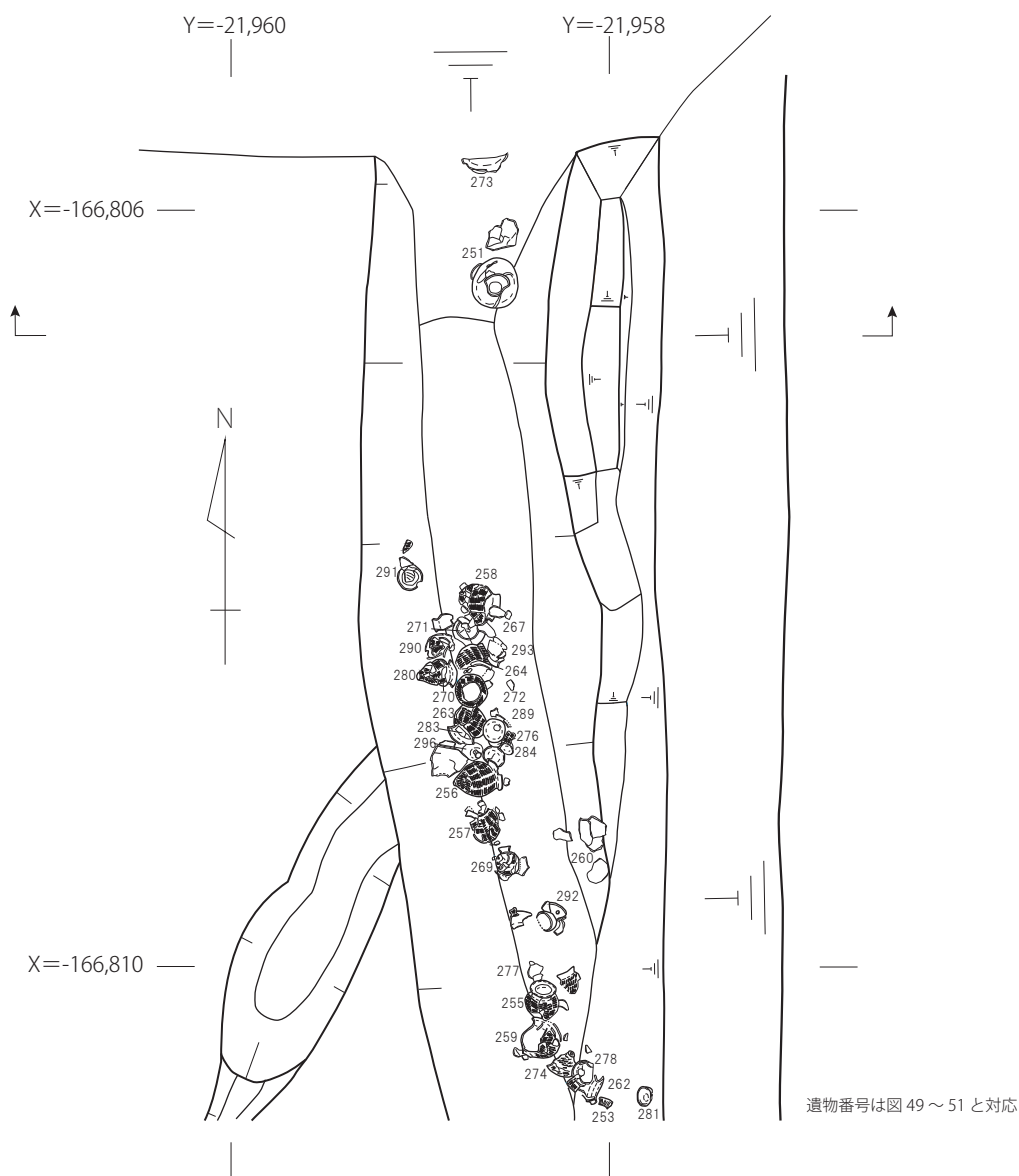
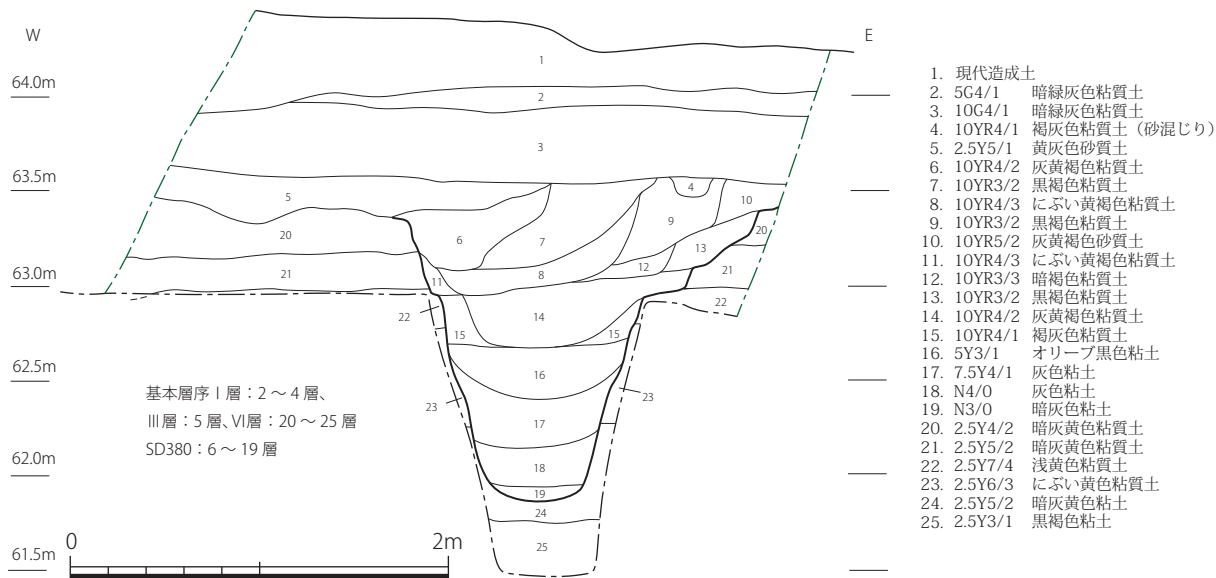


図 29 SD380 平面・断面図 (S = 1/40)

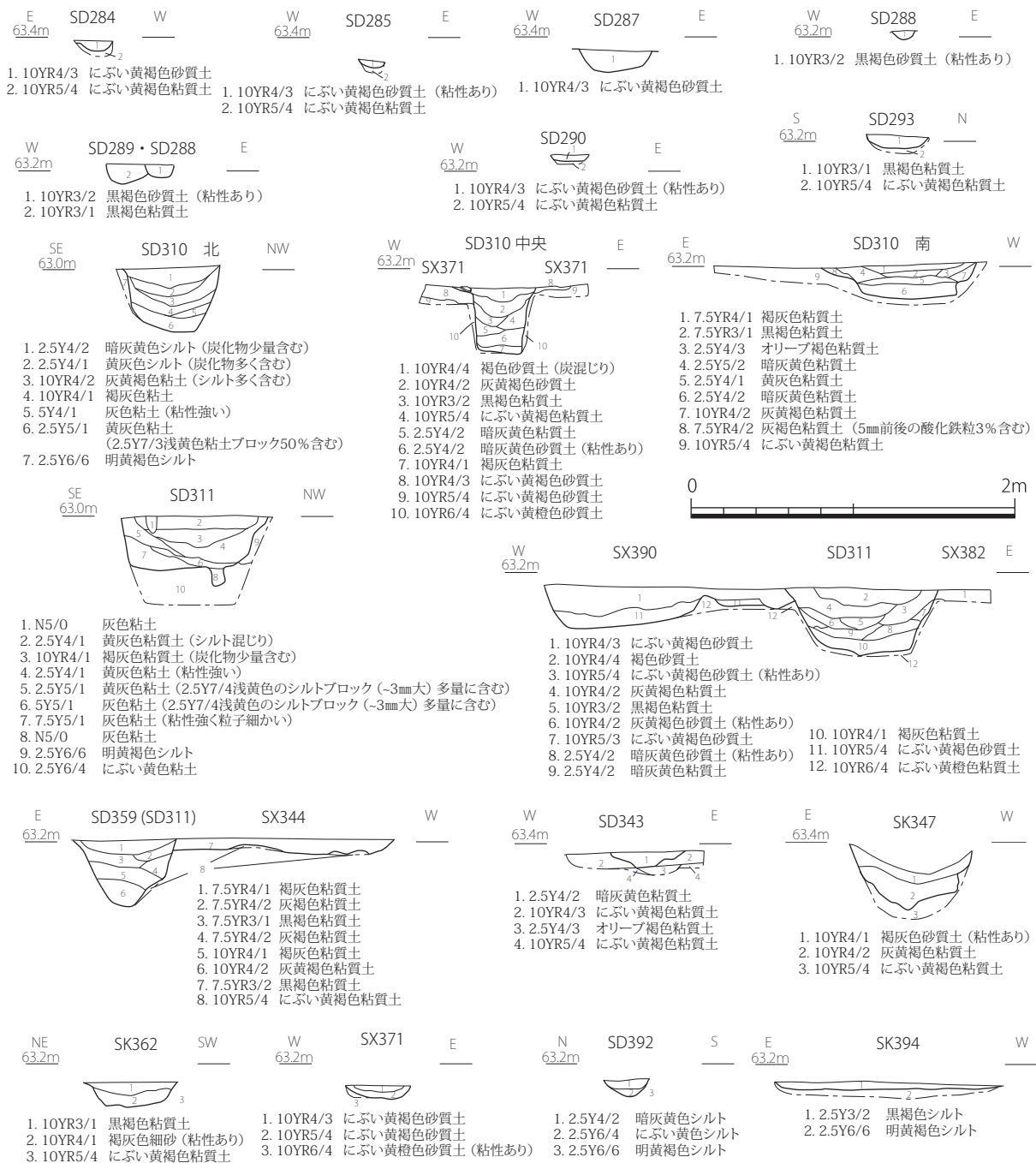


図 30 古墳時代初頭遺構 SK・SD・SX 断面図 (S = 1/40)

0.15 mである。SH345 と同様の庄内式期新段階の土器が出土しており、位置関係も合わせて竪穴建物に付属する遺構である可能性がある。

SX344 は SK362 の南西に広がる、深さ 0.1 m未満の浅い不整形な落ち込みである。庄内式期の土器片がまばらに散乱する。

SP349 は調査区南西部に位置するピットである。直径 0.25 mの小ピット内から庄内式期新段階～布留0式期の土器が出土している。SP349の周辺では、直径 0.2～0.5 m程度のピットが複数存在する。他のピットからは出土遺物は無い。

調査区西辺中央沿いの一帯 (SX340 より北) には、小規模な溝が十条程度存在する。これらの溝からの出土遺物は、時期不明の土器細片と石器片がごく少量あるのみであり、遺構の詳細な時期は不

明である。ただし調査区壁面に断面が表れる溝については、IV層下（V層上面）に形成された遺構であることが確認可能である。その具体例としてSD313・314・351が挙げられる。詳細な時期は不明であるが、庄内式期より古い遺構であると考えられる。

調査区の南西隅一帯、SD310とNR170の間には幅0.2～0.4m、深さ0.1m前後の溝が複数存在する（SD284～293等）。一部の溝は平行に並ぶ位置関係にある。古墳時代初頭と考えられる土器の細片がごく少量出土するのみで、詳細な時期は不明である。これらの溝の具体的な機能は不明であるが、耕作活動に伴って形成された可能性も考えられる。上記の調査区西辺中央沿いの溝の一部と同様のIV層よりも古い遺構である可能性が残るが、遺構の形成面を確認できているものは無い。

第4節 遺物

出土した遺物には、土器（縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・韓式系土器・黒色土器・瓦器・ミニチュア土器）、土製品（土製支脚等）、石製品（砥石・玉類等）、石器、木製品、鉄滓、動物骨（馬歯）等がある。

出土遺物の量は遺物コンテナ約100箱分である。縄文時代後期以降の各時期の遺物が出土している。量的には古墳時代初頭の遺物が多数を占め、古墳時代中期、中世と続く。これらは今回の調査で確認できた遺構の時期と対応する。古墳時代初頭から中世前半にかけての時期は遺構の形成面が近接しており、上層の遺構に下層に位置する古い時期の遺物も多く混入している。古墳時代、特に初頭の遺物については完形品及びそれに準じる資料も多い。縄文時代から弥生時代の遺物は、主に古墳時代遺構に混ざる形で出土している。

今回報告を行う遺物は、概ね全体像の分かる遺物や、出土遺構・層序の時期や性格をよく表わすと考えられる遺物、その他特徴的な遺物を中心に抽出して図化を行ったものである。以下に各遺構、層序ごとに出土遺物について述べる。遺構の順序は第3節遺構の記載順に倣う。

平安時代後期～鎌倉時代の遺構（図31～33）

平安時代後期～鎌倉時代の遺構には掘立柱建物や井戸、土坑、土坑墓、ピット及び耕作溝群がある。これらの遺構からの出土遺物は下層に存在する古墳時代以前の遺構に由来するものが大半を占め、平安時代及び鎌倉時代の遺物は数が限られる。この時期の遺物は土師器と瓦器が主である。中でも12世紀を中心とし、一部にその前後の時期を含む。遺構別では耕作溝からの出土が大多数を占め、他の遺構からの出土遺物は非常に少なく、また土器の細片が主である。

SE153 出土遺物（図31-1～3）

1は土師器皿である。口縁端部は内側へ巻き込むように丸く収める。内面全体及び外面の口縁部は横ナデで仕上げ、外面底部は指頭圧痕が存在する。復元口径15.6cmである。2は黒色土器碗もしくは皿の小片である。口縁端部は細く尖る。内面全体から外面端部直下までの範囲が黒色を呈する。3は須恵器皿である。復元口径14.0cm、器高1.7cmである。外面底部は回転ケズリの後にナデ調整で仕上げる。

SP169・235 出土遺物（図31-4・5）

4はSP169から出土した土師器小形丸底壺である。口縁部はわずかに湾曲して開き、体部は扁球状である。外面は磨滅しているが、わずかにミガキの痕跡が確認できる。

5はSP235から出土した土師器碗である。復元口径10.5cm、器高2.5cmである。外形は丸みを帯び、口縁端部は細く丸く収める。

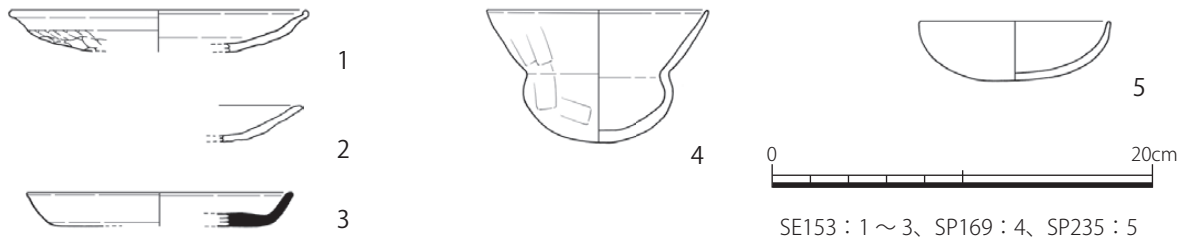


図 31 平安時代後期～鎌倉時代遺構 出土遺物 (S = 1/4)

耕作溝出土遺物 (図 32・33-6~47)

6は縄文土器深鉢の口縁部である。波状口縁の波頂部付近の破片である。全体に磨滅が進んでいるが、同心円状の文様を幅約2mmの凹線で表現する。時期は縄文時代後期中葉であると考えられる。

7は瓦器皿で、ほぼ全体が遺存する。見込みにはジグザグ状と弧状の暗文を施す。

8は黒色土器碗である。全体に遺存状態が悪いが、わずかにヘラミガキが確認できる。

9~12は瓦器碗である。9は復元口径15.6cm、器高6.2cmである。口縁端部下に明瞭な沈線を施す。高台の断面形は底面が狭い台形である。見込みにはジグザグ状の暗文を施す。10は復元口径15.7cmである。内面には幅が狭い圈線ミガキを施す。11は底部で、見込みに連結輪状の暗文を施す。高台の断面形は三角形である。12も底部で、高台は11よりも退化している。

13~16は土師器甕である。13は宇田型甕の口縁部である。口縁部はやや厚手である。外面体部のハケ調整は明瞭である。14は完形である。調査区南部での出土で、本来は下層の古墳時代遺構に伴う遺物であったものが耕作溝の調査時に取り上げられたと考えられる。全体に丁寧な仕上げの甕である。外面体部上半にはヘラ状工具先端によると考えられる刺突が縦に七つ並んで施されている。体部中段と下半の二ヶ所に直径0.4~0.7cm大の穿孔が存在する。外面下半には薄く煤が付着する。15・16は平底の甕の底部である。15は外面にタタキ、内面にヘラナデ調整を施す。底面から約6.5cmの高さの位置に粘土接合痕が確認できる。底部は中央が凹む。16の底部は平坦である。外面のタタキは15よりも弱く施されている。

17は土師器杯である。口径9.7cm、器高3.4cmである。表面の磨滅により細かな調整は不明であるが、外面の稜より上部にナデ調整を施していると考えられる。

18~22は土師器高杯である。18は外面脚柱部に面取り状のミガキを施す。脚部と杯部の接合方法が断面確認できる。19は杯部が外反して大きく開く形状である。復元口径18.4cmである。脚部と杯部の接続方法が断面確認できる。脚部に円形スカシを穿つが、スカシの数は不明である。20は頸部片で、碗形の杯部とハの字状に開く脚部をもつ。杯部底面にはミガキ痕が存在する。21はラッパ状に開く脚部である。脚部と杯部の接続方法が断面確認できる。内面脚部は丁寧にケズリが施され、黒斑が存在する。22は中実の脚柱部である。円形スカシを三方向に穿つ。

23~41は須恵器である。いずれも古墳時代の須恵器であると考えられる。

23は高杯蓋であると考えられる小片である。外面に櫛状工具の刺突文を同心円状に配する。内面に自然釉が多く付着している。24~26は蓋杯の蓋である。24は復元口径12.0cm、器高4.2cmである。口縁端部は平坦な面をもつ。ヘラケズリ、ナデ調整ともに回転痕が強く残る。25は復元口径12.2cm、器高3.9cmである。肩部の稜は全体に丸みを帯びる。26は復元口径11.6cmに対し器高4.3cm以上の背の高い蓋である。肩部の稜の突出は小さいが鋭い。

27~31は蓋杯の杯身である。27は復元口径12.8cmである。外面底部は受部の直近までヘラケズ

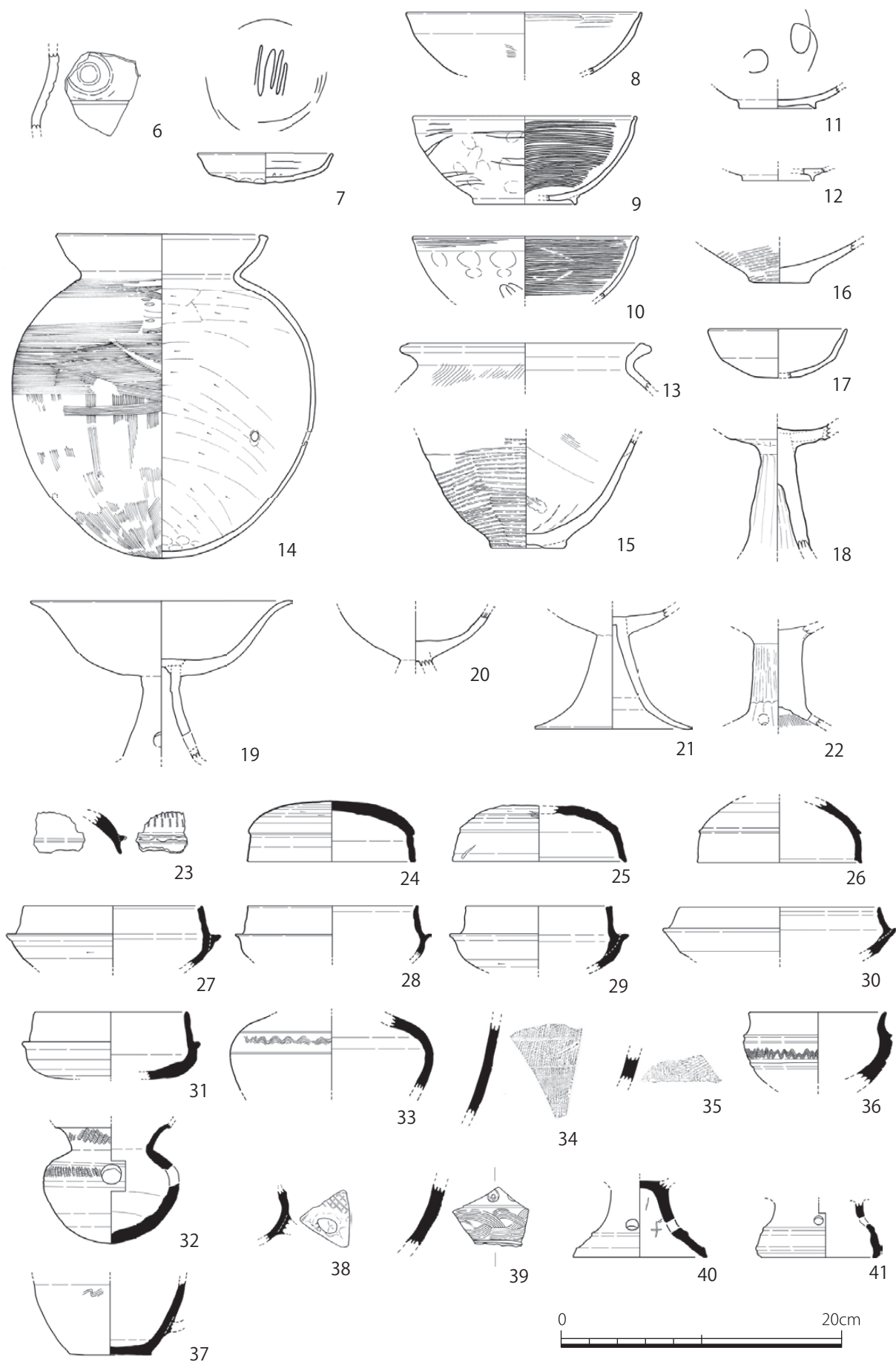


图32 耕作溝出土遺物① (S = 1/4)

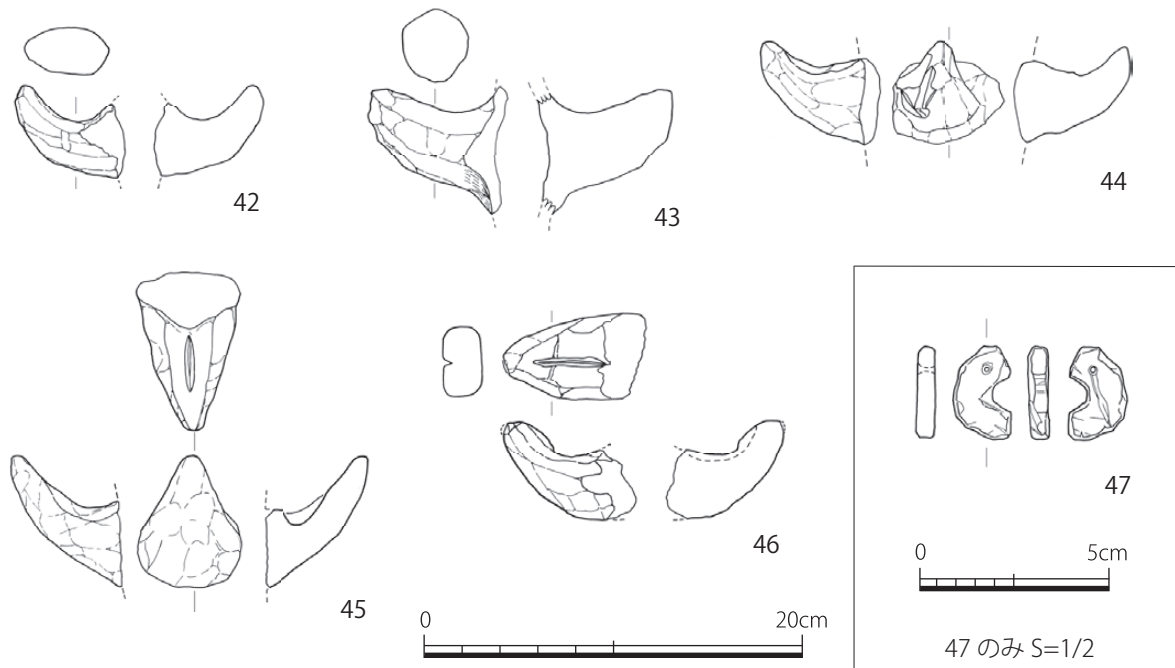


図33 耕作溝出土遺物② (S = 1/4・1/2)

りを施す。28は復元口径12.0cmである。口縁の立ち上がりは内傾し、端部がわずかに上方に向く。29は復元口径12.6cmである。全体にやや厚手の作りである。立ち上がりは垂直気味で、端部は内傾する面をもつ。30は復元口径14.4cmである。立ち上がりは短く内傾する。外面坏部に自然釉が付着する。31は復元口径10.7cmである。外面のヘラケズリは弱く、全体に下膨れの形状である。

32は須恵器甕である。外面は頸部に細かな波状文、体部中段に列点文を巡らせる。外面の底部に×字のヘラ記号が存在する。内面には降着物の付着が多い。33は須恵器壺もしくは甕の体部である。肩部には二条の沈線間に波状文を巡らせる。

34・35は縄蓆文タタキを施す甕の破片である。陶質土器である可能性がある。どちらも内面は丁寧なナデ調整で仕上げる。

36は須恵器碗である。把手の有無は不明である。体部はかなり厚手である。外面の波状文は粗い。37・38は須恵器把手付碗である。37は外面の底面から把手の根元付近に掛けての範囲に、仕上げの際に生じた細かな粘土粒が多く残る。内面には自然釉が薄く付着する。38は外面体部中段に格子目状の文様を施す。

39は須恵器器台の坏部片である。外面に直径0.9cmの円形スタンプ文と組紐文を施す。

40・41は須恵器高坏の脚部である。40は円形スカシを三方向に穿つ。脚部下半に稜を作り出すが、やや丸みを帯びている。内面に×字形と線状のヘラ描きが存在するが、意図的な記号であるか調整時の傷であるかは不明である。41は円形スカシを穿つ。スカシの数は不明である。

42～46は土師器甑もしくは鍋の把手である。43は鍋の把手と考えられる。いずれも外上方に反り上がる形状である。上面形は三角形を基本とするが、43のみは台形状である。45・46は上面から浅い切り込みを加える。

47は滑石製勾玉である。直径0.2cmの穿孔を施す。稜は全体に丸みを帯びる。

古墳時代中期の遺構 (図 34~42)

古墳時代中期は土坑、溝、河道等の遺構が存在し、当該時期の遺物も多く出土している。これらの遺構の多くが、古墳時代前期以前の遺構と重複する位置に存在しており、古墳時代前期以前の遺物を含んでいる遺構も多い。量的には古墳時代中期でも後半段階の遺物が多数を占めるが、古墳時代中期前半段階の遺物も出土している。

SK190 出土遺物 (図 34-48~63)

48~53 は土師器甕である。48 は胴部の張り出しが強い形状である。色調は暗赤褐色を呈し、他の甕と様相が異なる。外面は摩耗により調整が不明である。49 は口縁部が厚手で直線的に立ち上がる。内面は指頭の凹凸が目立ち、外面も粘土の剥落が多い。50 は口縁部が内湾し、端部は肥厚させる。51 は端部の段が 50 よりも明瞭である。52 は口縁部中ほどに段を設け二重口縁状に仕上げる。色調

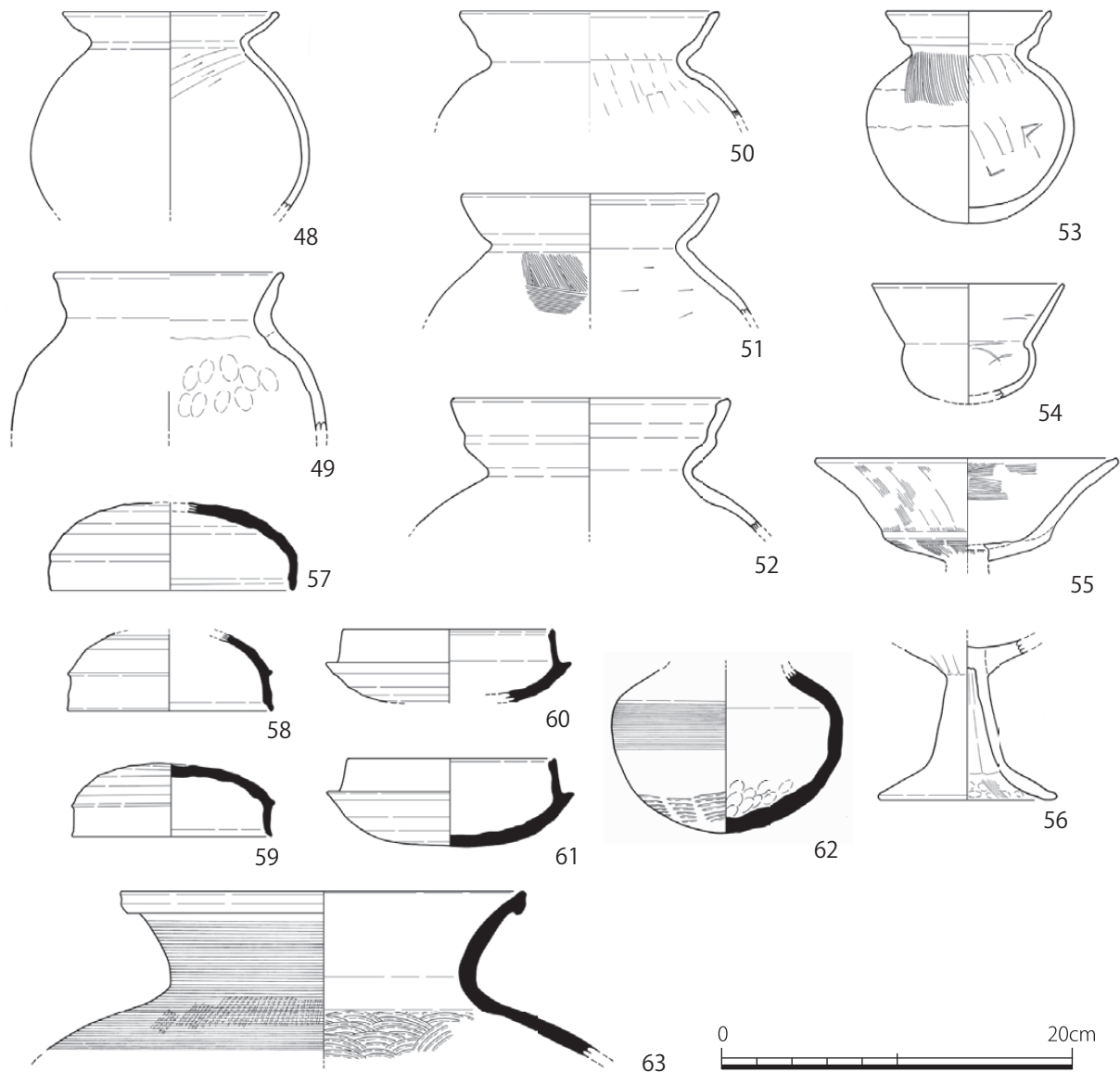


図 34 SK190 出土遺物 (S = 1/4)

は乳灰色を呈する。53は小型の甕である。細く短い頸部と外反気味に開く口縁部をもつ。体部は球形に近く、ハケ調整を施す。

54は土師器小形丸底壺である。口縁部は直線的に開く。体部は扁球状で口縁部よりも小さい。全体を細かなナデ調整で仕上げる。

55・56は土師器高坏である。55は外反して開く大型の口縁部の有稜高坏である。ハケ調整の後、ナデ調整で仕上げる。56は坏底部以下の破片で、坏部と脚部の接合方法が断面確認できる。外面坏部と内面裾部にハケ調整を施す。

57～61は須恵器蓋坏である。57～59は蓋である。57は復元口径13.8cm、器高4.8cmである。肩部の稜はやや鈍い。他の坏よりやや新しい時期の特徴を示す。58は復元口径11.5cm、残存器高4.3cmである。やや裾広がり形状である。口縁端部は内傾する面をもつ。肩部の突出は小さいが稜は明瞭である。59はほぼ完形で、口径11.2cm、器高4.1cmである。頂部に若干の歪みがある以外は全体に丁寧な作りである。60・61は坏身である。60は復元口径11.8cm、残存高4.1cmである。口縁端部は内側に沈線が巡る。外面のヘラケズリは全体に粗い。61は復元口径11.7cm、器高4.9cmである。

62は須恵器壺の体部である。外面底部にはタタキを施し、内面底部は粘土を指で削ぎ取った痕が残る。外面体部中段には強い回転ナデ調整が線状に残る。頸部の割れ口が特徴的で体部のみを再利用するために意図的に割った祭祀土器である可能性も考えられる。

63は須恵器甕である。外面はタタキの後、カキ目で仕上げる。

SK202 出土遺物 (図 35～37-64～111)

64は須恵器蓋である。復元口径14.5cm、残存器高4.5cmである。肩部の稜は細く摘み出して作られている。

65～75は土師器高坏である。65～67は外反気味の口縁をもつ無稜高坏の坏部である。65は坏部底面中央に、脚部の上端部あるいは脚部接続後に蓋として貼り足した円形の粘土板が残る。66は全体に磨滅しており細かな調整は不明であるが、部分的にケズリやナデ調整が確認できる。67は坏部底面の中央がやや盛り上がる。68は口径20.6cm、器高8.6cmのやや大型の高坏である。脚部の作りが厚重である。口縁部は直線的に大きく開き、全体にやや歪みがある。外面脚部はケズリの後、ナデ調整で仕上げるが面は残る。69は口縁端部が外に開く碗形高坏である。ほぼ全体が遺存する。脚部にやや大きめの円形スカシを二方向に穿つ。坏部底面下に脚部との接合時の刺突痕が存在する。70は坏部が口径に比して深さがある形状である。坏部と脚部の接合時に行った粘土の貼り足しが確認できる。71は口縁部が直線的に開き、先端が尖る形状である。脚部の上部は中実である。72は口縁部がわずかに外反気味に開く。外面坏部には粘土紐の継ぎ目が確認できる。内面脚部は螺旋状のしぼり痕が明瞭に残る。73は外面脚部に面取り状のケズリを施す。74はラッパ状に開く脚部である。外面にはミガキを密に施す。円形スカシを四方向に穿つ。外面脚部上端には坏部との接合作業時に付いたものと思われる斜線傷が並ぶ。75は脚柱部と裾部の境が明瞭な形状である。外面脚柱部には面取り状のミガキを施す。

76は土師器坏である。復元口径11.8cm、器高4.4cmである。口縁部は垂直に立ち上がる。全体に器壁が磨滅しており調整が不明である。

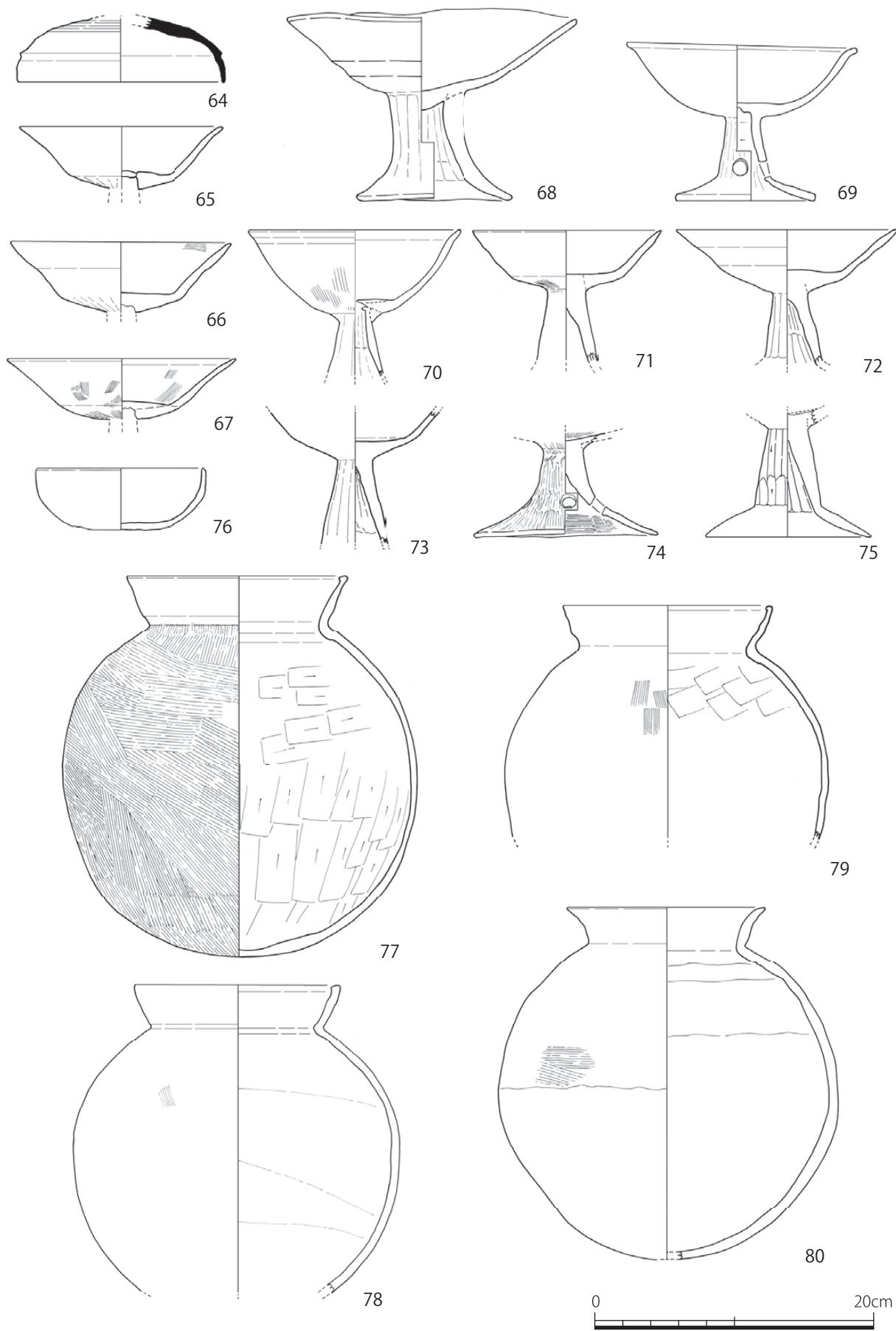


图35 SK202 出土遺物① (S = 1/4)

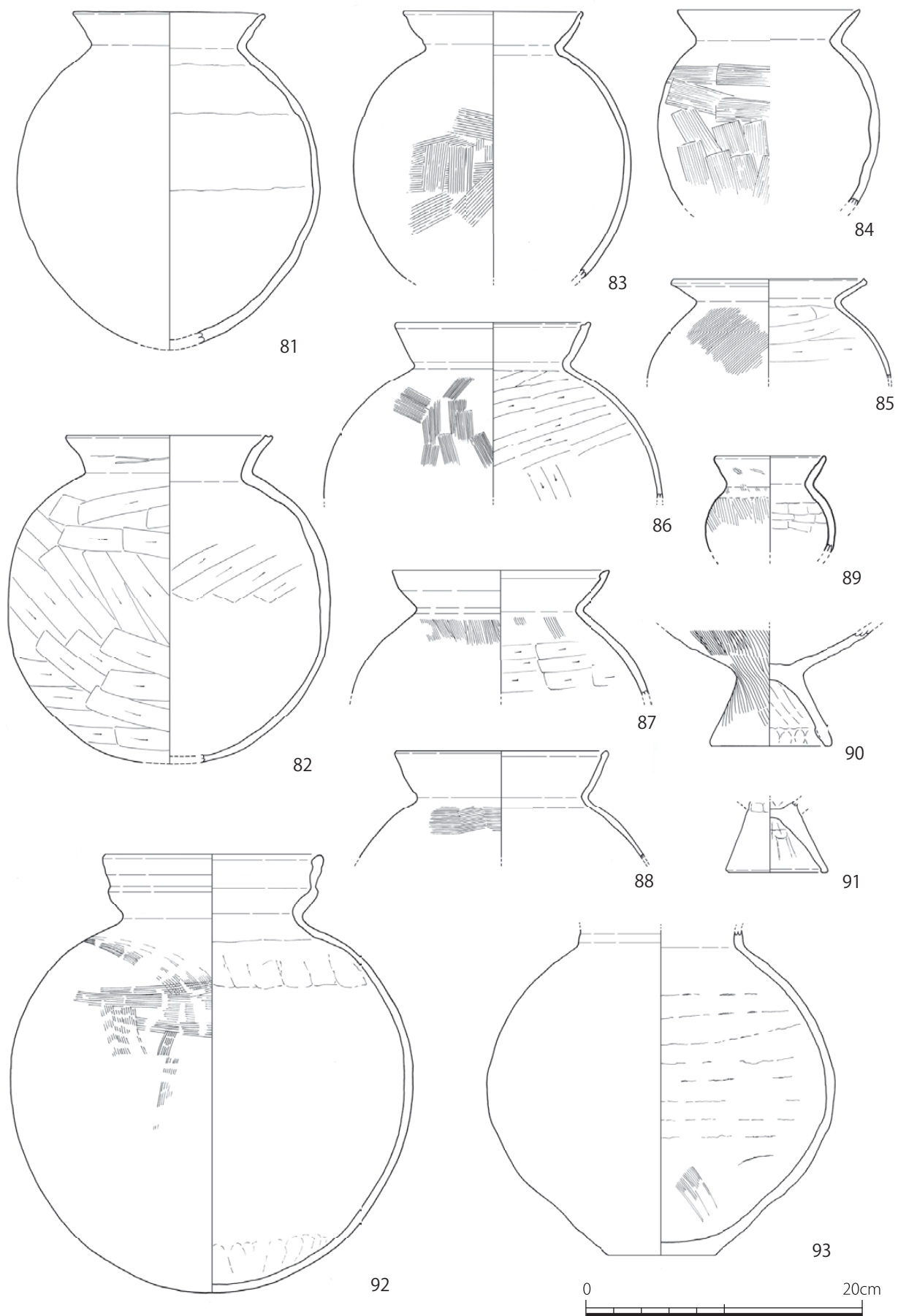


图 36 SK202 出土遺物② (S = 1/4)

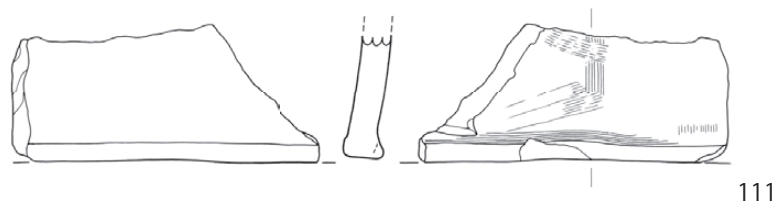
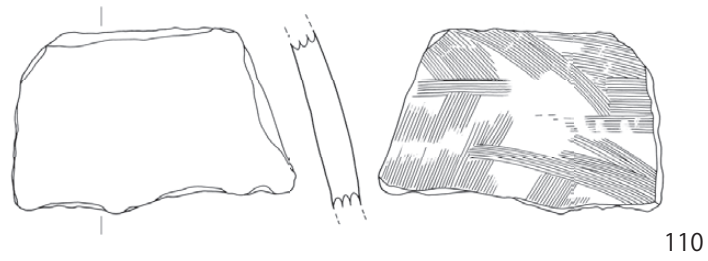
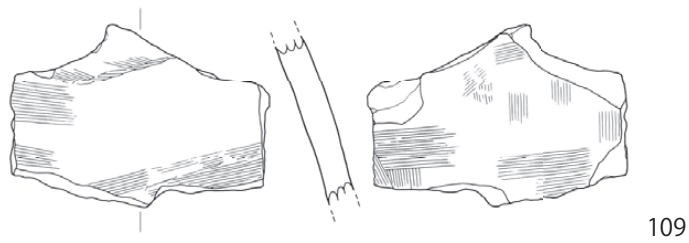
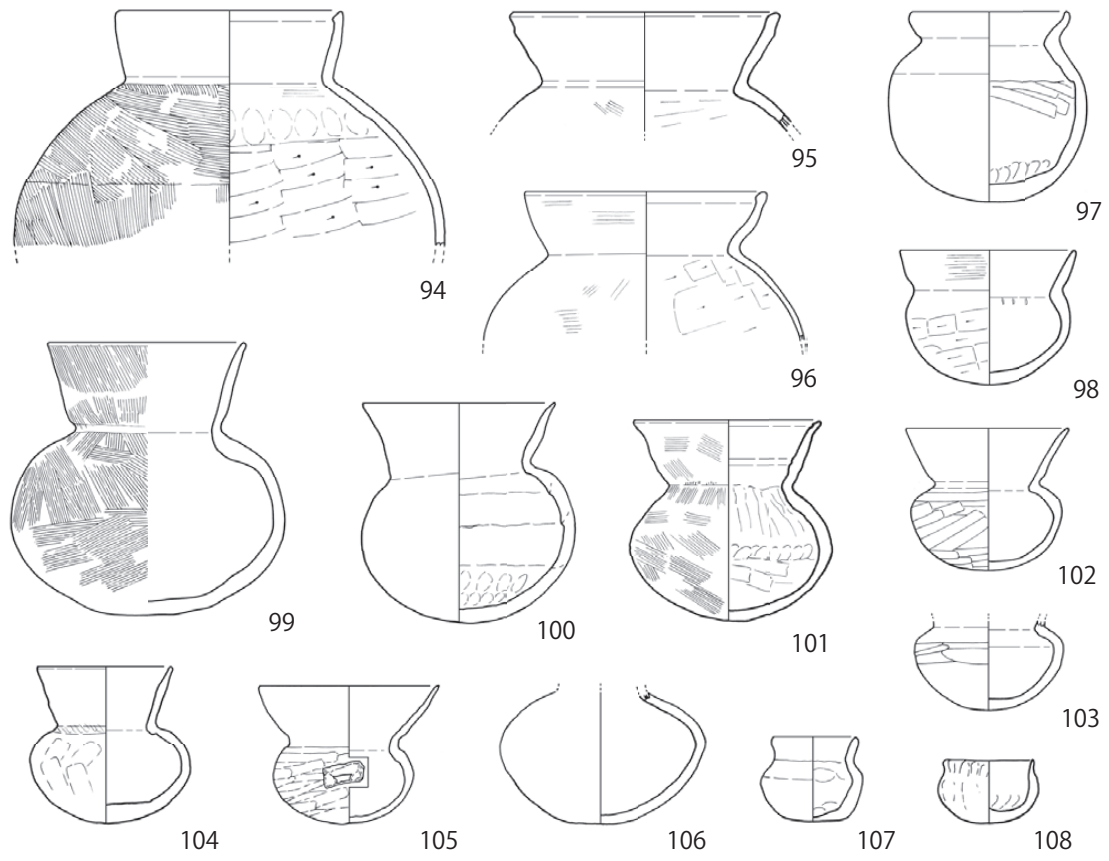


图 37 SK202 出土遺物③ (S = 1/4)

77～91は土師器甕である。77は破片状態であるがほぼ全体が遺存する。体部はやや縦に伸びた球形で、底部はわずかに平底である。肩部以下に広く薄い煤が付着する。78は全体の色調が非常に特徴的で、同時期の土師器高坏や坏にしばしば見られる明橙色を呈している。表面の磨滅が激しいが外面体部にわずかにハケ調整が確認できる。79はやや長胴気味の体部であると考えられる。表面が全体に激しく磨滅している。80は外反する口縁をもつ。器壁は全体に厚い。内外面に粘土紐痕が存在する。81は外反する口縁をもつが、器壁は80よりも薄い。底部を欠くが、尖り気味の形状となる可能性がある。82は口縁端部に面を作り出し、上面に鈍い沈線が巡る。表面が磨滅しているが、体部には面的に削り取った痕が確認できる。83はやや縦長の体部と内湾する口縁部をもつ。外面体部に大型の黒斑が存在する。84はやや小型であるが厚手の作りで重量感がある。全体に磨滅しているが外面体部にはハケ調整が確認できる。85は口縁部が直線的に開き、端部は上方に小さく摘み上げる。体部の器厚は0.2cmと薄い。86は口縁端部に内傾するやや幅広の面をもつ。87は口縁端部を内側に肥厚させる。88は全体に磨滅しているが外面肩部に横方向のハケ調整が確認できる。89は頸部から口縁部にかけて横方向の強めのナデ調整を施す。外面体部には間隔の広いハケ調整を施す。90・91は台付甕の底部である。90は台部から体部にかけて連続するハケ調整を施す。内面は台部全体と体部底面に指頭圧痕が多数存在する。91は小型だが厚手で、置くと安定感がある。内面にはへら状工具の静止痕が存在する。

92～106は土師器壺である。92はやや大型の二重口縁状の壺で、外来系土器の可能性もある。器高31.2cmである。口縁の稜は全体に鈍く、二重口縁下段の張り出しが強い。内面体部はケズリを丁寧に施すが、底部付近には指頭圧痕が多く残る。93は平底壺である。口縁部は下端が遺存するのみであるが、垂直に立ち上がりを見せる。外面は磨滅により調整が不明である。94は口縁部が直立気味に立ち上がる。口縁端部は肥厚させ内側に面を作り出す。95は直線的に開く広口の口縁部である。96は口縁部と外面体部を横方向の強いナデ調整で仕上げる。97は内湾する短い口縁部をもつ。体部の歪みが大きく座りが悪い。98は外面が全体に丁寧に仕上げられている。99は直口壺である。外面全体に細かなハケ調整を施し、頸部はナデ調整によりくびれを作り出す。100は外反する口縁部をもち、体部はやや歪みがある。外面の調整は不明である。101は下膨れ気味の体部である。内面口縁部下半分にナデ調整による鈍い段が巡る。102は頸部に強いナデ調整を施してくびれを作り出す。103は肩部の位置が高く、稜が明瞭な体部である。104は底部が厚く、座りの安定感がある。105は体部中段に外側から削り込んだ方形の穿孔が存在する。106は細頸壺の体部である。調整は不明である。

107・108はミニチュア土器である。107は平底壺である。外面体部上半から口縁部にかけては丁寧なナデ調整で仕上げている。108は短頸壺もしくは鉢である。手づくね成形である。

109～111は土師質の竈である。接合はしないが同一個体の破片である可能性が高い。全体にハケ状のナデ調整を施す。内面には部分的に薄く煤が付着する。111は底部片で、端部を両側に肥厚させる。

SD191 出土遺物 (図 38-112～117)

112・113は土師器長胴甕である。112は体部最大径が上半部に位置し、下半部は細身の形状である。外面体部には部分的に煤が薄く付着する。113は底部が平底気味である。ハケ調整は下部ほど粗い傾向がある。外面体部中段に煤が薄く付着する。

114・115は土師器甕である。114は外面体部にタタキを施した後、ナデ調整で仕上げる。115

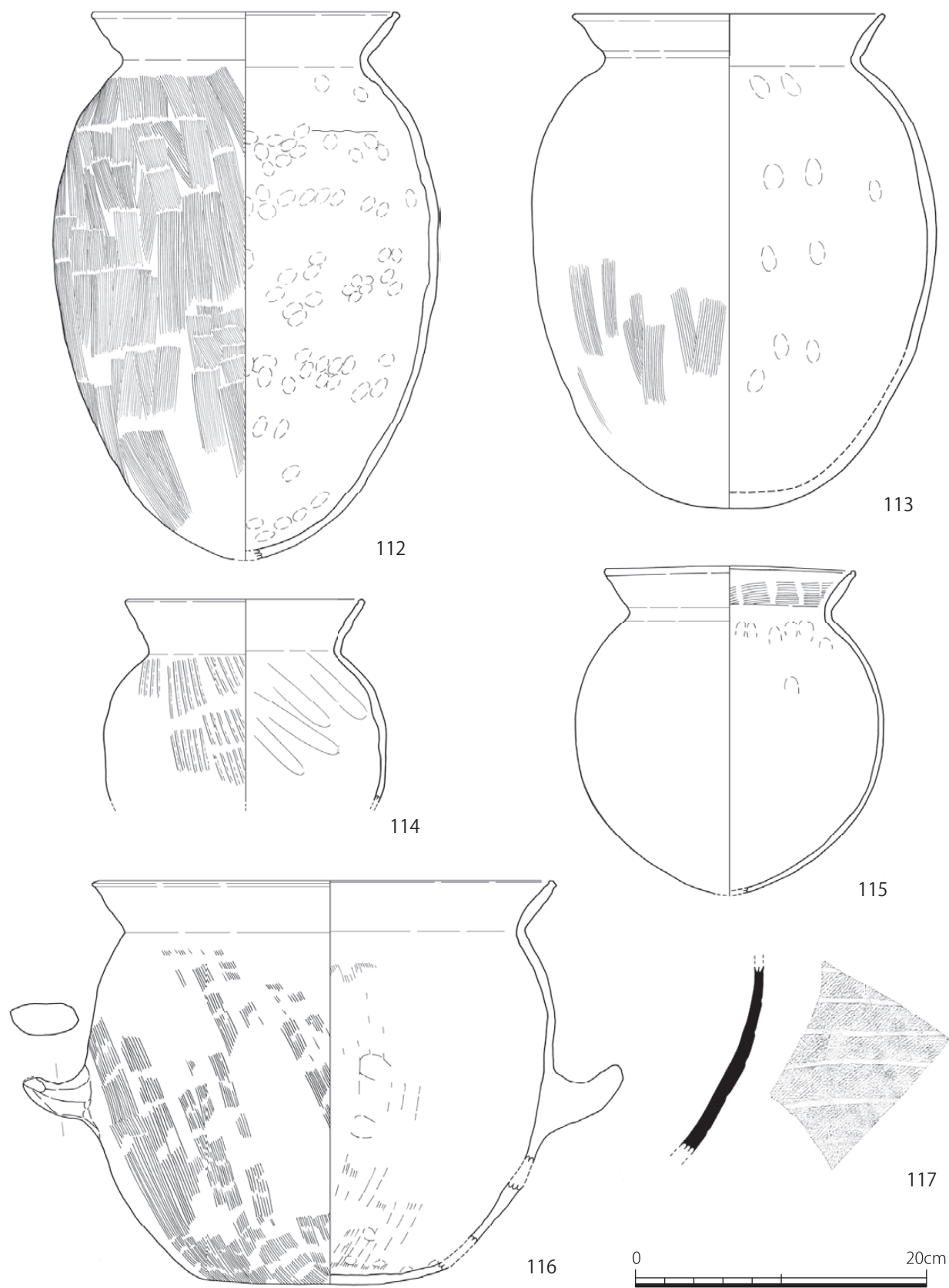


图 38 SD191 出土遺物 (S = 1/4)

は全体をナデ調整で仕上げるが、内面口縁部には斜め方向のハケ調整痕が存在する。

116 は土師器鍋である。口径 32.4cm、器高 27.4cm である。平底だが、底面付近に稜は無く丸みを帯びる。把手は厚手で付け根から反り上がる。

117 は須恵質の甕の体部片で、陶質土器である可能性がある。外面は斜方向タタキの後、横方向の沈線を複数巡らせる。内面はナデ調整である。

この他、SD191 からは馬歯も出土している（写真図版 48）。

NR200 出土遺物（図 39-118~138）

118~123 は土師器である。

118 は高環の坏部である。浅く開く碗形である。外面には脚部との接合後に粘土を薄く貼り足すことで段が生じている。内面坏部にはミガキを放射状に施す。

119~121 は甕である。119 は外反する口縁部に、球形に近い体部をもつ。器壁は全体に厚手である。外面体部は右上がりの細かなタタキを施す。内面体部は丁寧なナデ調整で仕上げる。120 は平底の底部がわずかに残るが、底部中央の状態は不明である。外面体部のタタキは施す方向が下半で明瞭に分かれる。内面はへら状工具で掻き上げるようにケズリを施す。121 は口縁部が大きく外反する形状である。口縁端部は外側に面を作り出し、凹線を巡らせる。外面体部には粗めのタタキを施す。

122 は鉢である。口径 15.0cm、器高 8.8cm である。口縁部は大きく外反する形状である。外面はナデ調整とミガキで仕上げる。

123 は甕もしくは鍋の把手である。わずかに反り上がる形状で、外側端部は平坦面をもつ。下面には直径 0.5cm の支え棒痕が存在する。

124~131 は須恵器である。

124・125 は蓋環の坏身である。124 は口縁部が内湾して立ち上がる。形状は全体に丸みを帯びる。125 は口縁部がわずかに内傾して立ち上がり、外面は回転ナデ調整によりやや波打つ。

126 は甕の体部である。外面には波状文と沈線を巡らせる。内外面に濃緑色の自然釉が付着し、特に内面の底面付近には降着物とともに多く付着している。

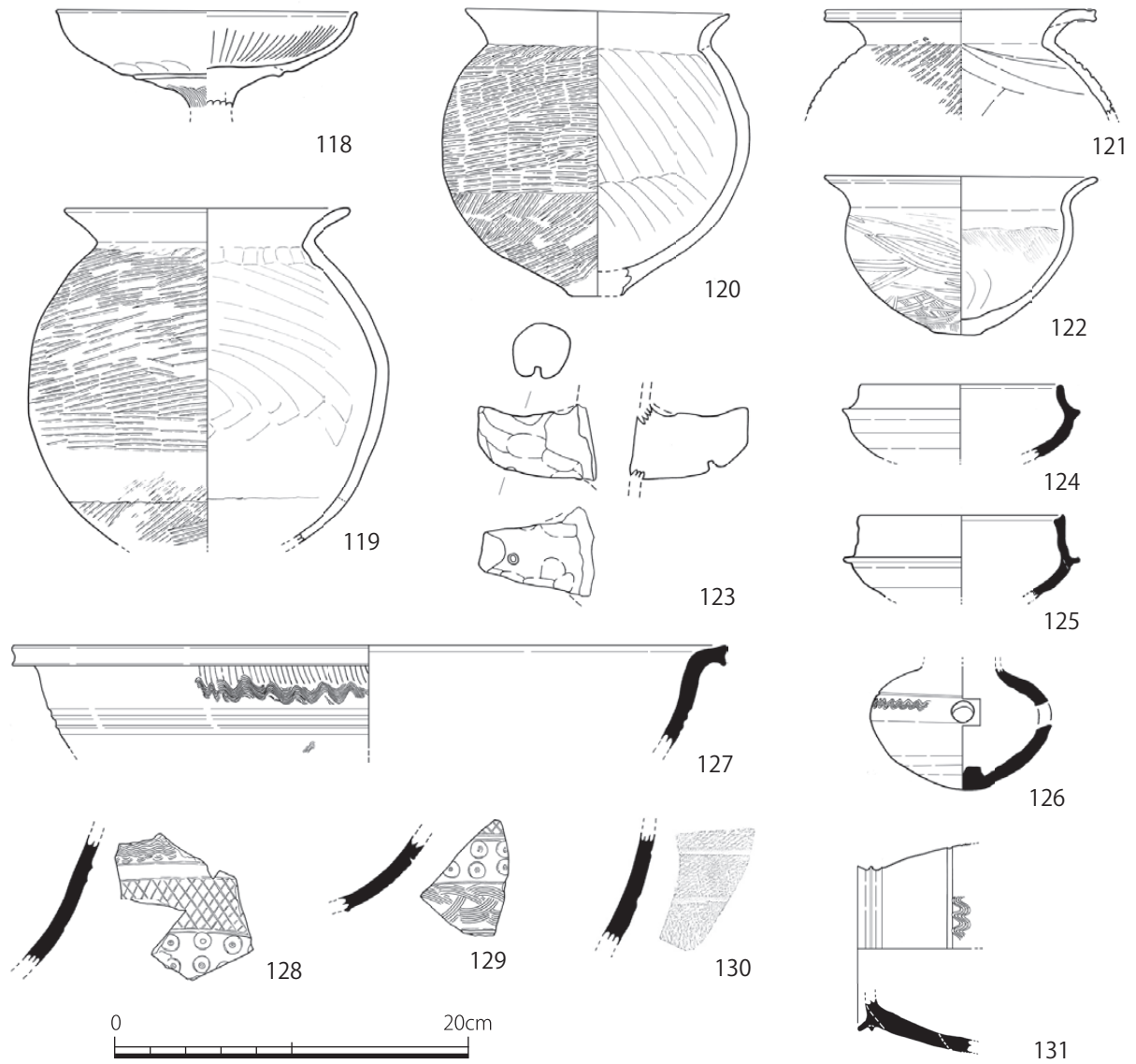
127~129 は器台の坏部片である。127 は外面に波状文と凹線を複数巡らせる。最上段の波状文の上には、口縁端部を作り出す際に施された縦方向の細かなナデ上げ状の縦線が存在する。128 は上から順に波状文、格子目文、スタンプ文を施す。スタンプ文は直径 0.9cm で中央に芯をもつ。129 は 128 と同一個体である可能性が高く、スタンプ文の下に組紐文を施す。下端は脚部との接続部に近い位置にあたると考えられる。

130 は甕の体部である。外面には縄蓆文タタキを施し、内面はナデ調整で仕上げる。

131 は樽形甕の肩部あるいは壺の底部であると考えられる。体部に波状文と凹線を巡らせる。端部の稜は明瞭である。

132~137 は滑石製の小玉である。直径 0.45~0.6cm、厚さ 0.25~0.36cm である。中央に直径 0.2cm の孔を穿つ。色調は 133 が淡緑灰色で、他は乳灰色を呈する。いずれも側面に研磨痕が存在する。

138 は鉄滓である。内外面に中小の気孔が存在し、外側に大きめの孔が多い。重量 45.4g を測る。



118 ~ 131 : S=1/4
132 ~ 138 : S=1/2

图 39 NR200 出土遺物 (S = 1/4 · 1/2)

SK152 出土遺物 (図 40-140)

140 は土師器壺である。外面は全体に磨滅しており細かな調整は不明であるが、頸部にわずかにハケ調整が残る。内面肩部には粘土の段が存在する。

SK206 出土遺物 (図 40-148)

148 は須恵器蓋環の坏身である。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は内傾する面をもつ。

SK230 出土遺物 (図 40-144~146,150)

144 は土師器鍋である。口径 19.8cm、器高 15.5cm のやや小型鍋である。把手はほぼ水平方向に伸びる。外面下半に縄目のタタキ痕が残る。外面には底面部を除く広範囲に煤が薄く付着する。145 は土師質の不明製品だが、109~111 の竈片と焼成や調整に類似性があり竈片である可能性が考えられる。幅約 2cm で弧を描く粘土の剥離面が存在する。

146 は須恵器蓋である。上面には同一の櫛状工具によると考えられる圈線と刺突文を各二重に巡らせる。内面全体に降着物が付着しており、倒置した状態で焼成したことが窺える。色調は淡い赤褐色で焼成はやや甘いが硬質に仕上がっている。頂部のつまみは中央部がごくわずかに上方に突出する。

150 は滑石製の小玉である。直径 0.5cm、厚さ 0.3cm である。断面形はわずかに算盤玉状である。

SX267 出土遺物 (図 40-139)

139 は土師器甕である。体部はやや縦長の球形である。外面にはハケ調整を密に施す。体部下半に直径 0.8cm の円形穿孔を穿つ。

SX187 出土遺物 (図 40-147,149)

147 は須恵器蓋環の坏身である。口縁部は直立する。外面体部のヘラケズリは各段が明瞭な稜をもつ。149 は須恵器脚付壺の体部である。体部下面には、脚部の剥離面と脚部にスカシを穿つ際に生じたと考えられる線の存在が確認できる。

SX188 出土遺物 (図 40-141)

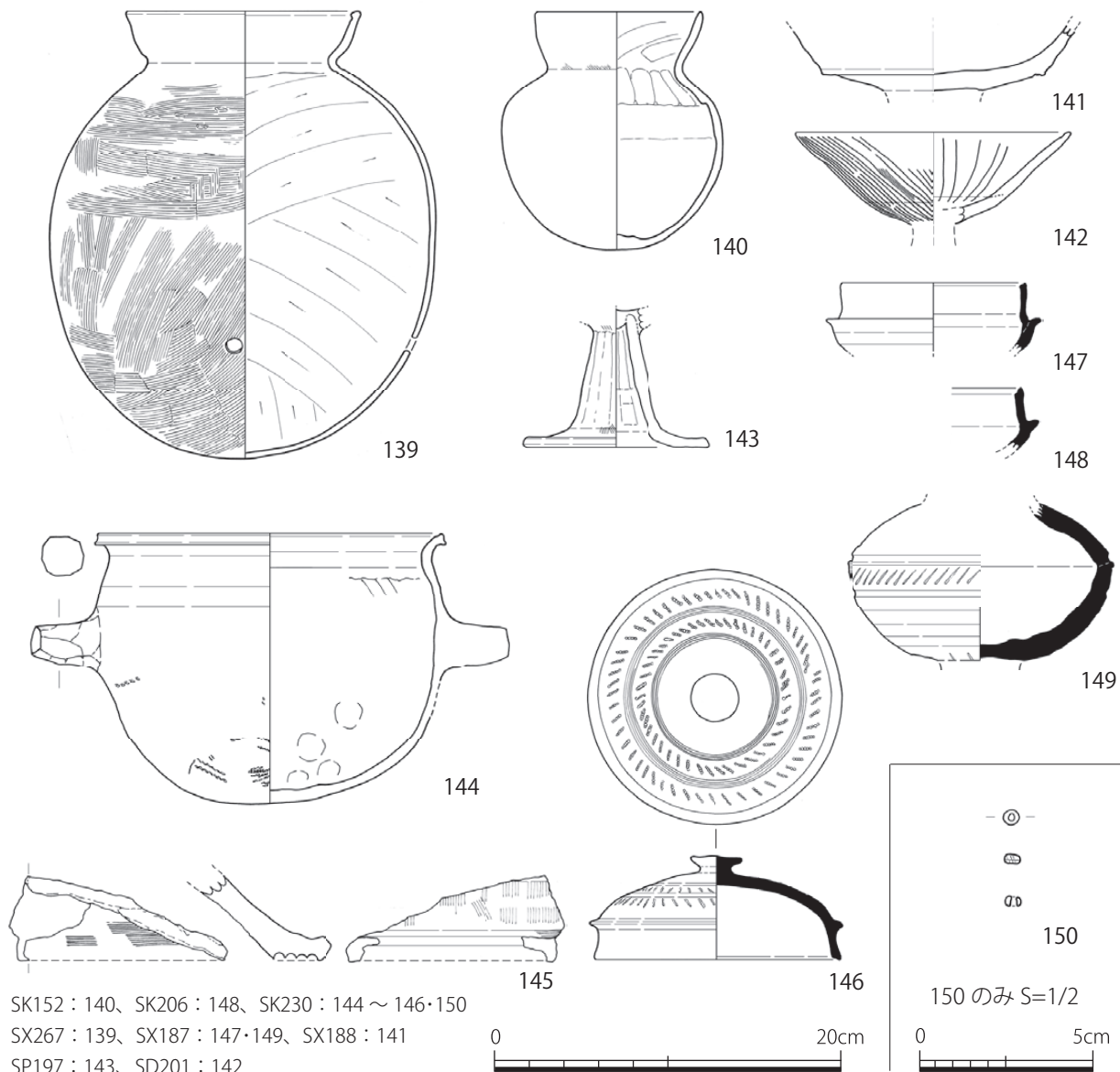
141 は土師器高環である。やや大型の有稜塊形高環と考えられる。底面には直径 5.0cm 大の脚部の剥離面が存在する。剥離面には接合のために刻み目を施している。

SP197 出土遺物 (図 40-143)

143 は土師器高環の脚部である。裾部が低く大きく広がる形状である。上端部には坏部底面がわずかに残り、接合状況が確認できる。

SD201 出土遺物 (図 40-142)

142 は土師器高環の坏部である。頸部から直口気味に開く形状である。内外面に幅広で隙間の大きいミガキを施す。内面のミガキは放射状である。



SK152 : 140、SK206 : 148、SK230 : 144 ~ 146・150
 SX267 : 139、SX187 : 147・149、SX188 : 141
 SP197 : 143、SD201 : 142

図 40 古墳時代中期遺構出土遺物 (S = 1/4・1/2)

中層遺構面精査時出土遺物 (図 41・42-151~172)

古墳時代の遺構を検出するにあたり、遺構面のすき取り及び清掃作業を複数回にわたって行っている。ここでは、調査時に中層遺構として認識されていた遺構群の検出作業時に出土した遺物を報告する。遺構の時期と同様に古墳時代中期を中心とするが、古墳時代前期以前の遺物も一定量含まれる。

151~162 は土師器である。

151 は高坏の坏部である。外面には浅い凹線を巡らせて鈍い稜を作り出す。152 は高坏の脚部である。裾部はハの字状に広がり、短い脚柱部は中実である。裾部上端付近に円形スカシを三方向に穿つ。

153 は広口壺である。外面には鉄分と共に砂礫が付着している。154 は壺の体部である。扁球形で底部はわずかに平底で座りが良い。

155~157 は甕である。155 は直線的に開く口縁部と、張り出しが強い体部をもつ。内面体部はケズリが丁寧に施され器壁が薄い。156 は外面の頸部直下まで斜め方向のハケ調整を施す。口縁部は回転ナデ調整による凹凸が目立つ。157 はわずかに下膨れの体部をもつ。内面口縁部はナデ調整で

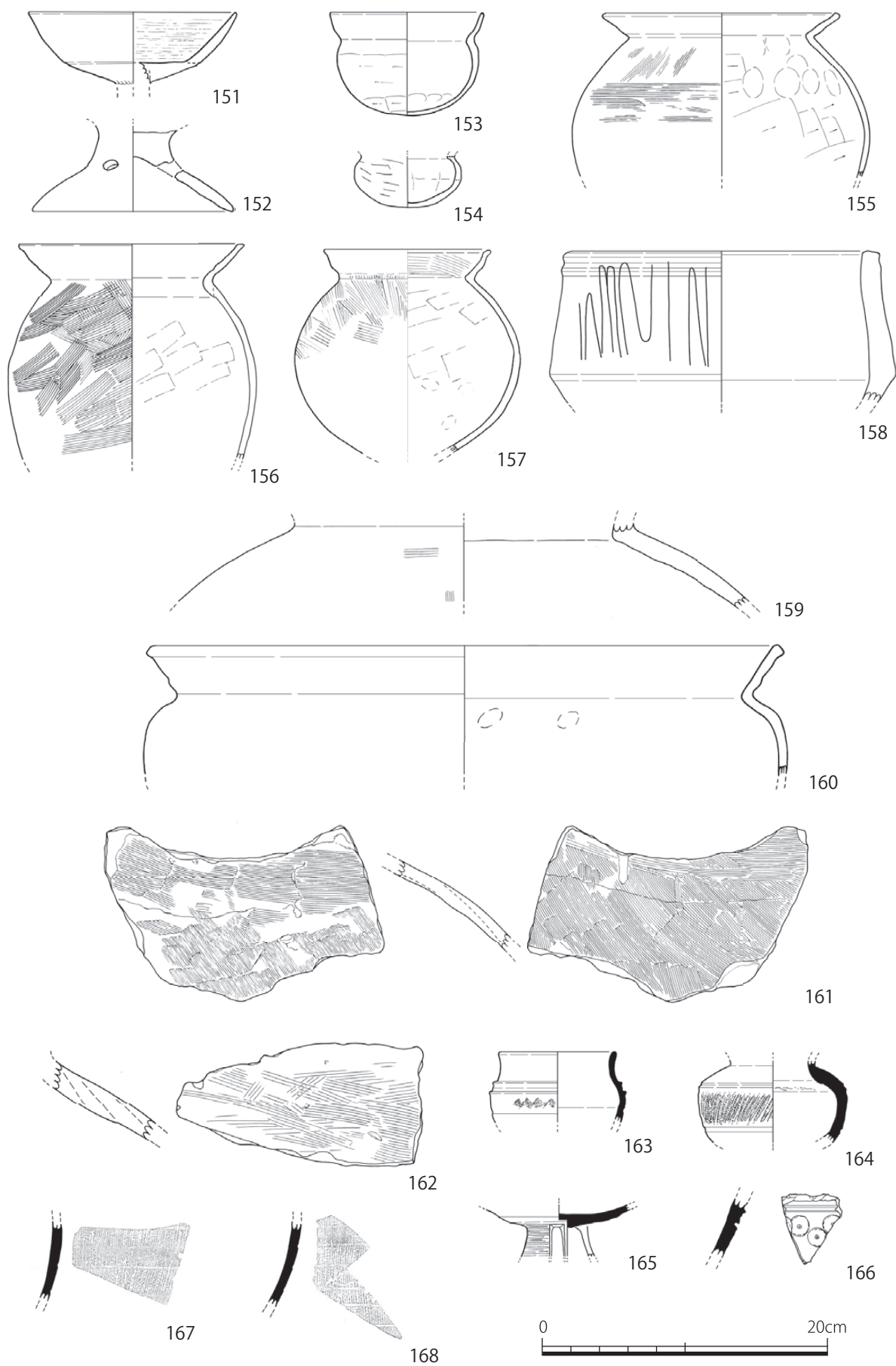


图 41 中層遺構面精査時出土遺物① (S = 1/4)

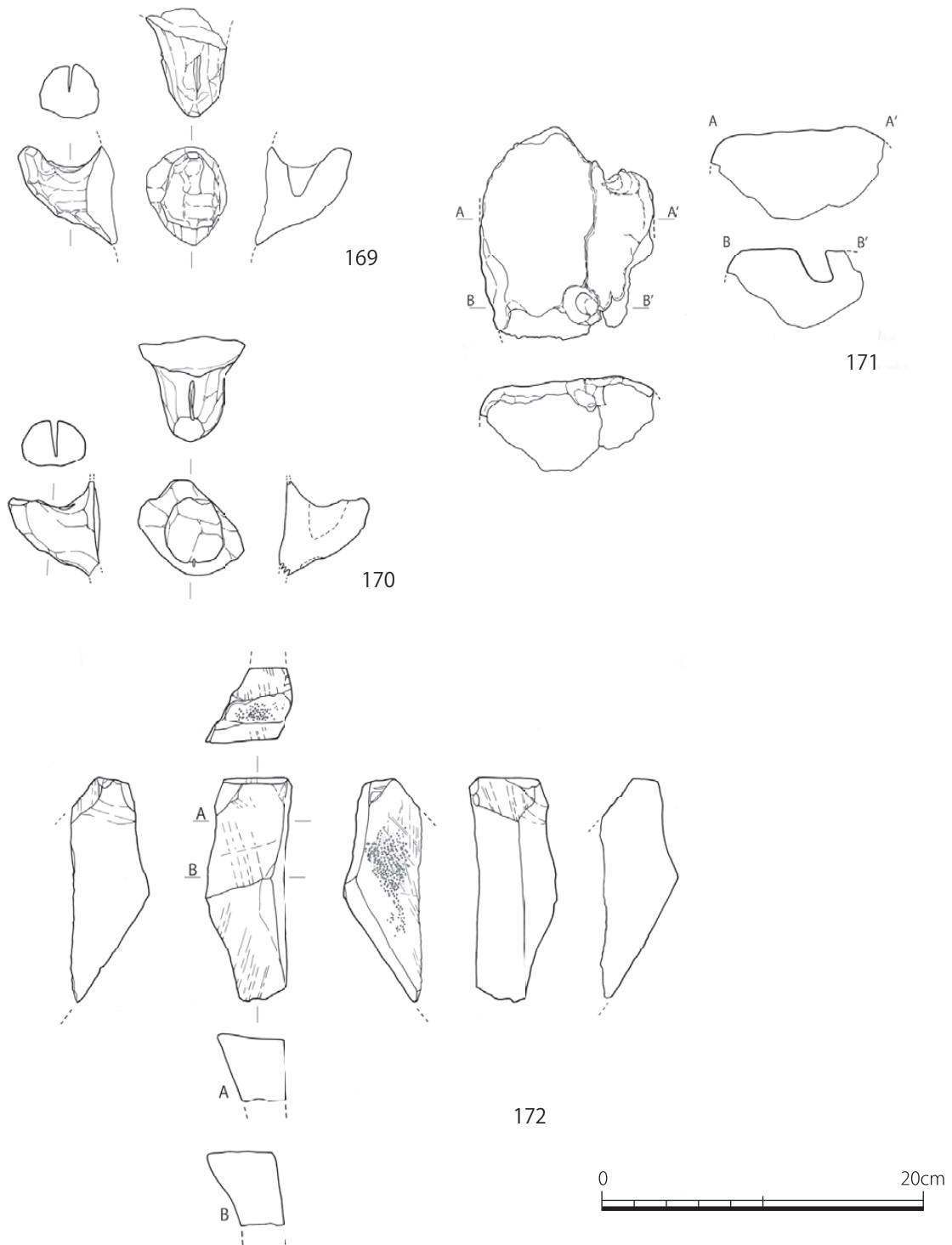


図 42 中層遺構面精査時出土遺物② (S = 1/4)

仕上げるが、ハケ調整痕も残る。

158 は大型の二重口縁壺の口縁部上段である。山陰系土器であると考えられる。器壁は最大 1.8cm と全体に厚い。外面にはミガキを施す。159 は大型の甕の体部である。全体に磨滅しているが、部分的に細かなハケ調整が確認でき、内外面ともに器面を丁寧に仕上げている。160 は大型の鉢である。肩部の張り出しが強い。外面の口縁部から肩部にかけての範囲に強いナデ調整を施す。

161 は大型の壺もしくは甕の肩部である。内外面ともに細かなハケ調整を施す。粘土紐痕が確認できる。162 は大型壺の頸部直下の破片であると考えられる。外面にはハケ調整、内面にナデ調整

を施す。胎土に 0.3～0.5cm 大の礫を多く含む。

163～166 は須恵器である。

163 は壺である。把手の有無は不明である。外面の波状文は上下端の一部がナデ消されている。164 は壺もしくは甕の体部である。体部中段に列点文を巡らせる。列点文は通有のものより幅広かつ密に施す。

165 は高坏である。方形スカシを三方向に穿つ。外面脚部は回転ナデ調整を強く施しておりカキ目状になる。166 は器台の坏部片であると考えられる。直径 1.3cm のスタンプ文を施す。スタンプ文の端が重なる部分もある。

167・168 は甕の体部で、同一個体であると考えられる。陶質土器である可能性がある。外面に縦方向の縄蓆文タタキを、内面はナデ調整を施す。色調は淡灰白色を呈する。

169・170 は土師器甕もしくは鍋の把手である。169 は全体が大きく反り上がる形状である。ナデ調整による細かな面が多数存在する。170 は上面からの切込が中ほどにまで達する。これと繋げようとして取り止めたかのような浅い切込が下面にも存在する。

171 は不明粘土塊である。外面の色調は明橙色を呈する。外面には一ヶ所、指を深く差し込んだと考えられる円柱状の窪みが存在する。

172 は砥石である。全体に擦痕が存在し、一部の面には細かな敲打痕も存在する。重量 330.8g である。

古墳時代初頭の遺構（図 43～53）

古墳時代初頭は遺構・遺物が最も多い時期である。遺構は大型の河道、竪穴建物、溝、土坑等があり、遺物が集中して出土した遺構も存在する。各遺構の時期と全体の時代認識については第 3 節及び第 IV 章で触れている。

NR170 出土遺物（図 43～45－173～224）

大型の河道である NR170 からは布留 1 式古段階以前の遺物が出土しており、この時期に埋没したと考えられる。ただし、河道上面に存在する後世の遺構を正確に検出できていなかったことによる混入品も含まれている。219 の須恵器等がこれにあたり、同様の混入品が含まれている可能性がある。

173～217 は土師器である。

173 は二重口縁壺の口縁部である。山陰系土器であると考えられる。内面には煤が薄く付着する。174 は二重口縁壺の口縁部である可能性が考えられる。口縁端部は内外に広がる平坦面をもつ。外面には縦方向のミガキを施し、内面はナデ調整で仕上げる。175・176 は大型の壺もしくは甕の体部である。175 は内外面ともにハケ調整を施す。176 は外面にハケ調整を施す。内面は指頭圧痕が多数存在する。177 は口縁部から体部がなだらかに繋がる形状の壺である。吉備・讃岐系土器であると考えられる。色調は特徴的な淡桃色を呈する。胎土は 0.2cm 未満の小礫を多く含む。178 は甕で、二段に屈折して直線的に立ち上がる口縁部をもつ。山陰系の土器であると考えられる。179 は甕である。口縁部は外反し、端部は丸く収める。体部は外面にタタキ、内面にハケ調整を施す。器壁は

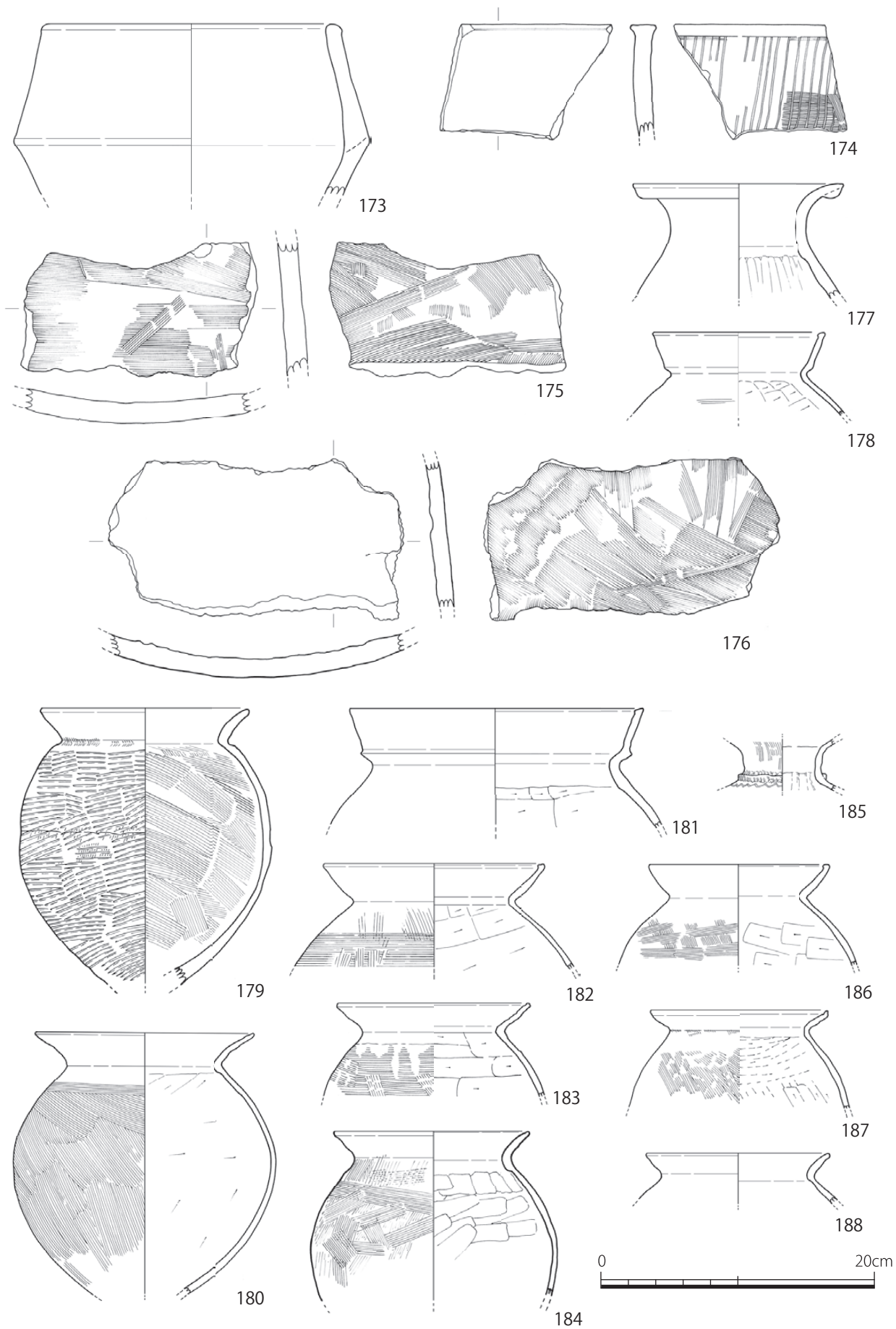


图 43 NR170 出土遺物① (S = 1/4)

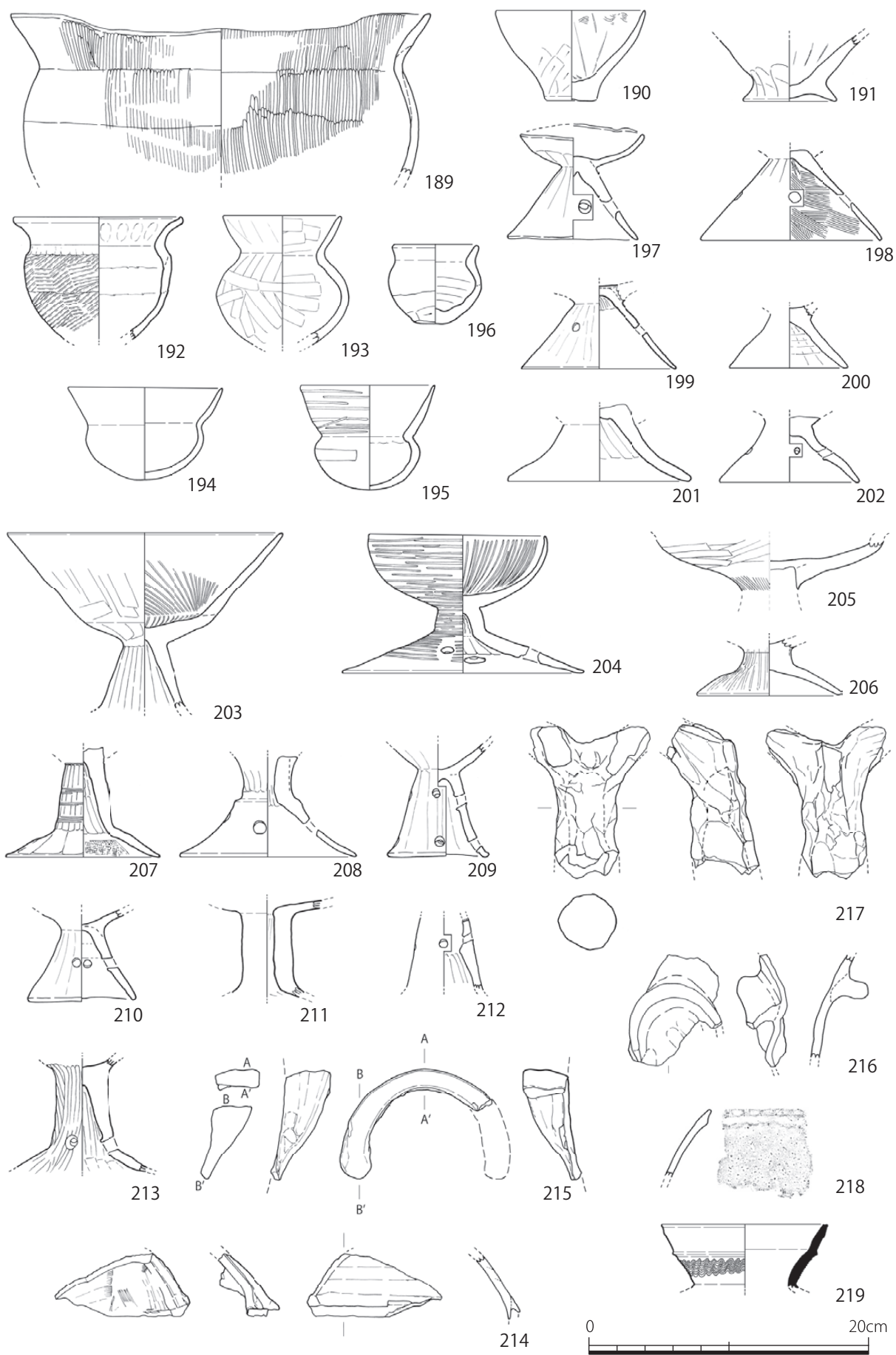


图 44 NR170 出土遺物② (S = 1/4)

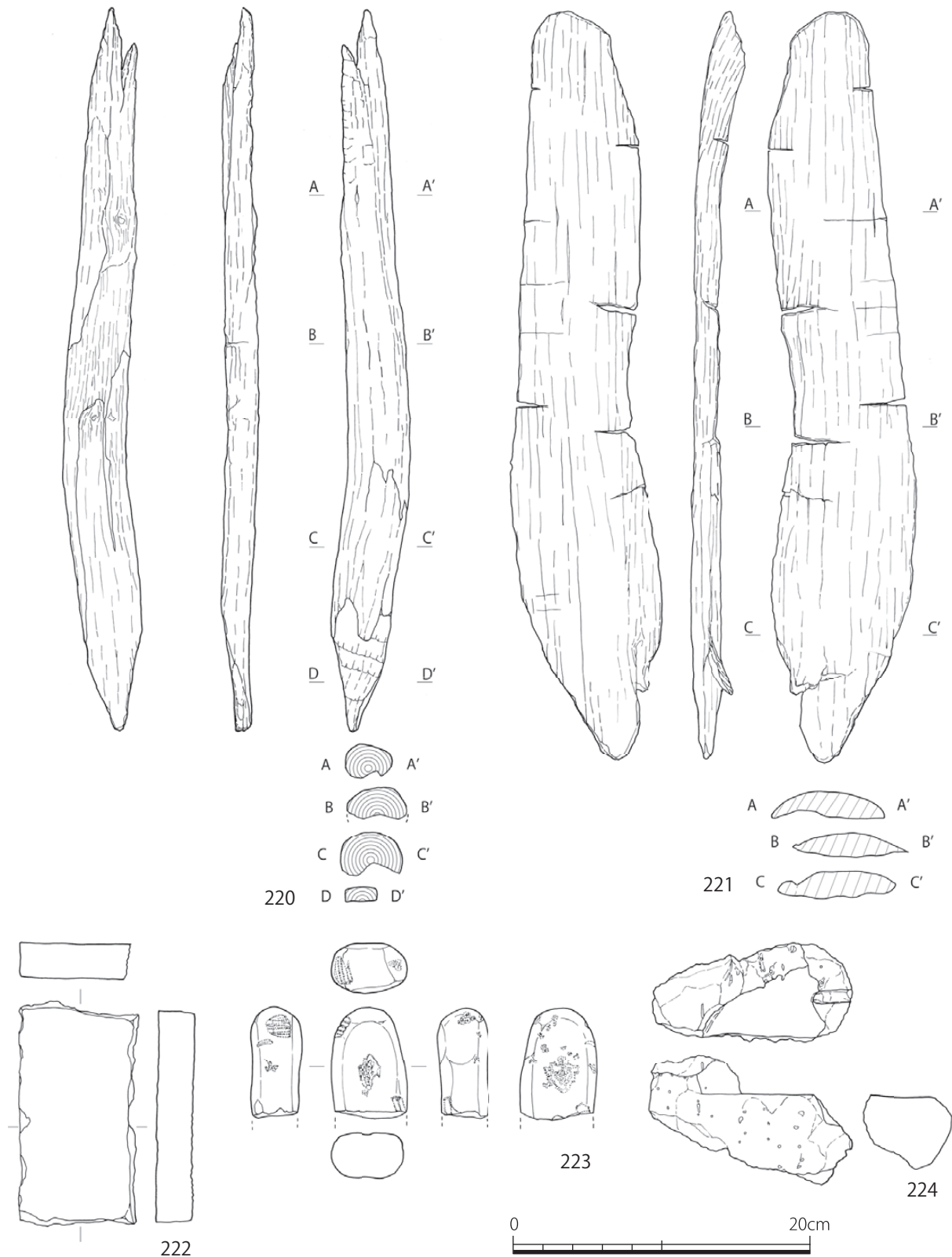


図 45 NR170 出土遺物③ (S = 1/4)

比較的厚い。肩部以下の範囲に広く薄く煤が付着する。180 は甕である。口縁部は外反気味に開き、端部は尖る。外面体部には下から連続的にかき上げるようにハケ調整を施す。内面体部はケズリを丁寧に施す。外面体部の中段から上に煤が薄く付着する。

181 は山陰系土器と考えられる大型の甕である。口縁は二重口縁状である。185 は二重口縁の広

口壺の頸部である。頸部下に突帯を貼り付け、その下に波状文を施す。内面体部には絞り痕が明瞭に残る。

182～184、186～188 は甕の上半部である。182 は口縁端部を内側に折り返して上部に面を作り出す。183 は口縁部が直線的に開き、端部はごく小さく摘み上げる。184 は口縁部が外反する。外面体部のハケ調整と口縁部のナデ調整は、どちらも強めに施されており線が明瞭に残る。外面には全体に煤が付着する。186 は口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部は丸い面を作り出す。頸部の稜を含めて全体に丸みを帯びた作りである。187 は口縁部が短く開き、端部は摘み上げる。188 は口縁部が短く外反し、端部は丸く収める。内面体部のケズリを除き、細かな調整は不明である。

189 は大型の鉢あるいは鍋である。口縁部を中心に全体に歪みが大きい。内外面とも全体に細かなミガキを施す。

190 は小型の平底鉢である。内外面ともヘラ状工具によるナデ調整で仕上げる。

191 は台付の甕もしくは壺の底部である。貼り付けた台の周辺は指頭圧痕が多数存在する。

192 は小型甕である。外面のタタキと内面のナデ調整の施し方を含めて全体に丁寧な作りである。

193 は小型壺である。外面は全体に磨滅しているが、ハケ調整がわずかに確認できる。

194・195 は小形丸底壺である。194 は磨滅により細かな調整は不明であるが、器面は全体に平滑に仕上げられている。195 は外面口縁部に横方向のミガキを施す。

196 はミニチュア土器の甕である。底面付近を除く大部分を細かなナデ調整で丁寧に仕上げる。

197～200 は小形器台である。197 は口縁部の一部を欠くのみで完形に近い。口縁部は全体に波打つ形状である。脚部には円形スカシを四方向に穿ち、位置関係は若干の偏りがある。198 は脚部で上端には坏部との接合面に施した刻み目が存在する。199 は円形スカシを三方向に穿つ。内外面ともナデ調整で仕上げるが、内面上部には絞り痕が残る。200 は小型の脚である。

201～213 は高坏である。201 はラッパ状に開く脚部である。全体に磨滅している。202 は直径 0.4cm の円形スカシを四方向に穿つ。203 は口縁部が直線的に大きく開く形状である。204 は精製の壜形高坏で、裾部が大きく開く形状である。裾部に円形スカシを四方向に穿つ。外面には横方向のミガキを、内面坏部には放射状のミガキを、それぞれ細かく施す。205 は大型高坏の坏部下半である。脚部が接合面からそのまま剥落した状態である。206 は脚部で、非常に低く中実の脚柱部と、湾曲して開く裾部である。外面にはミガキを施す。207 は外面に縦方向のミガキと横方向のナデ調整を施す。208 は脚柱部と裾部の境に段が存在する。装飾付高坏・器台である可能性がある。裾部に円形スカシを四方向に穿つ。209 は上下二段の円形スカシを四方向に穿つ。ただし上下のスカシの位置は各組ともやや左右にずれる。坏部下半は底部中央から斜めに開く形状である。210 は裾部に向かって全体がなだらかに開く脚部である。円形スカシを四方向に穿つ。磨滅が激しく調整は不明である。211 は脚柱部である。脚柱部の中軸に直径 0.7cm の円形孔が坏底部まで貫通する。212 は脚部上半に円形スカシを四方向に穿つ。スカシを穿つ位置はそれぞれ若干高さが異なる。213 は脚柱部と裾部の境界の位置に直径 1.0cm の大きめの円形スカシを四方向に穿つ。外面には縦方向に面取り状の強めのミガキを施す。

214 は手焙形土器の天井部下半である。体部との剥離面が確認できる。

215・216 はU字形の土製品で、鍋等の把手である可能性が考えられる。215 は本体からの剥離面が明瞭である。弧状を描く体部に粘土紐を貼り足して作ったものが剥落したと考えられる。216 は

215 よりも小型で、円筒形と考えられる体部が一部残る。

217 は土製支脚である。両上端部と下半部を欠くが、全体像は Y 字状であることが確認できる。残存高 11.0cm である。脚部は大部分が中空である。

218 は縄文土器深鉢である。外面端部直下に突帯が巡る。

219 は須恵器壺もしくは甗の口縁部である。先述のとおり上層からの混入品であると考えられる。外面中ほどに小さな段を作り、下段には波状文を巡らせる。

220 は杭状木製品である。直径 4~5cm の枝の一端を尖らせて杭としている。一部に樹皮が遺存する。下半部（杭先端側）は比較的遺存状態が良好であるが、上半部は風化が進んでいる。

221 は板状木製品である。矢板である可能性がある。残存長 52.0cm、残存幅 9.5cm、厚さ最大 1.7cm である。柂目材である。

222 は安山岩（榛原石）の板材である。厚さ 2.3cm で、側面は四周とも破損している。

223 は川原石を用いた敲石である。各部に敲打痕と擦痕が存在する。擦石や石皿としても利用していた可能性がある。

224 は焼土塊である。全体が被熱している。直交する平坦面が二面存在し、それ以外の部位は凹凸が激しい。

SH345 出土遺物（図 46-225~232）

225 は平底鉢である。外面はタタキを施すが底部付近は粗い。内面はナデ調整で丁寧仕上げを施す。

226・227 は甗の底部である。226 は平底だが底部の突出は小さく稜も丸みを帯びる。227 は外面のタタキを底部を中心に放射状に施す。内面はナデ調整を施す。

228 は小型の広口壺の口縁部である。口縁端部は外側に面をもつ。体部上端に絞り痕が存在する。

229・230 は高坏の脚部である。229 は細く短い脚柱部から大きく開く裾部をもつ。外面には細かなミガキを施す。円形スカシは二方向が遺存しており、本来は三方向に穿たれていたと考えられる。

230 はラッパ状に開く脚部である。外面にはやや粗いミガキを施す。脚部上端、坏部との剥離面に

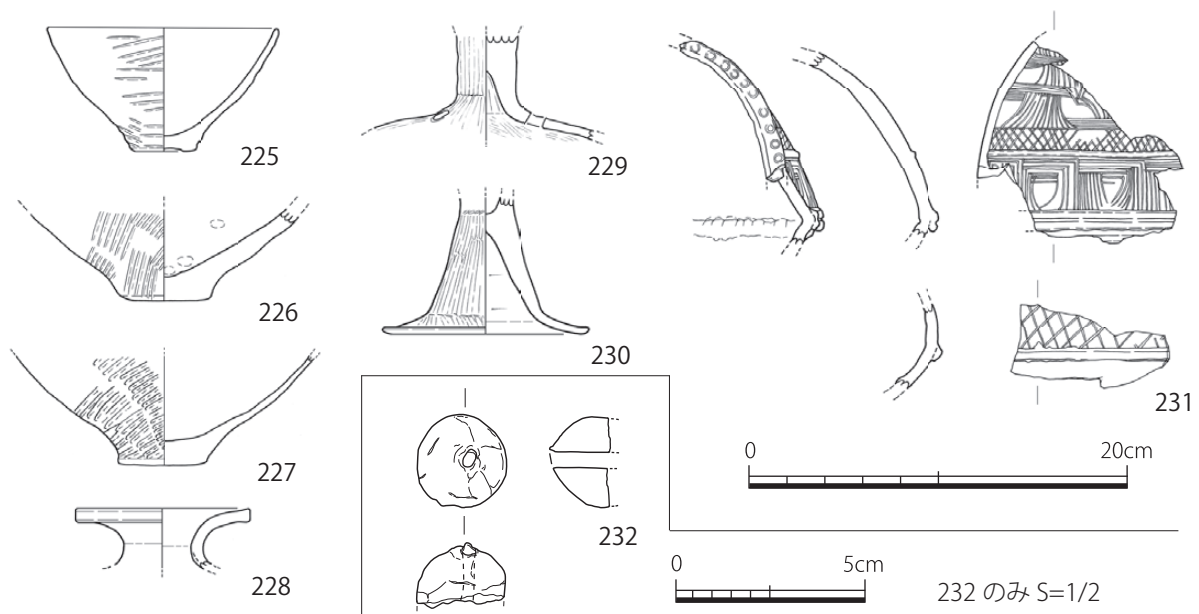


図 46 SH345 出土遺物（S = 1/4・1/2）

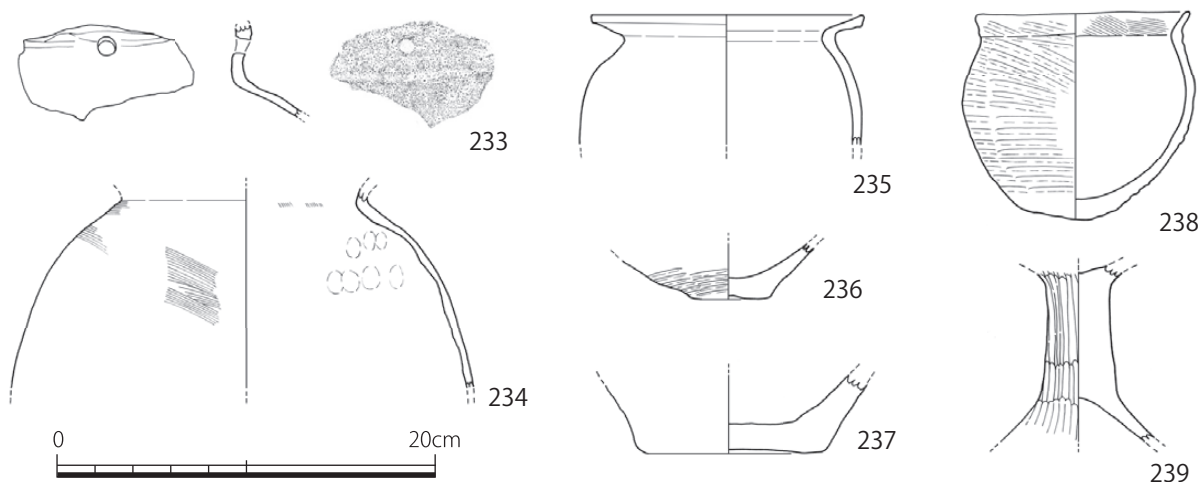


図 47 SD249 出土遺物 (S = 1/4)

は円形の窪みが存在する。

231 は手焙形土器である。覆部から口縁部やや下までの破片が存在する。外面覆部は全体にヘラ描きにより加飾し、貼付突帯を一条巡らす。線刻を描く。小口部分には竹管文を施す。内面には一部に煤が薄く付着する。

232 は土製の玉である。丸玉の半分が残った状態であると考えられる。直径 0.4cm の孔を穿つ。竪穴建物の炉跡炭層からの出土である。

SD249 出土遺物 (図 47-233~239)

233 は縄文土器深鉢の口縁部である。時期は縄文時代後期中葉であると考えられる。表面は磨滅が激しいが、頸部に横方向の沈線がわずかに残る。口縁部に直径 0.8cm の円孔がある。

234~239 は土師器である。

234~238 は甕である。234 は甕の体部上半である。外面にハケ調整を施す。235 は口縁部は直線的に大きく開き、口縁端部は外側に面取りを施す。外面には全体に広く煤が付着する。236 は平底であるが底部の突出は小さい。内面に炭化物が付着する。237 は大型の甕もしくは壺の底部である。磨滅により調整は不明である。238 は小型の甕である。全体に作りが粗い。底部は丸底気味である。外面は口縁部上端まで広くタタキを施す。内面は口縁部にハケ調整を、体部にナデ調整を施す。

239 は高環の脚部である。脚柱部は中実で、裾部はハの字形に開く。外面に細かなミガキを施すが、表面には 0.1~0.3cm 大の礫が多く存在する。

SD310 出土遺物 (図 48-240~249)

240~249 は土師器である。

240~243 は甕である。240 は口縁部が大きく外反し、口縁端部は丸く収める。底部は尖底気味だが、ごくわずかに平坦面が存在する。外面は全体にハケ調整を施す。肩部には横方向の鈍いタタキが巡る。外面下半は被熱による劣化で調整が不明である。外面肩部以下には煤が薄く付着する。内面体部は掻き上げる形のケズリを施し、上半部はハケ状の痕が残る。241 は口縁部が直線的に開き、口縁端部は丸く収める。底部は尖底気味だが、小さな底面が存在し据付時の擦痕もある。外面体部は細かなハケ調整を施す。外面肩部以下には煤が薄く付着し、この範囲には被熱による表面の剥落が多く存在す

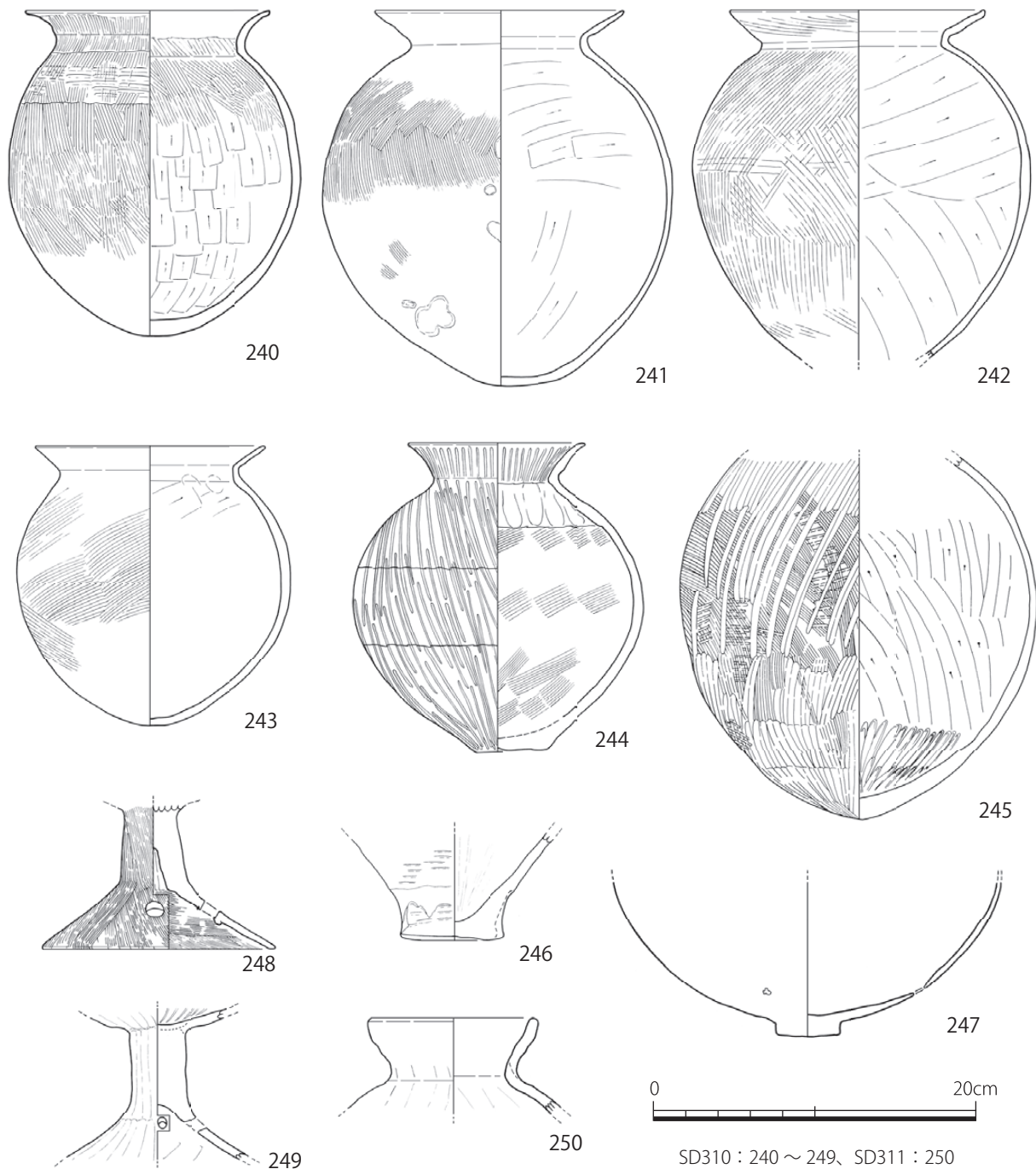


図 48 SD310・SD311 出土遺物 (S = 1/4)

る。242 は口縁部が直線的に開き、口縁端部は丸く収める部分と小さく摘み上げる部分が存在する。外面はハケ調整を施し、口縁部から頸部はその後ナデ調整を施すがハケ痕が残る部分が多い。243 は口縁部が直線的に開き、口縁端部は丸く収める。底部は尖底気味である。外面体部にハケ調整を施す。外面体部下半には部分的に煤が付着する。

244 は平底壺である。口縁部はやや外反する。外面には縦方向のミガキを丁寧に施し非常に平滑に仕上げている。245 は壺もしくは甕の体部である。縦長の体部で、底部は尖底である。外面はタタキ、ハケ調整、ミガキを重ねて施す。246 は壺もしくは甕の底部である。底部周辺に施したタタキの影響で生じた歪みを補うような形で底部裾の一部に粘土を貼り足している。247 は大型壺の体部下半である。体部は球形で、底部に平底の台が付く。底部やや上に直径 0.8cm の不整形な孔を内

側から削り取って穿つ。

248・249は高坏の脚部である。248は脚柱部の上半が中実で、裾部は大きく開く。外面にはハケ調整とミガキを施す。内面裾部はハケ調整を施す。円形スカシを三方向に穿つ。249は脚柱部が中実である。外面にはミガキを施す。内面坏部にもミガキが確認できる。円形スカシが二方向分遺存しており、四方向に穿たれていたと考えられる。

SD311 出土遺物 (図 48-250)

250は土師器壺である。頸部を強くナデることにくびれを作り出し、二重口縁状に仕上げる。外面には、わずかにミガキが確認できる。

SD380 出土遺物 (図 49~51-251~296)

251~296は庄内式期古段階以前の土師器、弥生土器である。SD380からまとまった状態で出土しており、出土状況を図 29 に示している。

251は広口壺である。頸部は直立し口縁部が外反する。外面は部位ごとにミガキとハケ調整を施す。体部上半にヘラ状工具で弧状の線を二重に描く。外面体部中ほどに煤が薄く付着する。252は二重口縁壺の体部上端である。頸部との境に突帯を貼り付けて段を作る。肩部には波状文とハケ状工具による沈線を巡らせる。253は細頸壺である。外面には横方向の櫛描文とミガキを施す。内面はミガキを施す。

254は鉢である。内傾する口縁部で、口縁端部は肥厚させて上と外に面を作り出す。外面には櫛描文を複数段巡らせる。

255~279は甕である。255は球形の体部に、外反する口縁部をもつ。外面はタタキを施し、内面はハケ調整で丁寧に仕上げる。外面全体に煤が薄く付着する。外面底部付近は表面が剥落している部分が多い。256は縦長の体部に、直線的に開く口縁部をもつ。口縁端部はごく小さく摘み上げる。外面体部のタタキは底部の台まで密に施す。体部下半は粘土の接合痕が明瞭に残る。257は体部の上半に複数の刺突痕が存在する。刺突はタタキの後に施され、貫通はしない。外面の肩部以下の全体と口縁部の一部に煤が付着し、体部中ほどは特に多い。258は体部が球形に近く、口縁部は外反する。口縁端部は外側に面を作る。外面体部の中ほどにタタキの上に施す縦方向の短いハケ痕が存在する。外面下半に煤が付着する。259は平底であるが、台は潰れ気味である。外面体部のタタキは部位ごとに方向が変わる。外面体部下半、特にその上部を中心に煤が付着する。260は体部が縦長で下膨れの形状である。口縁部は大きく開き、頸部はくびれる。外面体部には細かくタタキを施すが、体部中ほどに粘土紐痕が明瞭に残る。外面下半に煤が薄く付着する。261は表面が磨滅しているが外面にハケ調整がわずかに確認できる。器面は全体に滑らかに仕上げられている。262は体部の下半に粘土紐の接合痕が存在し、これを境に下部は細く尖る形状となる。全体にやや厚手で重量感がある。263は口縁部が外反し、口縁端部は内側に折り返す。外面体部はタタキを施す。264は口縁部の下半が垂直気味に立ち上がり、上半が外反する。体部は全体にやや歪みがある。265は外面体部に被熱による変色と表面の剥落が目立つ。266は口縁部が外反する形状である。全体に厚手の作りである。外面には煤が付着する。267は口縁部が大きく開き、口縁端部は外側に細いが明瞭な面を作る。外面体部には粗いタタキを施す。268は外面体部に部位ごとに方向を変えたタタキを施す。内面はケ

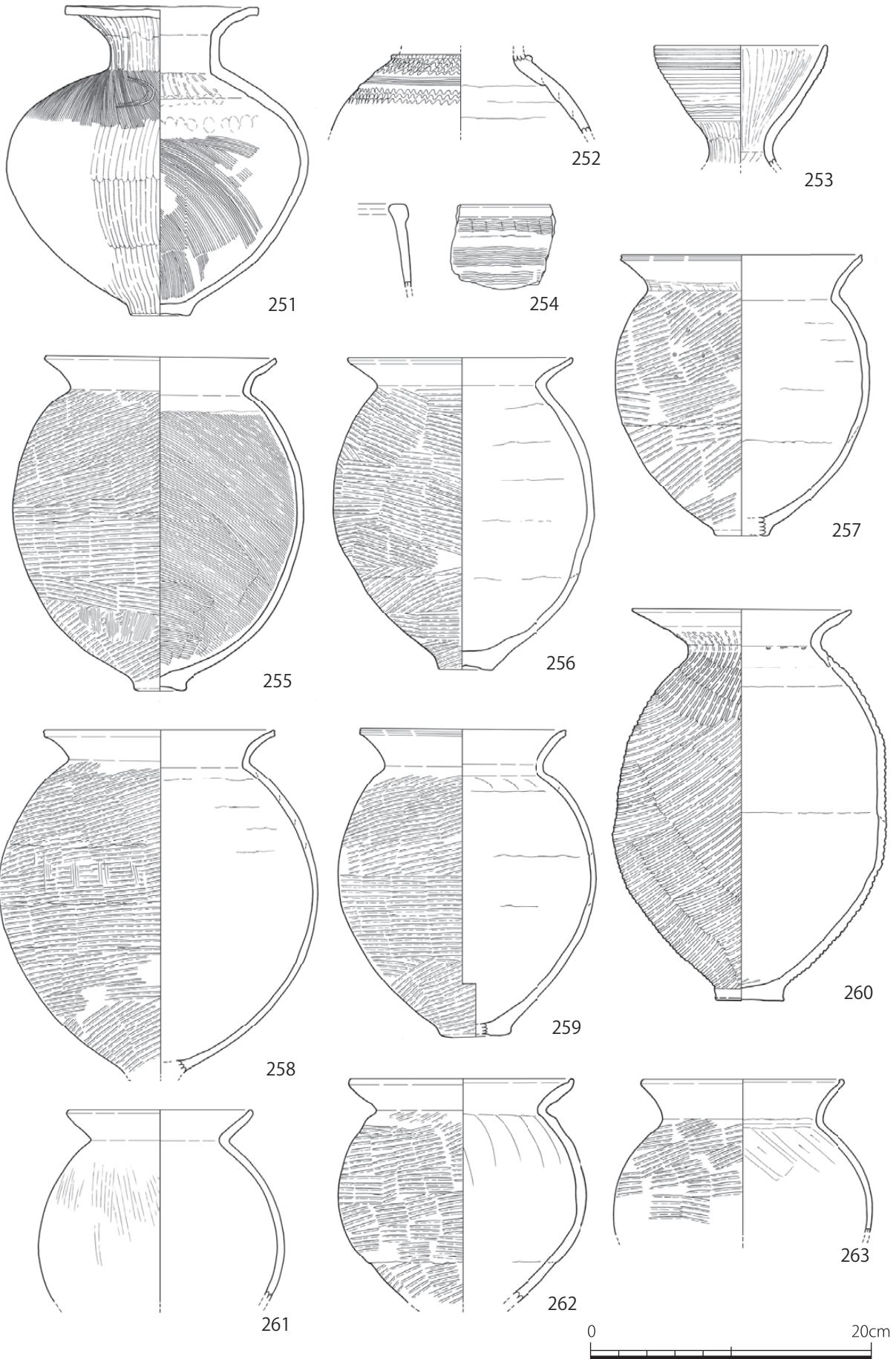


图 49 SD380 出土遺物① (S = 1/4)

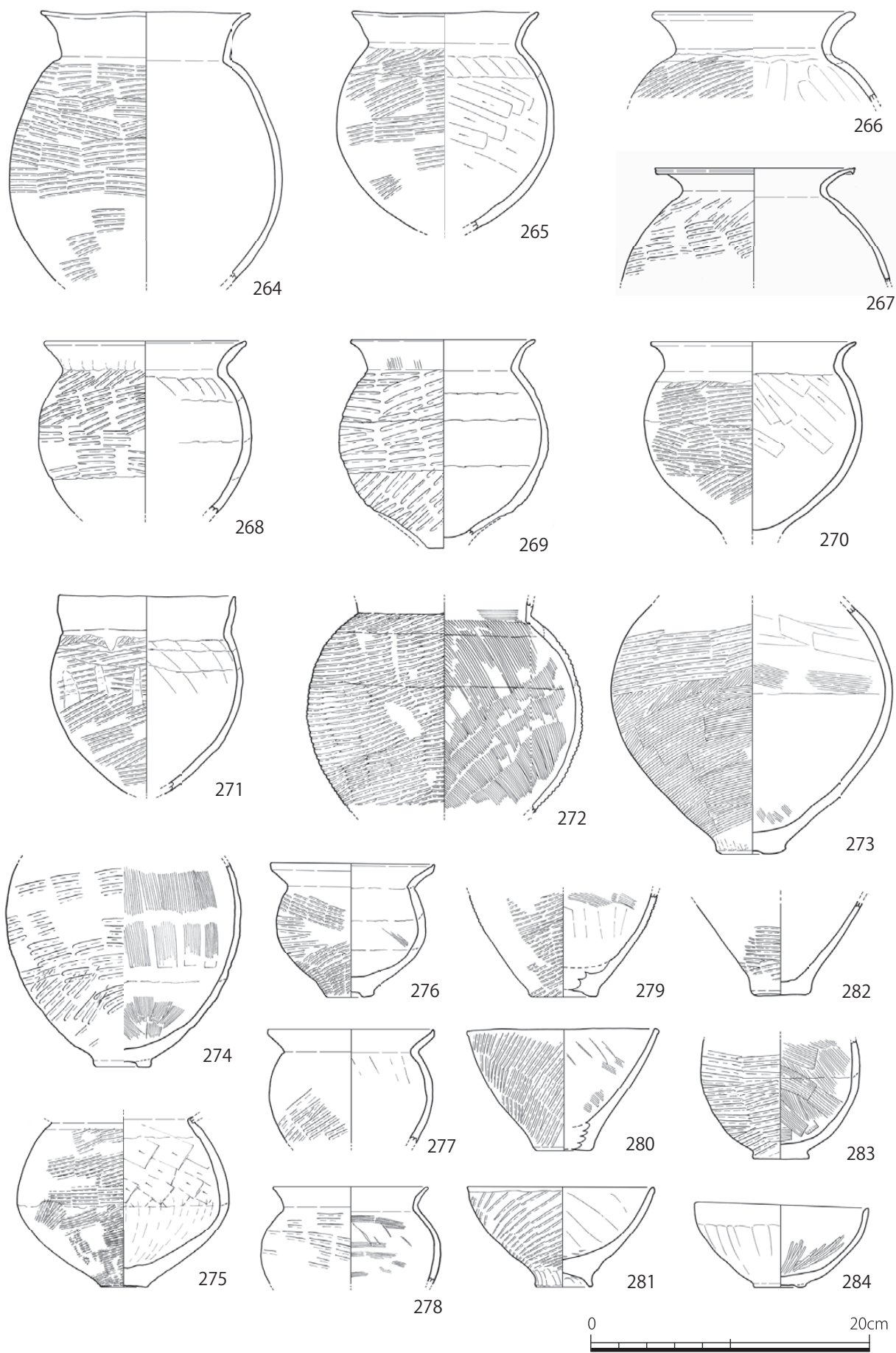


图 50 SD380 出土遺物② (S = 1/4)

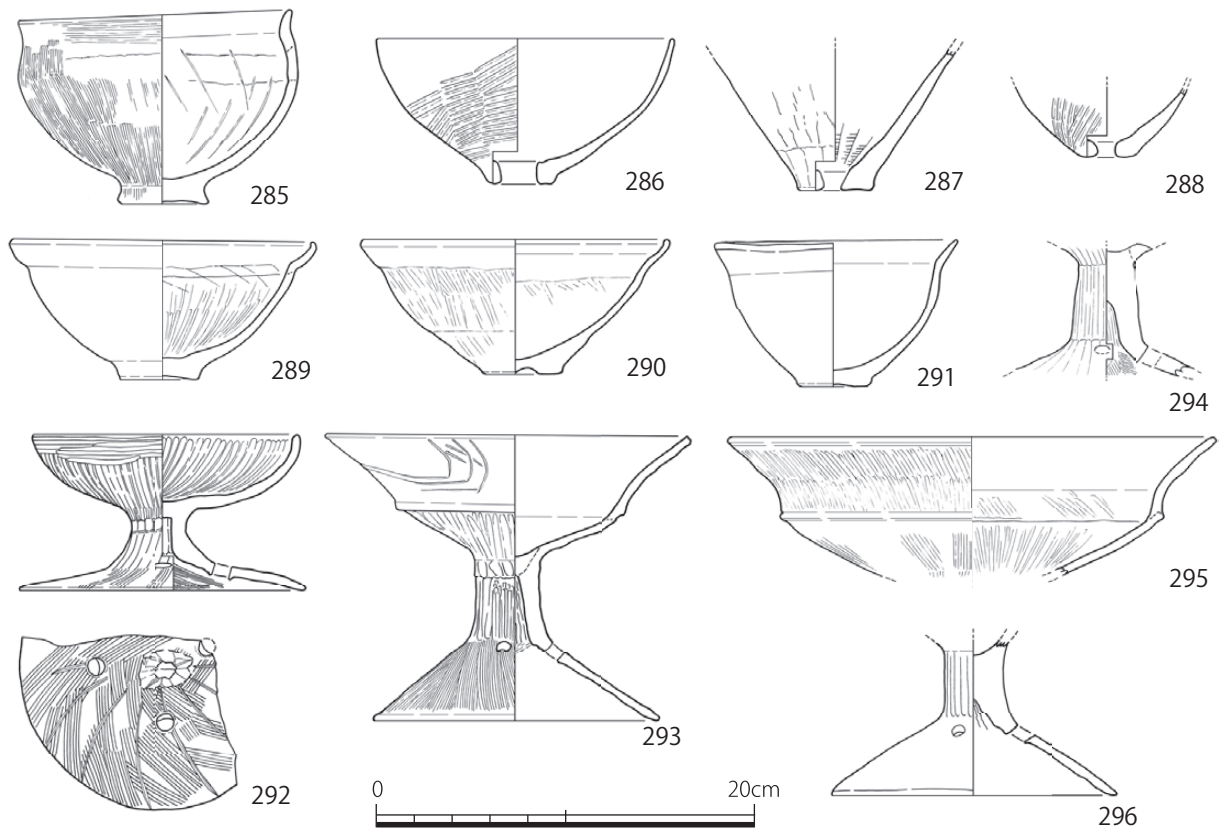


図 51 SD380 出土遺物③ (S = 1/4)

ズリの後、ナデ調整で仕上げる。全体に厚手の作りである。外面には煤が付着し、体部下半は被熱による変色が目立つ。269 は外面体部に幅広のタタキを施す。底部付近は被熱により全体に表面が剥落している。270 は口縁部が他より広口の形状である。外面体部に細いタタキを施す。外面には広く薄く煤が付着し、底部付近は 269 と同様に剥落が目立つ。271 は口縁部が垂直気味に立ち上がる。底部を欠くが尖底あるいはごく小型の平底であると考えられる。外面体部にタタキを施し、中ほどには縦方向に短くナデ付けた痕が複数存在する。272 は球形の体部である。外面はタタキを丁寧に施す。内面は掻き上げるナデ調整の痕がハケ状に残る。外面の肩部以下に煤が薄く付着する。273 は外面肩部にタタキを、それ以下の範囲にハケ調整を施す。外面全体、特に体部中ほどを中心に煤が付着する。274 は中央が窪む輪状の台部をもつ。外面のタタキは粗い。内面には 272 と同様のナデ調整を施す。外面体部下半に煤が付着する。275 は下膨れで張り出しが強い形状の体部である。外面はタタキの後、一部にナデ調整を施す。全体に厚手の作りである。煤は付着しない。276 は小型甕である。口縁部は直線的に開き、口縁端部はごく小さく摘み上げる。外面体部にはタタキを施す。底部付近のタタキは放射状に施す。277 は外面体部にタタキを施し、肩部から上にはナデ調整で仕上げる。外面全体に煤が付着する。278 は肩部が張り出す形状である。口縁部は短く外反する。外面体部に左肩上がりのタタキを施す。外面肩部以下に煤が薄く付着する。279 は台部の突出が小さい平底である。外面には煤が付着し、被熱による表面の剥落も存在する。

280・281 は鉢である。280 は底部から直線的に開く形状である。口縁端部は一部を外側に小さく折り返す。281 は碗形で、輪状の台を貼り付ける。外面のタタキは放射状に施す。

282・283 は甕の底部あるいは鉢である。282 は直線的に開く形状である。283 は外面にタタキ

を施すが、下半には粘土のひび割れが目立つ。内面は細かなハケ調整を施す。

284～291は鉢である。284は碗形の鉢で、底部に薄い台を貼り付ける。全体にナデ調整を施し、内面下半にはミガキを施す。285は上半が内湾する形状である。外面にハケ調整とナデ調整を施す。286は碗形で、底部中央には直径1.7～2.0cmの不整形な穿孔を施す。287は底部から直線的に開く形状である。底部中央に直径0.8cmの円形孔を穿つ。外面には粘土のひび割れが目立つ。288はごく小さな平底の中央に直径0.7cmの円形孔を穿つ。289・290は小形丸底鉢に平底台を付けた形状である。289は口縁部が受口状になる。全体にナデ調整を施し、内面にはさらにミガキを施す。290は口縁部の稜が289よりも鈍い。やや粗いナデ調整を施す。台の中央部が不整形に窪む。291は全体に歪みが大きく、上面観は楕円形になる。

292～296は高坏である。292は幅広の碗形高坏である。脚部の裾は浅く大きく広がる。坏部と脚部外面にミガキを施す。円形スカシを三方向に穿つ。内面裾部には放射状にハケ調整と凹線を施す。坏部の内外面の一部に煤が付着する。293は有稜高坏である。口縁部は外反して大きく開く。脚部はラップ状に開く。口径18.8cm、器高15.0cmである。外面坏部と脚柱部にミガキを施す。坏部上半には、く字状の細い線刻が3条並行して描かれる。裾部上端に円形スカシを四方向に穿つ。294は外面全体にミガキを施すが、仕上がりは粗い。円形スカシを三方向に穿つ。295は大型高坏の坏部である。表面は磨滅しているが、ミガキを施すことが確認できる。全体に精良な作りである。296は中実の脚柱部とハの字形に開く裾部をもつ。円形スカシを三方向に穿つが、孔の位置は四方向のうち一つが欠けたような配置である。

SD363 (NR397 下層) 出土遺物 (図 52-299,308,310)

299は小型甕である。体部はやや下膨れである。全体が被熱による淡桃色に変色している。外面には煤が付着する。308は甕の体部下半で、299と同様に被熱痕がある。外面体部中ほどに煤が多く付着する。310は甕あるいは壺の底部である。底部周辺には指頭圧痕が多数存在する。

SX354 出土遺物 (図 52-303,312)

303は口縁部が大きく開き、口縁端部は外側に面をもつ。312は二重口縁壺である。内外面口縁部にナデ調整を施し、各部の稜はやや丸みを帯びる。

SD355 出土遺物 (図 52-302,307,311,314,316,317)

302は小型甕である。外面はタタキを施し、肩部付近のみナデ調整を巡らせる。肩部以下には煤が付着する。307は口縁部がやや長く上方に立ち上がる。口縁部は内外面にナデ調整を強く施す。311は甕あるいは鉢の底部である。小型の平底である。314は口縁部が直線的に低く立ち上がる。磨滅により調整は不明である。316・317は有稜高坏の坏部である。316は口縁部が大きく外反して開く。口縁部にミガキを施す。317は口縁部が直線的に立ち上がる。内外面全体にミガキを施す。坏部底面中央に、脚部との接合時に上から充填した粘土塊が確認できる。

SK348 出土遺物 (図 52-300,301,305,306,318)

300、301、305、306は土師器甕である。300は体部である。体部の中ほどが大きく張り出す。

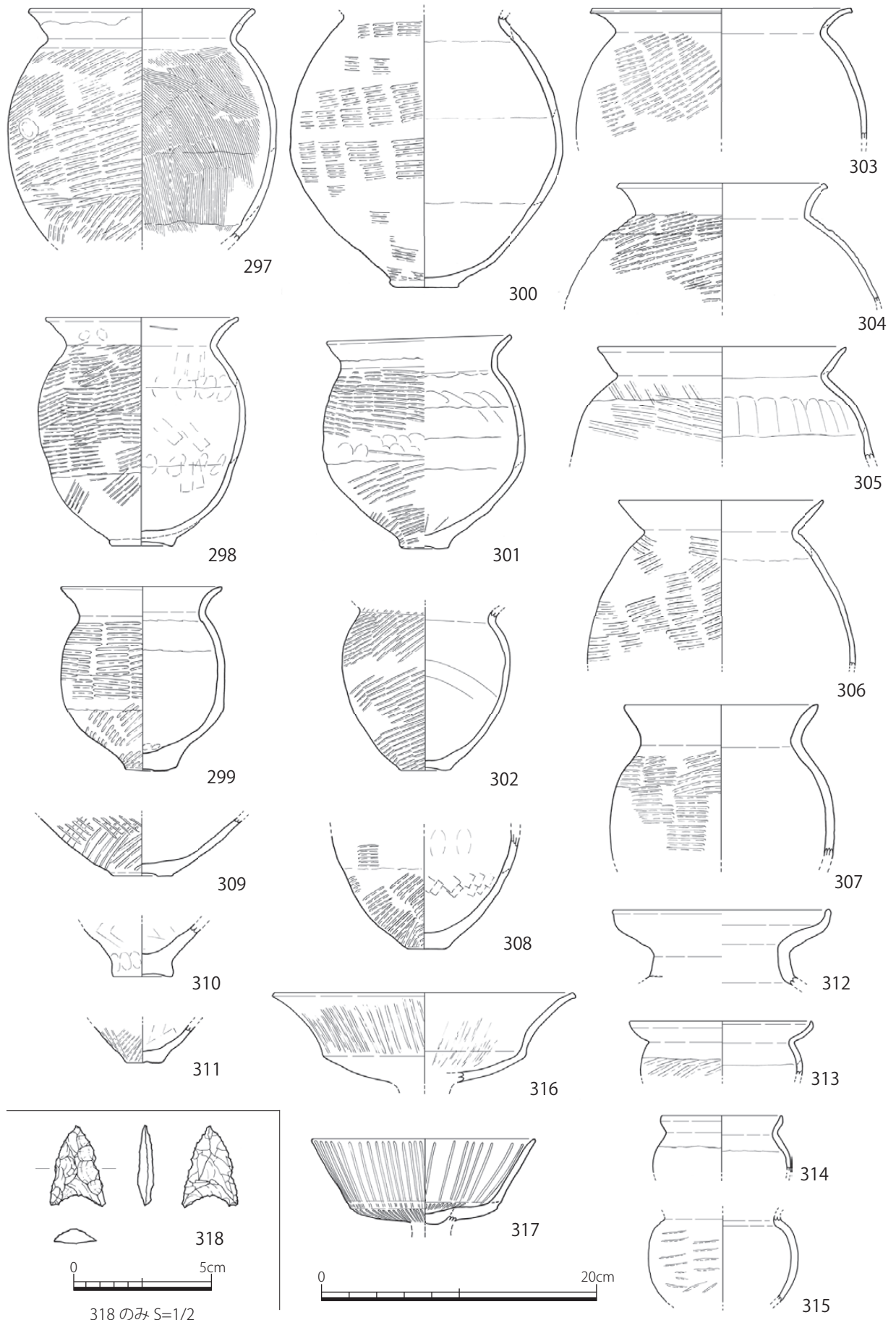


図 52 古墳時代初頭遺構出土遺物 (S = 1/4・1/2)

底部は径が広い平底で、台の突出は小さい。肩部以下に煤がごく薄く付着する。301 はやや下膨れの甕である。外面体部はタタキを施し、体部中ほどはその後にナデ調整を施す。肩部以下に煤が薄く付着する。305 は肩部が張り出す形状である。口縁部は全体に歪みがある。外面には部分的に煤が付着する。306 は外面体部のタタキの上からナデ調整を部分的に施す。外面下半に煤が薄く付着する。318 はサヌカイトの無茎鉢である。長さ 2.9cm、幅 1.6cm、厚さ 0.5cm、重量 2.03 g である。

SK362 出土遺物 (図 52-298,304,315)

298、304、315 は土師器甕である。298 は体部下半に歪みがある形状である。全体が被熱により薄く変色しており、外面体部下半は表面の剥落が多い。304 は外面体部に幅広のタタキを強く施す。315 は小型甕の体部である。磨滅が激しいが外面にタタキが確認できる。外面肩部以下が全体に焦げている。

SX344 出土遺物 (図 52-309,313)

309 は甕の底部である。外面底部付近は放射状にタタキを施す。313 は小型甕である。口縁部は内湾して立ち上がる。外面体部にタタキを施し、肩部より上は強いナデ調整で仕上げる。

SP349 出土遺物 (図 52-297)

297 は土師器甕である。口縁部は直線的に開き、体部は球形状である。外面体部にタタキを施す。内面はハケナデを施す。外面肩部以下と口縁の一部に煤が付着する。

下層遺構面精査時出土遺物 (図 53-319~339)

古墳時代の遺構を検出するにあたり、遺構面のすき取り及び清掃作業を複数回にわたって行っている。ここでは調査時に下層遺構として認識されていた遺構群の検出作業時に出土した遺物を報告する。ここに含まれる遺構・遺物は古墳時代初頭以前を中心とするが、結果として古墳時代中期以降のものも含まれている。

319~325 は土師器甕である。319 は口縁部が外反し、口縁端部は面を作る。全体に磨滅しているが外面体部には一部にハケ調整と煤の付着が確認できる。320 は口縁部が外反し、口縁端部は尖る。全体に厚手の作りである。胎土は 0.1~0.3cm 大の礫を多く含む。321 は口縁部が全体に波打つように歪む形状である。外面のタタキは頸部にまで施す。322 は口縁部が直線的に開き、口縁端部を摘み上げる。323~325 は甕の底部の他、有孔鉢の底部である可能性がある。323 は底部中央からややずれた位置に直径 0.5cm の円形孔を穿つ。324 は底部中央に直径 0.6cm の円形孔を、焼成後に器面の両側から削ることで穿つ。325 は底部に直径 1.1cm の円形孔を、焼成前に上部から棒を差し込んで穿っており、下端の余剰粘土が内側に折り返されて孔の一部を塞いでいる。

326 は土師器直口壺である。口縁部は直線的に立ち上がり、口縁端部は外側に折り返して上部に面を作る。外面全体に細かな縦方向のハケ調整を施す。

327 は弥生土器高坏の坏部である。上下二段に直径 0.7cm の竹管文を巡らせる。下段竹管文の下にある稜には縦方向の細かな刻み目を施す。

328~330 は土師器高坏の脚部である。328 は裾部に円形スカシを七方向に穿つ。スカシの配置

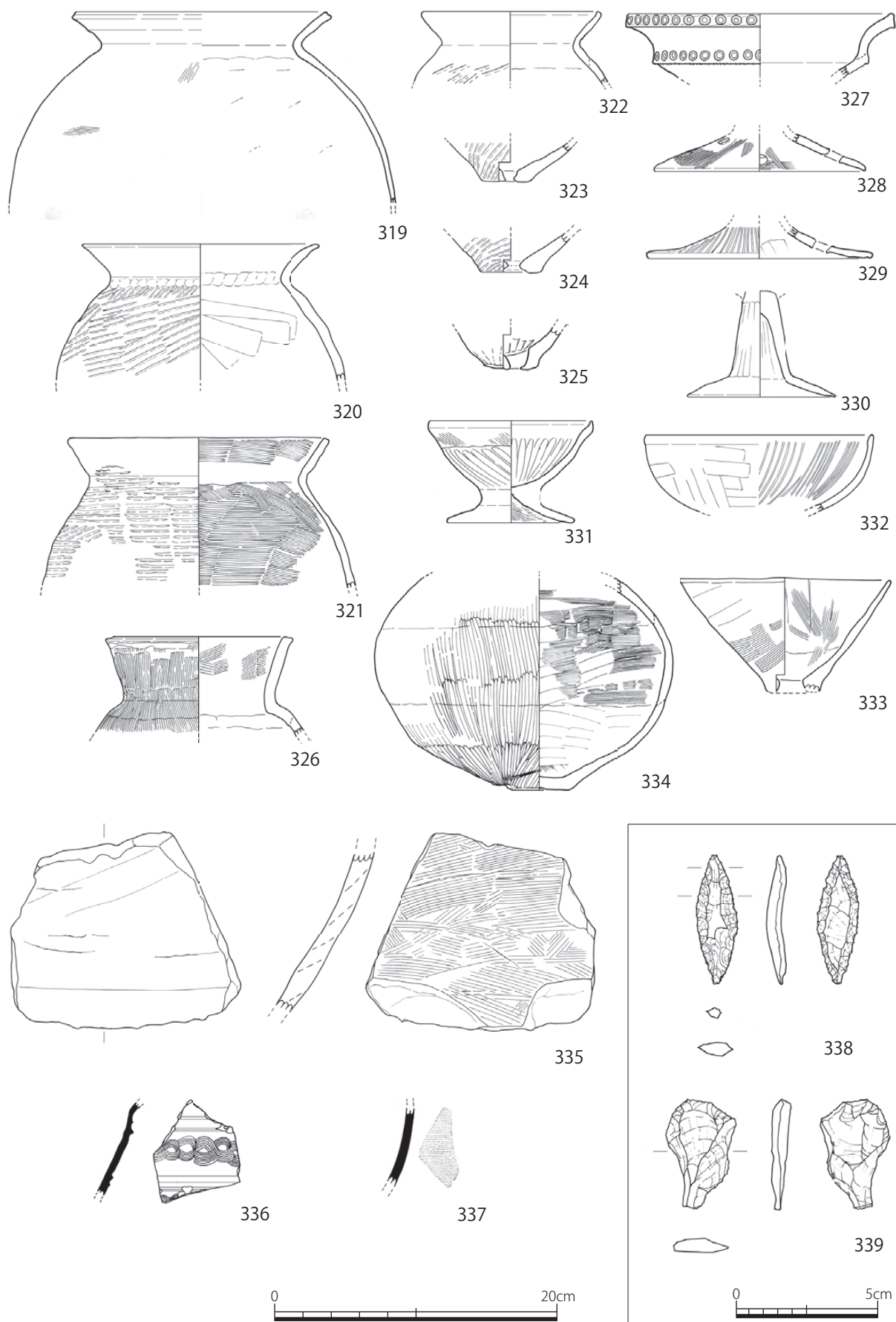


图 53 下層遺構面精査時出土遺物 (S = 1/4 · 1/2)

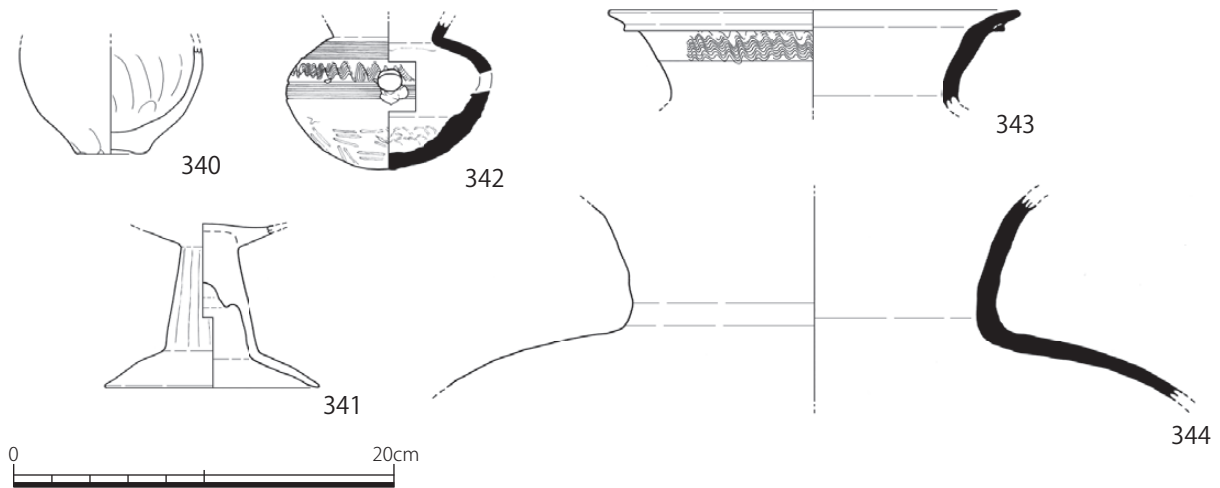


図 54 調査区排水溝・攪乱掘削時出土遺物 (S = 1/4)

は平面・立面的に不規則である。329 は低く大きく開く形状である。外面に縦方向のミガキを施す。円形スカシを三方向に穿つ。330 はラッパ状に開く形状である。外面にミガキを、内面にナデ調整を丁寧に施す。

331 は土師器脚付鉢である。口縁部が小さな受口状である。脚部は、太く短い脚柱部とハの字状に開く裾部をもつ。

332 は坏あるいは高坏の坏部である。外面はヘラナデを、内面はミガキを放射状に施す。

333 は有孔鉢である。狭い底部から直線的に開く。全体にやや歪みがあり、上面観は楕円形になる。全体に粗いハケ調整を施す。底部中央に直径 1.4cm の円形孔を穿つ。

334 は土師器壺の体部である。平底であるが台は半分潰れている。外面にはミガキを、内面にはハケナデ調整を施す。

335 は大型の甕あるいは壺の体部である。外面にハケ調整を、内面にナデ調整を施す。

336 は須恵器器台の坏部である。外面に鎖状文を 2 段に施す。内面には自然釉が付着する。337 は須恵器あるいは陶質土器甕の体部である。外面に縄蓆文タタキを、内面にはナデ調整を施す。

338 はサヌカイトの石鏃である。無茎の柳葉形である。縦断面形は緩やかに屈曲する。長さ 4.5cm、幅 1.4cm、厚さ 0.5cm、重量 3.8g である。

339 はサヌカイトの石錐の未製品であると考えられる。長さ 3.9cm、幅 2.4cm、厚さ 0.7cm、重量 5.2g である。

調査区排水溝・攪乱掘削時出土遺物 (図 54 - 340~344)

340 は土師器鉢である。全体に丸みを帯びる形状である。341 は土師器高坏の脚部である。脚柱部の上半が中実である。坏部との接合状況が断面で確認できる。

342 は須恵器甕である。外面上半には強い回転ナデ調整を施しカキ目状の痕が残る。外面下半はタタキを施した後、ナデ調整で仕上げる。

343・344 は須恵器甕である。343 は口縁部である。外面の波状文と稜は明瞭である。内面には自然釉が厚く付着する。344 は大型甕である。内外面全体にナデ調整を施す。外面体部と内面口縁部上半に自然釉が付着する。

第Ⅳ章 総括

第 1 節 調査成果のまとめ

今回の発掘調査では古墳時代初頭以降の遺構が存在することを確認している。遺物は、これより古い縄文時代後期から弥生時代にかけての時期の遺物も散発的ながら出土している。遺構の時期は、大きく古墳時代初頭、古墳時代中期、平安時代後期～鎌倉時代に分けられる。Ⅲ章で述べたように調査時には上層遺構・中層遺構・下層遺構と段階を分けて作業を行っているが、遺構の時期との対応関係に問題を多く残すことから、遺構の時期別にまとめ直して報告を行っている。遺構の形成面は基本層序Ⅳ層上面を基本とするが、一部にⅤ層上面に形成される遺構を含む。また、古墳時代初頭の遺構はⅣ層上面での検出作業が困難な遺構を含んでおり、Ⅴ層上面において作業を行った遺構を多く含む。

古墳時代初頭は、大型の河道とその西岸に位置する竪穴建物、溝、土坑等から成る遺構群で、出土遺物も多く、今回の調査成果の中心となる時期である。古墳時代中期は土坑や溝が散在する形で、遺物は一定量が出土している。その後は 11～12 世紀と考えられる井戸や土坑墓、小規模な掘立柱建物から成る遺構群と、その後の 12 世紀以降に形成される耕作溝群とがある。ここでは時系列に沿って今回の調査における各時期の遺構・遺物の状況や変遷過程をまとめる。

縄文時代から弥生時代にかけては時期が明確な遺構は無いが、遺物が各時代の遺構に混ざる形で出土している。縄文土器、弥生土器、石器が出土しており、土器は基本的に小片である。石器は石鏃や石錐といった製品の他、サヌカイトの剥片も出土している。

ただし第Ⅲ章第 3 節の末尾に記したⅣ層下に存在する溝（調査区西辺中央部及び南西部の溝にその可能性がある）については、その形成面や上層遺構との関係性から、弥生時代に遡る可能性が残る遺構である。詳細な時期は不明であるが、調査地に遺構が形成されるようになる契機として注意が必要である。

古墳時代初頭になると多くの遺構が確認されるようになる（以後の遺構はⅣ層上面に形成される）。詳細な時期が分かる中では SK348 と SD380 が最も古い遺構で、庄内式期最古段階に相当する。これは弥生時代と古墳時代の境界に位置する段階であり、どちらの時代に含むべきであるかは議論のある部分だが、ここでは古墳時代の始まりと位置付け、これ以後の布留 0 式頃までの遺構群を古墳時代初頭と表現している。

古墳時代初頭の遺構は、調査区南東部の NR170 と北東部の NR397 という二つの河道の西岸に構築されている。両者は同一の河道である可能性も高い。調査区内での河道の埋没時期は NR170 が布留 0～1 式古段階、NR397 は古墳時代中期以前である。一方、河道として機能していた時期がどこまで遡るのかについては不明であるが、庄内式期の遺物が出土しており古墳時代初頭を通じて河道が存在していた可能性を考えたい。

最古段階に位置付けられる SD380 からは、多量の土器が完形に近い状態で出土している。SD380 は溝の掘り直しや人為的な埋め戻しが行われている特徴的な溝である。同じ時期の SK348 も全体像は不明であるが廃棄土坑である可能性が考えられる。

これらに続く時期の遺構として SD369 がある。また、調査区南部に存在する細かな溝やピットも

庄内式期前半に遡る可能性があるが、目立った出土遺物を含む遺構は無い。SD369 を人為的に埋めた後に掘削されるのがSD249で、庄内式期から布留0式期にかけて利用される。

庄内式期後半には竪穴建物SH345が建てられる。一辺約6mのやや大型の竪穴建物で、手焙形土器も出土している。この時期にはSH345の周囲を中心とする範囲に遺構が存在する。SX340・SX354・SX390はSH345の外周溝である可能性がある。SK362・SX344・SD355も同時期の遺構で、この一帯での生活の痕跡と理解できる。

SH345の廃絶後に掘削される溝がSD310とSD311である。布留0式期前後の土器が出土しており、特にSD310からは完形品に近い甕・壺が複数出土している。NR170からもこの時期の土器が多く出土している。

これらの古墳時代初頭の遺構群は、布留0式期から1式期に入る頃にほぼ廃絶したと考えられる。なお、今回の調査で出土した庄内式としている土器のうち甕は、庄内甕の要素を部分受容したV様式甕を基本としており、いわゆる典型的な庄内甕の数は非常に限られる。この点が古墳時代初頭の新堂遺跡集落の特徴を示すと言える。山陰地方等からの外来土器も出土するが量は少ない。

次に遺構が形成される時期が古墳時代中期である。この時期の遺構は、調査区北部の土坑や落ち込み、調査区南部の小規模な河道や溝等がある。SK190・SK202・SK206のように時期がより明確な遺構は古墳時代中期でも後半が主である。ただし、これらの遺構には中期前半に遡る遺物もしばしば混ざることが確認でき、周辺での活動が中期前半段階から始まっていることが窺える。また、廃棄土坑と考えられるSK202からは古墳時代中期の土器と共に古墳時代初頭の土器も多く出土しており、周辺の地面を掘り返すような活動を行っていたと考えられる。古墳時代中期の出土遺物には土師器、須恵器、韓式系土器に加え、少量ながら鉄滓も存在する。周辺での調査と同様、古墳時代後期に入る頃には遺構・遺物が見られなくなる。

平安時代後期～鎌倉時代初頭にあたる11～12世紀には井戸、土坑、土坑墓、小規模な掘立柱建物を含むピット群等の遺構が形成される。これらの遺構の時期は、出土する少量の土器と上層の耕作溝群との関係性から判断されるものであり、詳細時期が分かる個別の遺構はほとんど無い。土坑墓ST364は木棺の上板・底板と考えられる木材2点が遺存している。柱穴と目されるピットが調査区各所に点在しており、建物・塀等の小規模な構造物が複数存在していた可能性が高い。

12世紀のある時期以降、調査地一帯は耕作地としての利用が中心となる。遺構としては耕作溝群として表れる。出土遺物は多くないが、平安時代後期～鎌倉時代前半の瓦器、土師器が存在する。調査区の北西部、SD065に囲われた区域は耕作深度が他より明確に深く、耕作地としての在り方が異なっていたと考えられる。

調査地一帯は中世以降、現代に至るまで耕作地としての利用が主であったようである。

第2節 周辺の遺跡と環境

今回の調査で確認した遺構・遺物及び遺跡全体に関わる評価について、周辺の環境や他の調査成果と合わせて述べる。古墳時代初頭、古墳時代中期、中世はいずれも新堂遺跡の各地点で遺構・遺物が確認される時期であり、これらを紡ぐことで地域像が浮かび上がる。

古墳時代初頭は、今回の調査で庄内式期から布留0式期頃にかけての遺構群を確認している。大型の河道が調査区東辺沿いを南北方向に流れており、その西岸に築かれた遺構群である(図55)。庄内式期新段階と考えられる竪穴建物1棟も含まれる。この古墳時代前期に埋没すると考えられる河道は、北隣で実施した榎教委2008-2次調査でも確認されており、河道に接続する導水路と考えられる溝や土坑も存在する。この前期の河道がさらに北側でどのような位置にあったのかは、後世の河道による削平の影響で不明であるが、概ね現在の国道24号線沿いを流れていたのではないかと考えられる。その東側にあたる榎教委2002-2調査と榎教委2003-12次調査等では、古墳時代初頭を含む前期の竪穴建物、掘立柱建物、水田、井堰を伴う導水路等の遺構を確認している。出土遺物は少なく建物規模も控えめであることから、小規模な集落であると考えられるが、その一方で大掛かりな治水作業も行っている。新堂遺跡の周辺では、この他にも散発的に古墳時代初頭の遺構・遺物が存在しているが、現時点では今回の調査地一帯が最も多い。

古墳時代中期は、新堂遺跡で最も遺構・遺物が多くなる時期である。新堂遺跡の各地点において河道から多量の遺物が出土し、その河岸に土坑や井戸、溝等の遺構が構築される状況を確認している。この時期は遺物量が多く遺構の分布範囲も広い一方で、明確な建物跡の発見は無く居住域はまだ確認されていない。古墳時代中期の初頭から末にかけて(一部は古墳時代後期前半まで残る)、次第に位置を変えていく河道との関係の中で新堂遺跡周辺の非常に広い範囲を利用していることが明らかになりつつある。今回の調査地が位置する新堂遺跡の南部は特に中期後半の遺構・遺物が多く(ここに一部、中期前半の遺物が混ざる)、今回の調査成果も同様の状況にある。東隣に位置する榎教委2005-4次調査(『新堂遺跡Ⅱ』)では河道と西岸の遺構群から、多量の遺物が出土している。陶質土器や韓式系土器、製塩土器、鑄造関連遺物等の特徴的な遺物も多く含まれている。今回の調査地は、その西側の縁辺部の状況を確認したと言える。

調査地一帯、新堂遺跡の南端部では平安時代後期になると再び遺構が小規模ながら形成されるようになり、平安時代末頃には本格的に増加する。遺物の出土量も鎌倉時代前半にかけて増加する。12世紀代には今回の調査地の東隣、榎教委2005-4次調査(『新堂遺跡Ⅱ』)地点に明確な区画溝を伴う屋敷地が築かれ、周辺における中核的存在となる。今回の調査地は屋敷地から西に約50mの距離にある。屋敷地からは輸入陶磁器を含む多量の遺物が出土している。屋敷地の内・外で土坑墓も確認されており、今回確認したST364もこれに連なる墓である可能性がある。屋敷地は鎌倉時代前半に廃絶して耕作地へと変化するが、今回の調査地点はそれに先行して鎌倉時代初頭までに耕作地に変化している。それ以前に存在していた小規模なピット群や土坑等の遺構の多くは、屋敷地の経営者の管理地に属するものと考えられる。その後の耕作地としての在り方も含めて、平安時代後期から鎌倉時代前半にかけての地域経営の在り方を示す一例と言える。

報 告 書 抄 録

ふりがな	しんどういせき5 一けいなわじどうしゃどう「ごせくかん」けんせつにともなうはつくつちょうさほうこくしょー							
書名	新堂遺跡V 一京奈和自動車道「御所区間」建設に伴う発掘調査報告書一							
シリーズ名	橿原市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第17冊							
編著者名	橿原市教育委員会 石坂泰士(編)・平岩欣太・齊藤明彦							
編集機関	橿原市教育委員会事務局 文化財課							
所在地	〒634-0826 奈良県橿原市川西町858-1 TEL 0744-22-4001 FAX 0744-26-1114							
発行年月日	西暦2021年(令和3年)9月30日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しんどう 新堂遺跡	ならけん 奈良県 かしはらし 橿原市 ひがしほうじょうちよう 東坊城町	29205	14C545A	34° 29' 45"	135° 45' 39"	2007/11/9 ～ 2008/3/24	1,800 ㎡	京奈和 自動車道建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
新堂遺跡	集落	古墳時代初頭 古墳時代中期 平安時代後期 ～鎌倉時代初頭 鎌倉時代以降		河道・竪穴建物・溝 土坑・ピット 河道・土坑・溝 掘立柱建物・井戸・土坑 土坑墓・ピット 耕作溝		土師器・弥生土器 石製品・石器 土師器・須恵器 石製品・鉄滓 土師器・須恵器 瓦器 土師器・瓦器		橿教委 2007-5 次調査
要約	<p>古墳時代初頭、古墳時代中期、中世を中心とする時期の遺構・遺物が存在することを確認している。</p> <p>古墳時代初頭は庄内式期最古段階から布留0式期頃にかけての遺構が存在する。調査区東辺沿いに南北方向の大型河道が存在し、その西岸に遺構が形成される。この河道は布留1式期には埋没している。庄内式期古段階の土坑や溝には多数の土器が含まれるものも存在する。庄内式期新段階には竪穴建物1棟が建てられる。一辺約6mのやや大型の方形建物で、建物周辺にも関連すると考えられる土坑や溝が存在する。この建物の廃絶後、布留0式期に新たな溝が掘削される等、調査地周辺の利用が継続する。新堂遺跡における古墳時代初頭の遺構・遺物は、今回の調査地から最も多く発見されており貴重な成果である。</p> <p>古墳時代中期には土坑や溝等の遺構が存在する。これらの遺構の時期は中期後半が主であるが、一部に中期前半の遺物を含む点は近辺での調査成果と同様である。</p> <p>平安時代後期から鎌倉時代初頭にかけての時期には掘立柱建物、井戸、土坑、土坑墓、ピット群が形成される。詳細時期の分かる遺構は少ないが多くの12世紀の遺構である可能性が高い。その後、鎌倉時代初頭のうちに耕作地としての利用が主となる。</p> <p>古墳時代中期と中世の遺構は、東に隣接する地点での調査(橿教委2005-4次調査『新堂遺跡Ⅱ』)で同時期の遺構・遺物を多数確認しており、その縁辺部にあたと理解できる。</p>							

図 版



調査区近景 航空写真（東から俯瞰気味に撮影。中層遺構完掘段階）



調査地中景 航空写真（南から。手前は近鉄南大阪線、奥は国道 24 号線新堂ランプ）

図版 2



調査地中景 航空写真（西から）



調査地遠景 航空写真（西から。中央下に調査区。中央やや右上は畝傍山）



調査地遠景 航空写真（南西から。耳成山・三輪山方面を望む）



調査地遠景 航空写真（北東から。奥は金剛山・葛城山）



調査区全景 上層遺構完掘状況、中層遺構検出状況（北から）



調査区全景 上層遺構完掘状況、中層遺構検出状況（北東から）



調査区全景 上層遺構完掘状況、中層遺構検出状況（南東から）



調査区全景 上層遺構完掘状況、中層遺構検出状況（南西から）



土坑墓 ST364 上板出土状況 (南東から)



土坑墓 ST364 底板出土状況 (東から)



土坑墓 ST364 北西部 土層断面 (北西から)



土坑墓 ST364 土層断面 (南東から。上板除去後)



SE401 北半部 断割断面 (北から)



SE153 断割土層断面（北から）



SE153 井戸枠出土状況（北から）



調査区全景 中層遺構完掘状況、下層遺構検出状況（北西から）



調査区全景 中層遺構完掘状況、下層遺構検出状況（北から）



調査区全景 中層遺構完掘状況、下層遺構検出状況（北東から）



調査区北東部 中層遺構完掘状況、下層遺構検出状況（南南東から）

図版 10



調査区全景 中層遺構完掘状況、下層遺構検出状況（南西から。Ⅳ層除去前）



NR200 完掘状況（北東から）



SK202・SK190 遺物出土状況（東から。手前がSK202）



SD191 遺物出土状況（南西から）

図版 12



SK202・SK190 土層断面（北から）



SK202・SK190 完掘状況（北から）



SK202 遺物出土状況（南東から）



SD191 中央部 土層断面（南から）



SX187・SX188 完掘状況（北から）



SD201 完掘状況（北西から）



SX187 土器出土状況（北から）



SP230 土層断面（東から）



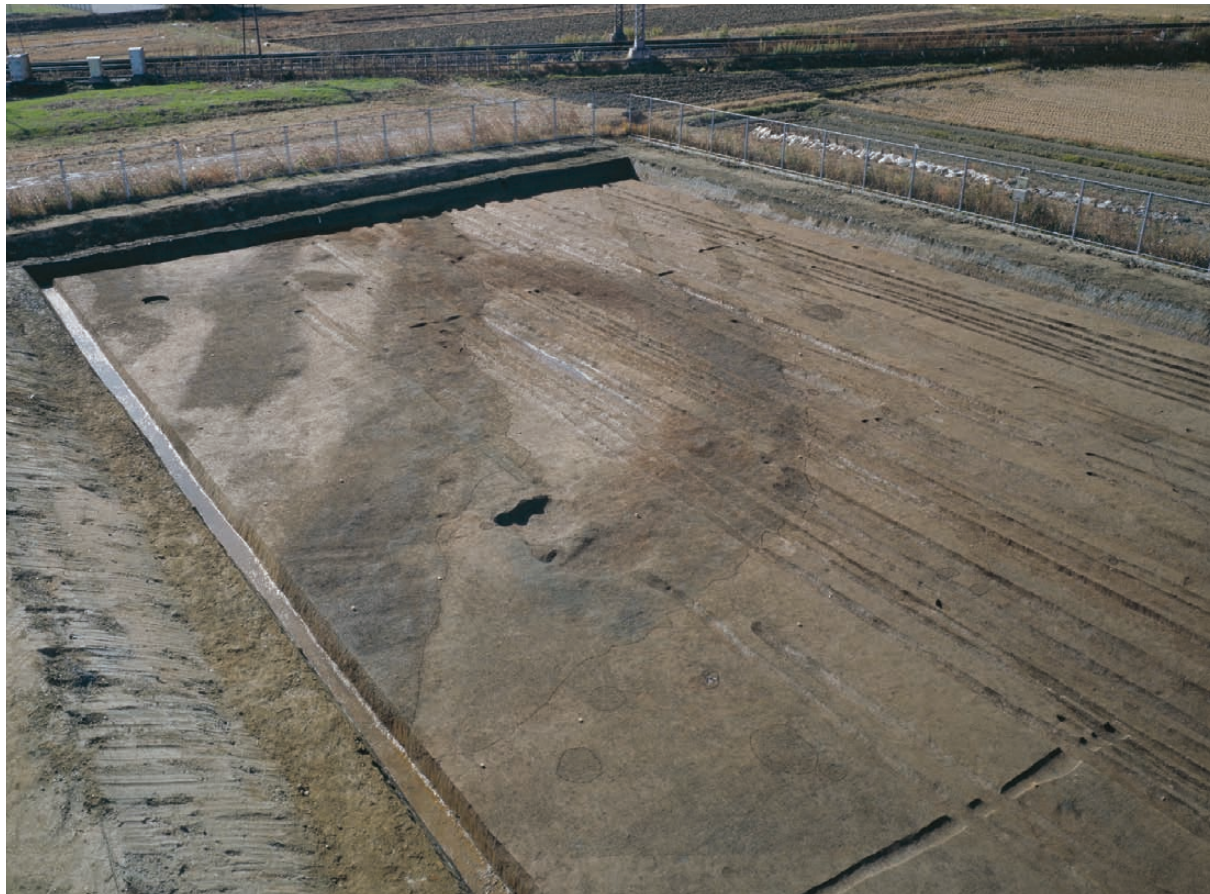
SK152 土層断面（北から）



SK267 土層断面（北東から）



SK206 土層断面（南から）



調査区南部 古墳時代遺構検出状況（北東から）



NR170 完掘状況（南東から）



NR170 完掘状況（北東から）



調査区全景 古墳時代遺構完掘状況（北西から）



調査区全景 古墳時代遺構完掘状況（南西から）



SD249 完掘状況、SD365・SD369・NR397 検出状況（南東から）



調査区北東部 古墳時代遺構完掘状況（南東から）



SD249 南端 土層断面（北西から）



SD369 中央部 土層断面（北から）



SD380 土器出土状況（北北西から）



調査区北東部 古墳時代遺構完掘状況（北西から）



SD380 土器出土状況（東から）



SD380 土器出土状況（南西から）



調査区南部 IV層除去後 古墳時代遺構検出状況（北から）



SH345・SD310・SD311 検出状況（北から）



NR170 西岸 古墳時代遺構完掘状況（南西から）



SH345 周辺 古墳時代遺構完掘状況（東から）



SH345 柱穴・床面・炉跡・壁溝検出状況（北東から）



SH345 柱穴・炉跡検出、壁溝完掘状況（北東から）



SH345 柱穴・炉跡検出、壁溝完掘状況（南西から。十字畔除去後）



SH345 建物掘方完掘状況（北西から。床面形成盛土の除去後）



SH345 東隅 焼土・炭化物出土状況（西から）



SH345 南隅 焼土・炭化物出土状況（北北西から）



SH345 中央 炉跡埋土断面（北から）



SH345 中央 炉跡炭化物出土状況（北から）



SH345 中央 炉跡炭化物断面（東から）



SH345 中央 炉跡完掘状況（北から）



SH345 南柱 土層断面（北東から。SP388）



SH345 西柱 土層断面（北東から。SP385）

図版 24



SH345 北柱 土層断面（北東から。SP386）



SH345 東柱 土層断面（北東から。SP387）



SH345 北東部 土層断面（北西から）



SH345 南西部 土層断面（北西から）



SH345 南東部 床面下 SX396 土層断面（北東から）



SD310・SD355 土層断面（北東から。左が SD310）



SX390・SD311 土層断面（南西から。右が SD311）



SH345・SD311 土層断面（南西から。右が SD311）



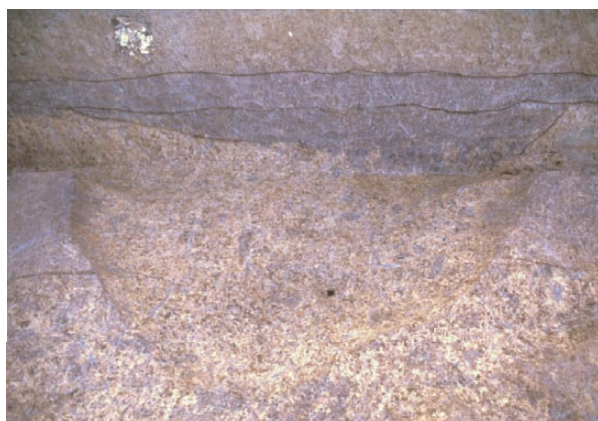
SD285 北西端 土層断面 (南西から)



SD287 東部 土層断面 (南東から)



SK362 土層断面 (南東から)



SK348 土層断面 (東から。調査区西壁)



SD355 土層断面 (南東から)



SX371 土層断面・遺物出土状況 (南南東から)



SD380 北端 土層断面・遺物出土状況 (南南西から)



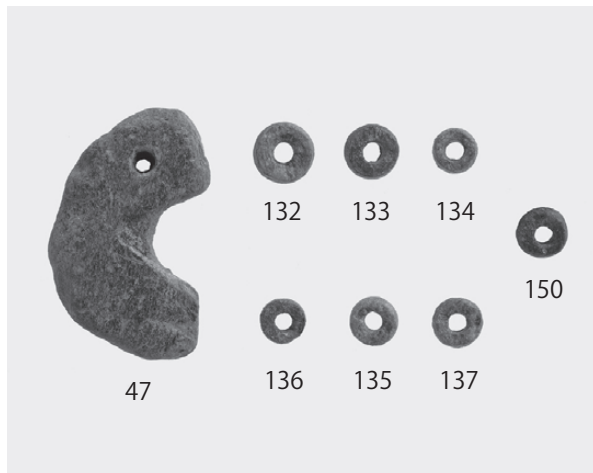
NR170 畔土層断面 (南西から)



SD380 出土土器 (280・281・283~285・289~293)

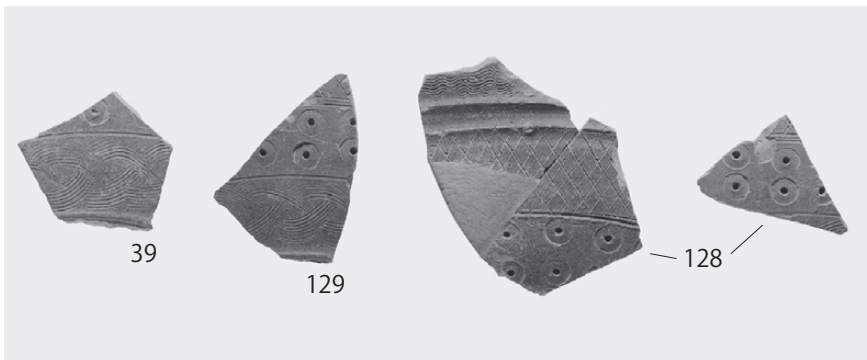
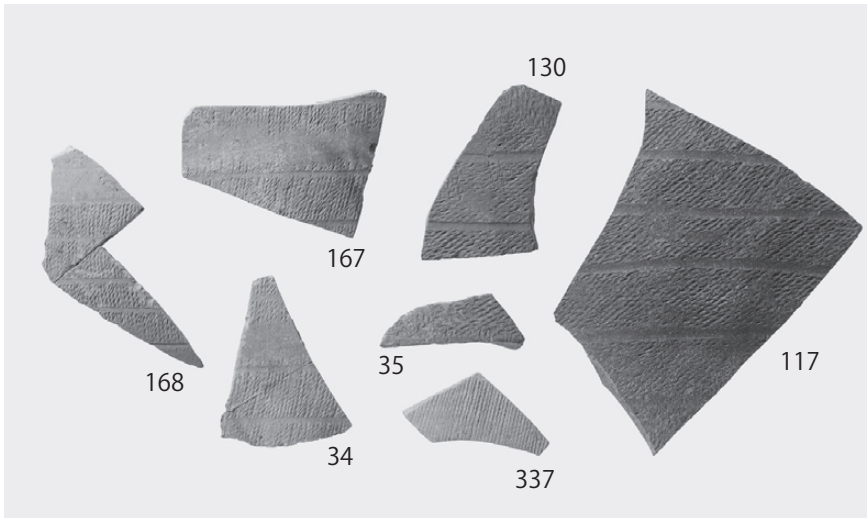


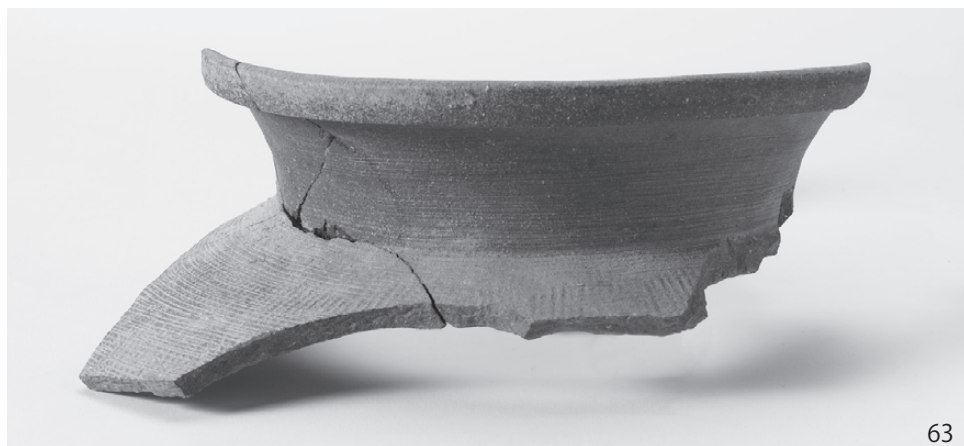
SD380 出土土器 (251・255~260・269・270・276)



図版 28

平安時代後期、鎌倉時代遺構出土遺物②、SK190出土遺物①

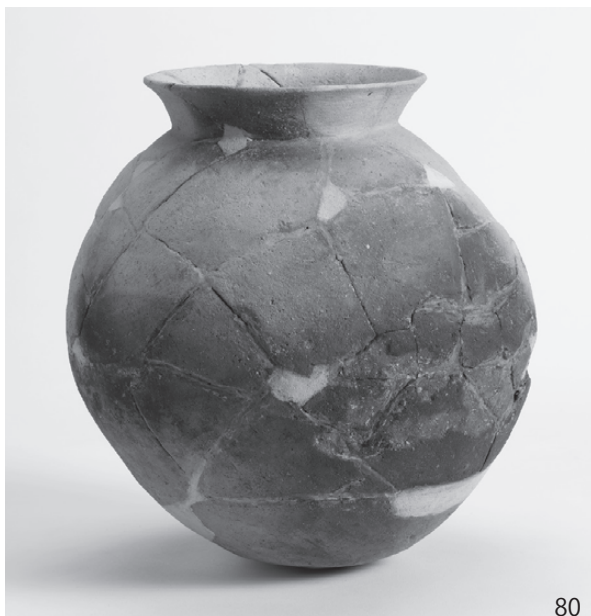




図版 30

SK202出土遺物②





图版 32

SK202出土遺物④





97



98



99



100



101



102



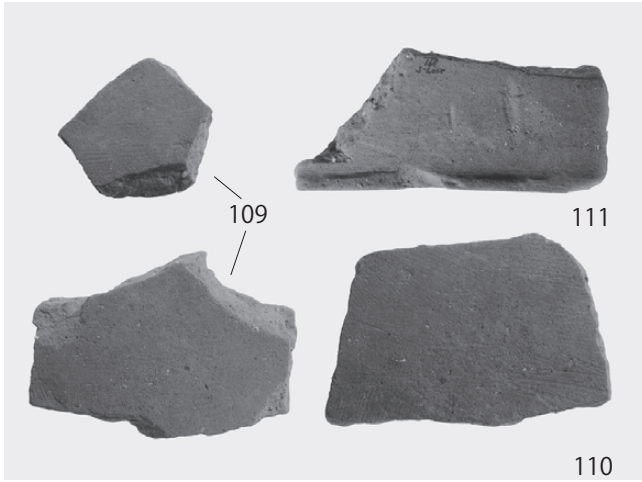
104



105

图版 34

SK202出土遺物⑥、SD191出土遺物





119



120



122



139



140



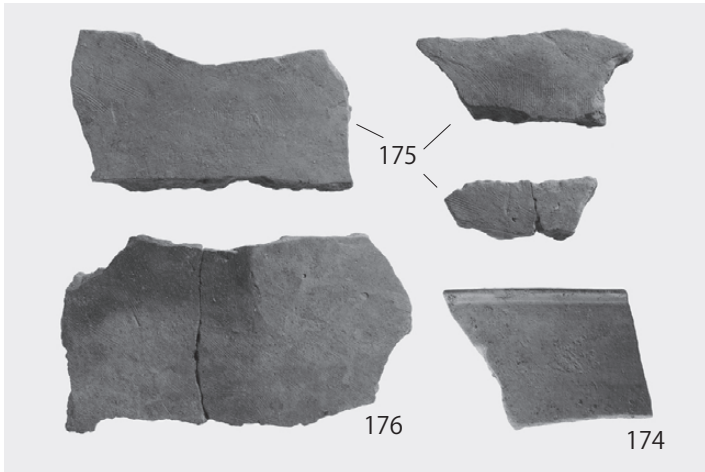
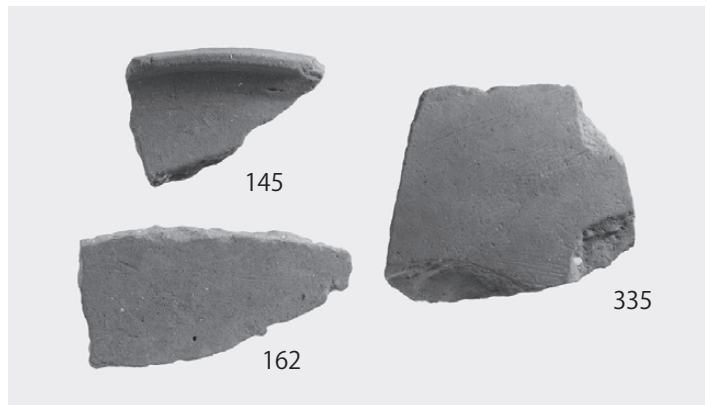
146



144

図版 36

その他古墳時代中期遺構出土遺物②、NR170出土遺物①





图版 38

NR170 出土遺物③





208



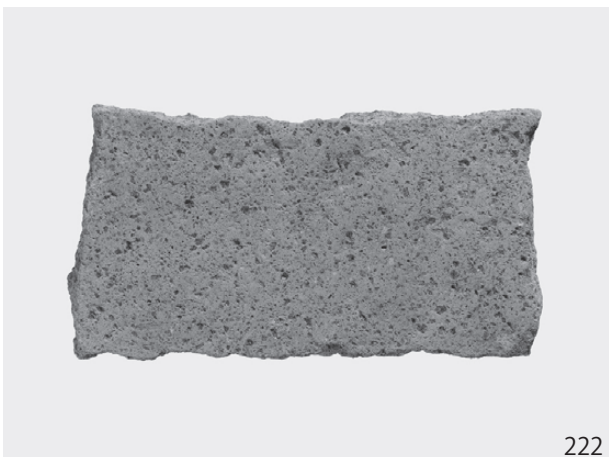
215



216



217



222



224

図版 40

S H 3 4 5 出土遺物
S D 2 4 9 出土遺物 ①









251



255



256



257



258



259





264



265



268



269



270



271



273



275

图版 46

S D 3 8 0 出土遺物 ⑤





291



293



292



296



297



299



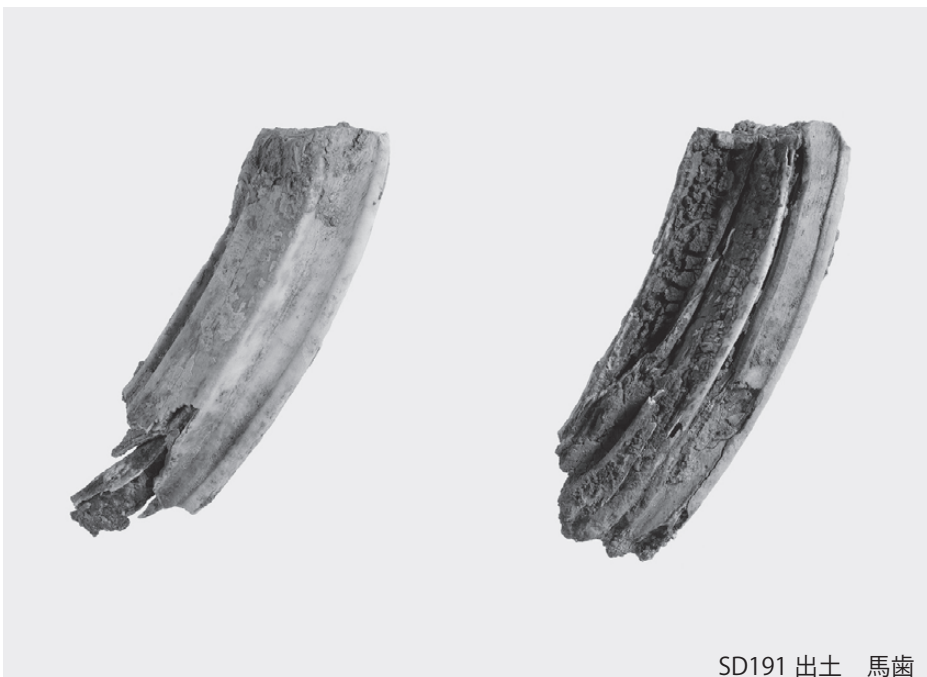
301



302

図版 48

その他古墳時代初頭遺構出土遺物②、攪乱出土遺物、SD191出土馬歯





橿原市埋蔵文化財調査報告 第17冊

新堂遺跡Ⅴ

—京奈和自動車道「御所区間」建設に伴う発掘調査報告書—

発行年月日 令和3（2021）年9月30日

編集・発行 奈良県橿原市教育委員会

印刷 株式会社 サカタ企画印刷

奈良県磯城郡田原本町松本 131-1